

平成18年度(2006年度)修士学位論文

建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究

建築一般誌と建築専門誌の作品説明文から読み取れる両誌の特質分析

指導教員

坂牛卓

信州大学大学院工学系研究科社会開発工学専攻

坂牛研究室

05TA324D 高橋伸幸

目次

主題 建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究

副題 建築一般誌と建築専門誌の作品説明文から読み取れる両誌の特質分析

1章 序論	2	参考文献・参考資料
1-1. 研究の背景		謝辞
1-2. 研究の目的		
1-3. 既往研究		資料
1-4. 研究対象		・ 建築雑誌一覧 ・ 反復語の作品別集計結果
2章 CasaBRUTUS の特徴	6	・ 場面の変遷の作品・雑誌別パターン一覧 ・ 対象建築作品の全説明文
2-1. CasaBRUTUS の編集方針		
2-2. CasaBRUTUS のテーマの推移		
2-3. 小結		
3章 分析・考察	24	
3-1. 分析対象	25	
3-1-1. 分析対象数		
3-1-2. 建築家		
3-1-3. 建築用途		
3-1-4. 文章量		
3-2. 表題	31	
3-3. 特徴的な単語	37	
3-3-1. 具体的数値		
3-3-2. 固有名詞		
3-3-3. 反復語		
3-4. 修辞技法	57	
3-4-1. 比喩表現		
3-4-2. 擬音語・擬態語		
3-4-3. 体言止め		
3-5. 記述内容の特徴	75	
3-5-1. 施主・利用者		
3-5-2. 場面の変遷		
4章 結論	87	
4-1. 結		

第 1 章 序

1-1. 研究の背景

定期的に最新の建築作品を紹介している建築雑誌は建築意匠設計に大きな影響を与えているメディアのひとつといえる。このような建築雑誌はその内容や読者層から大きく建築一般誌と建築専門誌の2つに分類することができる。建築専門誌では読者の大半を占める専門家向けの社会的な問題や技術面、あるいは環境問題に関する専門的で充実した内容が特徴である。また建築一般誌においては広く一般の人を対象とした分かりやすい誌面と分野を超えた社会と遊離しない内容が特徴である。近年、両雑誌の状況が各々大きく変化している。

90年代後半までの意匠に関わる建築雑誌の主流は『新建築』『都市住宅』『建築文化』『SD』などの建築専門誌であった。しかし同時期を境に上記4冊の雑誌は『新建築』を除き休刊となり、建築専門誌は全体として縮小の方向へと進んでいる。そこに建築専門誌と入れ替わるようにして新たに『CasaBRUTUS』をはじめとし『pen』『室内』『I'm home』『Memo 男の部屋』『LiVES』『都心に住む』『LiViNG EXE』の8冊の建築一般誌が次々と創刊され建築雑誌の中での地位を確立し始めている。その要因として挙げられるのは一般読者の需要に応えた誌面づくりである。つまり生活を営む上で必要不可欠なものとして捉えられていた建築をファッションやグルメと同じように現代社会における生活水準を示す情報として読者へと発信しているのだ。この建築のメディアへの露出に伴い、社会の建築に対するイメージも変化し、時代は建築ブーム・建築家ブームであると言っても過言ではない。その結果、建築一般誌は建築専門誌においては少なかった一般の読者を取り込むことに成功した。それに伴い一般の人たちの建築に対する意識と知識は専門誌主流の時期に比べて高くなりつつある。さらに、そうした一般の読者が一般誌から得た知識をもとに建築家に仕事を依頼する場合や実際に建築を訪れる場合が増加している。そのため建築家は建築意匠設計を行う上で建築一般誌の影響力を無視することはできなくなりつつある。

また東京大学教授である大野秀敏は『建築評価のフレームワーク』^{文1)}の中で一般建築誌が活発になる前の建築界における評価体制の問題点とメディアの関係を以下のように述べている。

建築の批評や評価と言う事を考えた時、すぐ思い浮かぶのは建築関係の雑誌と賞であろう。建築の雑誌は、作品紹介の他に建築の批評を掲載しているので狭義の評価の媒介といえるが、何より作品紹介という形で作品を選択することによって、建築作品の評価を下している。このような評価は少なくとも建築関係者のあいだではある種の権威となっている。言ってみれば、雑誌に掲載されて初めて建物から「建築作品」に昇格するのだから、大抵の建築家にとっては雑誌への掲載は気になる。しかし、これらの評価システムは荒っぽく言えば建築界内部の、いわば仲間内の評価である。そして、現代日本の「建築界」内部の議論はかなり活発であると言ってもよいだろう。例えば、ジャーナリズムということに限っても、日本は建築ジャーナリズムの大国であり、デザインから施工まで建築のあらゆる分野を扱う雑誌が出版され、しかも各分野にそれぞれ複数出版されている。ところが、目を「建築界」の外に向けてみると内部の活発さとは裏腹に、建築に対する無関心が依然として目立つ。例えば、よく言われるところであるが、一般誌上で建築がまともな議論の対象となることはまれであり、社会の指導的立場にある人達の建築の理解には寂しいものがあると言わざるをえない。一般誌で扱われること、小説や美術や映画のように建築が一般の人達の話の種になることは、言ってみれば建築界の悲願であった。(大野, 1997)

さらに続けて大野は建築界が外部からの評価を受けるために必要なキーワードを以下のように示した。

建築界の外からの評価のための5つのキーワード

1. 建築界の外部の人
2. 現役の建築
3. 都市
4. 設計者選定
5. 社会的存在理由

このうち本研究に関連する「1. 建築界の外部の人」と「2. 現役の建築」を続けて取り上げる。

「1. 建築界の外部の人」

現在の建築の評価は、ほとんどが建築関係者に限定され、外部の人も建築界に呼び込んでなされており、それはほとんど仲間内の評価である。これが、音楽や小説であれば、少なくとも聴衆や読者という形で、音楽界や文学界の生産に携わっていない人間が評価者になっている。(中略) 建築の評価に決定的に欠けているのは、建築の受容者側からの評価である。建築の供給者である建築界の議論は建築をどのように作るか(技術的、計画論的、デザイン論など)という視点に偏るのは当然である。(大野, 1997)

「2. 現役の建築」

現在の評価活動は竣工直後の生まれたばかりの「作品」論的評価と用を終えてからの歴史的評価に二分されている。そのなかでも、生まれたばかりの状態での「作品」論的評価が建築の評価の主役をつとめるのは、「作品」と言う概念が作家性と革新性に関連があるからである。建築が生まれた直後と死んでからしか評価されないということは、建築が現役で働いている状態を建築界はまともにも扱っていないということである。…建築も大抵の場合は何らかの実用的な目的をもって建てられるのに、その目的を果たしているかどうかは評価の対象外になっているのである。現役の評価が無いという事は、建築のデザインを審美的な対象としての性格を強調することであり、また一種の流行の問題に置き換えてしまうことでもある。現役の評価が可能になるためには、建築の観衆が育つことであり、建築の評価に外部の人も参加することであり、これらは相互に密接な関係にある。(大野, 1997)

ここで大野は建築界が抱える問題点を指摘すると同時に直接記されていないが専門誌の問題点、一般誌の可能性を指摘している。専門誌の問題点は評価の立場が供給者側に偏っている点と現役の建築が評価対象外である点の2点である。これに伴い建築界と一般の人達との接点が希薄となり、一般の人達の建築への無関心が増加している。この問題点の解決には建築界の外部からの視点が加わることが必要であり、一般誌の登場がそれを携えている可能性があるとし唆している。

1-2. 研究の目的

上記のような背景から建築一般誌と建築専門誌との比較を通じて、建築一般誌の情報伝達の特質を理解し、建築意匠設計の構造の一端を明らかにすることを目的とする。

1-3. 既往研究

雑誌の記述を分析した代表的な既往研究のひとつとしてロラン・バルトの『モードの体系』^{文2)}が挙げられる。バルトは同著においてファッション雑誌に掲載されているファッションの説明文に注目し、その分類・分析を行った。また建築雑誌を対象とした研究は東京工科大学奥山研究室による研究^{文3)}^{文4)}^{文5)}^{文6)}^{文7)}、神戸芸術工科大学大学院花田研究室による研究^{文8)}などで行われているが、その多くが建築専門誌を対象としたものである。さらに少数であるが建築一般誌の研究は日本文理大学近藤研究室による研究^{文9)}があるが、その研究対象は主として住宅である。本研究はこれと異なり建物用途による対象の制限を行っていない。

1-4. 研究対象

建築雑誌では文章と写真の2種類の方法で建築の情報を読者に提供している。文章が不可視的媒体であるのに対して写真は可視的媒体である。その意味で文章の情報伝達力は視覚性において劣るものの写真では伝えきれない建築家の思想や施主の要求、周辺環境の歴史などの情報を伝達可能にする。そこで本研究では建築一般誌と建築専門誌の作品説明文に着目し、これらを研究対象とする。

建築一般誌の代表としてマガジンハウス出版の『CasaBRUTUS』(以下、一般誌と表記)を選択する。その理由は建築一般誌の中で『CasaBRUTUS』が現在の建築ブームの火付け役となったと言われているためである^{文10)}。調査範囲は創刊(1998年冬号)から69号(2005年12月)までとする^{注1)}。また建築専門誌の代表として新建築出版の『新建築』、『新建築住宅特集』(以下、専門誌と表記)を選択する。その理由は現在発刊中の建築専門誌の中で最も歴史が古いためである。

さらに上記の前提のもと、両誌ともに掲載されている、説明文が8文以上で構成されている^{注2)}、という2つの条件を満たす建築作品説明文を分析対象とした^{注3)}^{注4)}。

【注釈】

- 1) 研究開始直前(2006年1月)までに発行されたもの。
- 2) 文章量が8文以上の説明文を対象とした理由は、一般誌において8文未満の説明が大半を占めており、8文以上で説明されている建築作品は一般誌における注目度が高く、記述内容に一般誌の特徴が十分に表れていると考えられるためである。
- 3) 対照条件を満たした建築作品が同誌上で重複した場合は、文章量が多いほうを採用した。
- 4) 専門誌は新建築・新建築住宅特集を対象としているため、結果として研究対象は日本建築家の建築作品または海外建築家の日本国内における建築作品となる。

第2章

CasaBRUTUS の特徴

2-1. CasaBRUTUS の編集方針

『CasaBRUTUS』は、マガジンハウス出版の建築やデザインなど、衣食住をテーマにした雑誌である。もともとは同社から発刊されている『BRUTUS』の特別増刊号であった。それが1998年12月から季刊誌として創刊された。その後7号発行の後、2000年11月号より月刊誌となり現在に至る。発行部数が10万部近くであり、1万人強の定期購読者のプロフィールを見ると建築関連が約3割、デザイン関連が約2割を占めている。^{文11)}

マガジンハウス編集長である吉家千絵子氏によれば『CasaBRUTUS』の特徴は以下のように述べられている。

『カーサブルータス』編集部ではあくまでも一般誌であると位置付けている『CasaBRUTUS』。(中略)編集手法は大きく2つある。第一が、徹底的に「カッコいい」ことである。(中略)第二に、「徹底して情報収集を行うこと」。(中略)誌面では、収集した大量の情報を、全く知らない立場から質問するように、鋭く切り込んでいる。(中略)「わかりやすい表現」を信条とする『CasaBRUTUS』では専門誌が専門という枠に縛られ、自らの編集方針をあれこれ模索する一方で、自由な表現を獲得したのである。^{文12)}

2-2. CasaBRUTUS のテーマの推移

CasaBRUTUS の内容の変化を「特別増刊期」「季刊期（1998年～2000年）」「月刊期（2000年～2003年）」「月刊期（2004年以降）」4つの期間に分けその特徴をそれぞれ以下に記す。

・特別増刊期

雑誌『BRUTUS』の誌面で取り上げたさまざまな国の人間たちのさまざまなライフスタイルを再編集しまとめたものが最初の CasaBRUTUS の出発点である。その内容の中心は海外における生活の中のデザインを総合的に紹介するものであった。その中の一分野として建築が取り上げられている。（図1）



図 1

・季刊期（1998～2000）

1998年

Winter(vol.01)：タイトルなし

この号の目次には「Renewal 1st Issue」（再発行初版）というようにこの号を期に Casa は特別増刊号としてではなく季刊誌として創刊される。誌面には建築家が設計した建築作品はわずかしかが掲載されておらず、誌面の中心を飾るのはイタリアにおける「生活」のである。生活風景、ワインや料理などが詳細に紹介されている。また雑誌後半では世界各地の都市にスポットを当てた特集が組まれており、その中で建築が街の様子と共に紹介されている。（図2）



図 2

1999年

Spring(vol.02)：タイトルなし

この号では「有名建築家が作った海の家」としてル・コビュジエや隈研吾の建築作品が取り上げられている。ル・コルビュジエの作品紹介には作品の写真だけでなく設計を行っているコルビュジエ本人の写真がある。しかし、他の建築家の作品には建築家の写真は登場せず、名前だけの記載となっている。（図3）



図 3

Summer(vol.03)：北欧デザインが気になる。

この号から特集が組まれるようになる。特集の中心は北欧デザインであり、家具・インテリア・建築という順番で紹介されている。建築関連では建築家 A・ヤコブセンが紹介されている。また雑誌後半ではインテリアが取り上げられている。しかし雑誌における建築に関する誌面は「衣」や「食」と比べ少ない。（図4）



図 4

Autumn(vol.04) : コンラン卿が選んだメイド・イン・京都。

京都における食器・小物をコンラン卿が紹介していく。このような「有名人が紹介する」という特集がこの号から始まった。雑誌中盤で安藤忠雄の特集が組まれており、海外の建築家やアーティストが安藤の魅力を語っている。また日本国内の ANDO 建築を集中して紹介している。(図 5)



図 5

Winter(vol.05) : デザインホテルに泊まりたい。

デザインホテルに着目した特集が組まれた号である。レンゾ・ピアノやピーター・ズントーなどの海外建築家の手掛けたデザインホテルや世界各国における有名デザインホテルを紹介している。またファッション誌のようなモデルの写真がデザインホテルと共に掲載されている。(図 6)



図 6

2000 年

Spring(vol.06) : 誰にでもわかるル・コルビュジエ

最新のデザインニュースが雑誌序盤で組まれるようになる。1 人の人物を特集の中心に置いた初めての号である。建築家ル・コルビュジエの建築作品だけでなくソファなどの彼に関連するインテリアも紹介されている。またコルビュジエ自身がどのような人であったのかをクイズや図、絵を用いてわかりやすく説明している。(図 7)



図 7

Summer(vol.07) : TOKYO ベスト 100

初めて日本を舞台とし、東京という 1 都市に着目した号である。建築家・丹下健三さんと東京との関係や、東京における注目最新建築・ショップ空間など建築を中心に置いた視点から特集が組まれている。雑誌中盤では建築写真家ジュリアス・シュルマンが、雑誌後半では建築家バックミンスター・フラーが取り上げられている。(図 8)



図 8

季刊期前半では建築作品よりもファッション商品紹介やデザイナーによるインテリア、世界の食など生活の総合デザインに関する特集と誌面づくりが主に行われている。季刊期後半にかけて建築に関する特集が組まれるようになる。建築作品は海外のものが中心であり日本国内のものは少ない。そのため日本人建築家による建築の紹介は稀であった。

・月刊期（2000年～2003年）

November(vol.08)：パウハウスなんかこわくない。

この号から月刊誌となる。それに伴い表紙デザインが変化し月番号・値段が載るようになる。特集はパウハウス。パウハウスの歴史からそこで創造された建築やデザイン・インテリアの数々を紹介している。また関連して建築家ミース・ファン・デル・ローエが彼の建築作品やインテリアと共に紹介されている。雑誌中盤ではファッションブランドと有名建築家の作品を関連させた特集が組まれる。雑誌後半では建築家谷内田章夫の集合住宅が紹介されている。雑誌の最後に来月号に関する問題が掲載されるようになる。(図9)



図9

December(vol.09)：桂離宮は400年前のモダン住宅でした。

特集は桂離宮。桂離宮の魅力と建築家たちが桂離宮からどのような影響を受けたかを検証している。雑誌後半ではオランダ建築の魅力を紹介している。(図10)



図10

2001年

January(vol.10)：住みたいのはホテルスタイルの部屋。

ホテルに着目した号である。ホテルのインテリアをカタログ形式で紹介。対象はすべて海外のホテルである。関連してインテリアカーペットとイサム・ノグチの照明が紹介されている。雑誌後半で建築家ピーター・ズントーの特集が組まれている。(図11)



図11

February(vol.11)：柳宗理に会いませんか？

デザイナー柳宗理を取り上げた号である。柳宗理の作品である家具・公共建造物・食器とファッションとを組み合わせるファッション雑誌のように紹介されている。この号を皮切りに2月、9月号の年2回、パイリンガル&ワンテーマの特別号がつけられるようになる。(図12)



図12

March(vol.12)：建築・デザインをめぐる旅に出よう。日本 BEST100

誌面は日本における最新の建築が中心を占め、それに関連してショップや家具が紹介されている。誌面後半には建築写真家エズラ・ストラーの特集が組まれている。(図13)



図13

April(vol.13) : 建築 ファッション 今、モードを語るなら、服より空間デザインです。

建築とファッションブランドとを関連させた特集である。その構成は建築外観、内観、家具という順番でファッションモデルとの写真が掲載されている。建築はファッションブランドの店舗や建築家の有名建築などである。(図14)



図14

May(vol.14) : 買いつけに行くベトナム、タイ コンラン卿が選んだアジア雑貨。

特集の中心はコンラン卿がアジアの国々で選んだ雑貨の紹介である。特集内には建築作品はほとんど登場しない。「食」と「住」の関連としてカフェの家具やインテリアに注目している。誌面後半で建築家バックミンスター・フラーの特集が組まれる。(図15)



図15

June(vol.15) : イタリアは最強のデザインブランドです。

イタリアにおけるデザインを総合的に取り上げた号である。イタリアデザインの巨匠たちへのインタビューから最新のプロダクトデザインまでと広範囲を取り扱っている。特集内には建築作品は登場しない。(図16)



図16

July(vol.16) : ケース・スタディ・ハウスは、あなたが家を作る時の理想のサンプルです。

ケース・スタディ・ハウスの現状や歴史、現在の建築への影響などを中心に置いた号である。雑誌後半にはプリッカー賞に関する特集が組まれている。(図17)



図17

August(vol.17) : 世界ベスト100 今、ヴァカンスの最終目的地は、あの有名建築です。

世界各地のヴァカンスで訪れるべき建築を100件紹介している号である。ビルバオやヴィトラなど当時最新の建築から用途に関係なく特徴的な海外建築だけが掲載されている。雑誌中盤からは建築家レンゾ・ピアノ設計のメゾン・エルメスが取り上げられ、続いてデザインスパに焦点が当てられている。(図)



図18

September(vol.18) : みんなのイームズ!

イームズ一色の号である。イームズの歴史や現在のデザイナーとイームズの関係などが全ページを占めている。特集内には建築作品は登場しない。(図19)



図 1 9

October(vol.19) : 建築 ファッション 2

この号から目次に世界地図が登場。その号で紹介する世界の建築や店舗がどの国にあるのかを表示している。特集は vol.13 に続き、ファッションブランドとその店舗建築について素材・インテリア・建築家と関連させて紹介している。(図20)



図 2 0

November(vol.20) : TOKYO 特集。

vol.07 に続きこの号では新たな東京の建築・デザインを紹介している。東京における計画中の建築家の高層建築、住宅、ショップインテリアを紹介。雑誌後半には特集内容をまとめた「東京新建築・デザイン 100」が冊子として添付されている。(図21)



図 2 1

December(vol.21) : 浮世絵のバイヤー? デザインホテル元祖?

建築界の怪人、F・L・ライト大特集。

特集は建築家 F・L・ライトの建築作品・家具と彼の歴史を紹介している。雑誌中盤では建築とファッションを融合させた特集が組まれている。雑誌後半には車と建築・デザインを組み合わせさせた掲載がされている。(図22)



図 2 2

2002 年

January(vol.22) : 世界の建築家&デザイナーと考えた、インテリアの最新スタイル。

インテリアに焦点を当てた号である。ドアノブから本棚まで有名建築家や有名デザイナーの個性が溢れるインテリアが紹介されている。特集内に建築作品は登場しない。(図23)

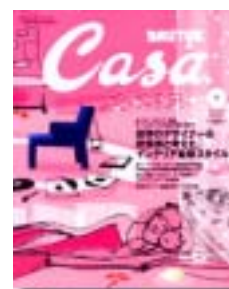


図 2 3

February(vol.23) : Looking for New Japanese Design

海外のデザイナーが日本のプロダクトデザインの魅力を紹介するという特集。特集内に建築作品は登場しない。(図24)



図24

March(vol.24) : New York 大特集

ニューヨークに焦点を当てた号である。世界各国の建築家や著名人がニューヨークの魅力や好きな建築をそれぞれ語る。また WTC の歴史や今後の方針について触れている。(図25)



図25

April(vol.25) : 美術館は、建築・デザインのテーマパークです。

世界各国の美術館を集めた特集である。日本の美術館半分、海外の美術館もう半分という割合で紹介されている。主に建築家による美術館が取り上げられている。また建築の形状・展示品・カフェなどの観点から美術館を評価している。(図26)



図26

May(vol.26) : 建築ファッション、“聖地”への旅。噂のあの場所、あのショップ、あのデザイナーのアトリエへ。

建築とファッションを中心に置いた号である。イタリアと日本の両国を舞台にファッションブランドの店舗を紹介している。雑誌中盤よりデザインホテルに関する特集が組まれている。(図27)



図27

June(vol.27) : 安藤忠雄さん、バラガン建築に連れてって!

建築家ルイス・バラガンのメキシコ国内の建築作品を建築家安藤忠雄と共に巡る特集。バラガンの生涯や残した建築作品、設計手法の特徴などが載せられている。雑誌後半では日韓ワールドカップを記念してそれに関連する建築を紹介している。(図28)



図28

July(vol.28) : マッハで変わる建築・デザイン都市のすべて。東京特集。

東京に焦点を当てた特集である。表参道・代官山・上野を中心にブティックやショップを紹介すると共に最新の建築プロジェクトを紹介している。雑誌中盤で香水と建築を関連させて紹介している。また建築家が手掛けたデザインホテルのインテリアも紹介されている。(図29)



図 2 9

August(vol.29) : 建築・デザイン好きがたどり着くのはなぜか北欧です。北欧最終案内。

北欧の建築・デザインに注目した号である。北欧の建築家アルヴァ・アアルトとアルネ・ヤコブセンを取り上げその建築作品を紹介している。雑誌中盤から映画に登場するモダン建築を特集している。雑誌終盤では建築家オスカー・ニーマイヤーが取り上げられている。(図30)



図 3 0

September(vol.30) : 安藤忠雄×旅

建築家安藤忠雄と建築との関係を彼と共に世界中を旅することで明らかにしていく特集。各国における彼の仕事風景や建築作品を紹介している。(図31)



図 3 1

October(vol.31) : 今、世界で一番おしゃれな職業は!? なんとって建築家!

-仕事風景や日常の様子など建築家の実態を徹底的に調査し紹介している号である。建築家にはどうやってなるのか、注目の建築家は、など一般の人が疑問に思っていることに答えている。(図32)



図 3 2

November(vol.32) : 建築 ファッション 4 怒涛の建築&デザイン本 100

建築とファッションを関連させた特集である。世界の有名建築でファッションモデルの撮影を行っている。また両者との関連としてブティックやショップなども取り上げている。雑誌中盤から目的別に推奨する建築・デザイン本を紹介する特集が組まれている。(図33)



図 3 3

December(vol.33) : あなたの知らないル・コルビュジエ

建築家ル・コルビュジエに焦点を当てた号である。彼の歴史から思想、建築作品、現代建築への影響などが掲載されている。雑誌中盤には有名建築の湯という特集のもと建築家が携わった施設が取り上げられている。

(図 3 4)



図 3 4

2003 年

January(vol.34) : ニッポン再発見

ニッポン再発見をテーマとして日本に関連する建築・デザインを取り上げた号である。海外における日本文化の現状とその歴史を主軸として日本文化の性質が紹介されている。(図 3 5)



図 3 5

February(vol.35) : 超・椅子特集

最新から名作まで世界各地の椅子を取り上げた号である。特集内に建築作品は登場しない。(図 3 6)

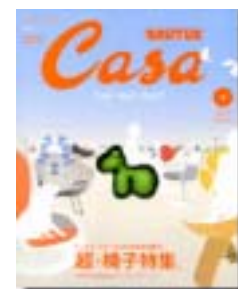


図 3 6

March(vol.36) : 中国で一体、何が起きているの?

中国の建築・デザインに注目した号である。建築家レム・コールハースと中国との関係を主軸に当時の中国建築の様子や今後の発展の可能性を取り上げている。(図 3 7)



図 3 7

April(vol.37) : 建築 ファッション 5+ アジアリゾートで建築パカンス

東南アジアやスリランカなど南国の建築を取り上げた号である。独特な雰囲気を持っている南国の建築の特徴と誕生までの歴史背景などが紹介されている。(図 3 8)



図 3 8

May(vol.38) : イタリアの新ベスト3を発表しま〜す!

イタリアの建築・デザイン・ファッション・フードだけに注目した号である。それぞれの項目で3位まで順位をつけ紹介している。(図39)

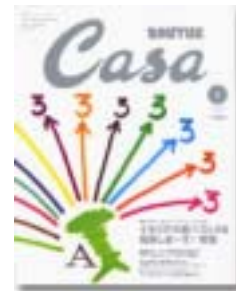


図 3 9

June(vol.39) : 6月 特集：東京 1000

当時の東京の最新情報を1000個集めた号である。六本木ヒルズをはじめ建築家による超高層ビルからショップまでの建築作品が数多く紹介されている。雑誌中盤から建築家菊竹清訓の特集が組まれている。東京での建築作品を中心に紹介している。(図40)



図 4 0

July(vol.40) : 30分で鍛える現代建築力。

2003年当時の最新建築を取り上げることで読者の現代建築に関する知識の充実を図ろうとした号である。現代建築について詳細に説明すると同時に注目する建築や建築家を取り上げている。(図41)



図 4 1

August(vol.41) : 今年の夏は「建築と海」を見に行こう!

建築と海をテーマに該当する建築を紹介している。国内外を問わず海と関係の深い建築を取り上げその魅力を説明している。具体的には新潟湾に面した朱鷺メッセ(楨文彦設計)や海の家(ル・コルビュジェ設計)などが挙げられている。(図42)



図 4 2

September(vol.42) : 安藤忠雄×旅2

vol.30に続き安藤忠雄と共に世界中の建築を巡る特集。各国に建てられた安藤の建築を共に訪ね、安藤自身にそれぞれの建築に携わった当時の背景や葛藤、思考などを聞いていくという内容。中には施工中の作品から計画段階の作品までである。(図43)



図 4 3

October(vol.43) : 建築 ファッションの大予言 100+ 阪神 77

2冊構成となっており1冊目ではファッションとアートが中心の構成であり、2冊目はプロ野球の阪神の活躍を背景に大阪の建築に焦点を当てた号となっている。(図44)



図 4 4

November(vol.44) : 建築、デザイン好きのための現代アート入門。

建築・デザインと現代アートとの関係に注目した号である。越後妻有アートトリエンナーレのような建築自体がアートも兼ねるといったものから建築を題材としたアートなど建築との融合や相違を活かした作品を中心に紹介している。(図45)



図 4 5

December(vol.45) : 「スローアーキテクチャー」に注目

スローアーキテクチャーをキーワードに世界各国の建築を取り上げている。建築家のピーター・ズントーや藤森照信などを第一人者として紹介すると同時にゆっくり作るや地場産材を使用するなどのスローアーキテクチャーの条件も提示している。(図46)



図 4 6

季刊期の特集に加え、美術館やホテルなど用途別に建築を取り上げる特集、時事と建築を関連させた特集、安藤忠雄やル・コルビュジエなど建築家個人に着目する特集、都市や国単位で着目する特集などが組まれるようになる。これに伴い季刊期と比較し建築に関連する特集が占める割合が増加し、日本建築家の建築作品が頻出するようになる。

・月刊期（2004年以降）

2004年

January(vol.46) : 2003年の建築・デザインのマスト100。

2003年を代表する建築・デザインを集めた号である。合計で100個の事例を提示し詳細に説明している。雑誌中盤からレム・コールハースとジャン・ヌーヴェルという2人の建築家と東京との関係の特集している。

(図47)



図47

February(vol.47) : a century of ISAMU NOGUCHI

芸術家イサム・ノグチに焦点をあてた号である。内容は世界各国のイサム・ノグチの作品紹介からイサム・ノグチの影響を建築やデザインの分野から捉えたり、イサム・ノグチ自身がどのような人物であったかなどを歴史と共に紹介している。(図48)



図48

March(vol.48) : 決定版!この先の住宅特集。

建築家による住宅を CasaBRUTUS ではじめて大々的に取り上げた号である。2010年の名作住宅や東京離脱などのキーワードごとに屋根の家(手塚貴晴+由比設計)や北向斜面住宅(三分一博志設計)など特徴的な住宅が紹介されている。(図49)



図49

April(vol.49) : 世界の有名ミュージアムが選ぶ、春夏の一着。

建築とファッションを融合させた特集を組んだ号である。世界各地のミュージアムを舞台にファッションが紹介される。(図50)



図50

May(vol.50) : 東京・京都、最高の2泊3日を教えます。

東京と京都の二都市の建築・デザインを扱った号である。旅行形式で各都市を回り建築・デザインを通して各都市を紹介している。付録として別のコースや訪問先への連絡方法などが記載されている。雑誌後半では芸術家サルバトル・ダリと建築の関係が特集されている。(図51)



図51

June(vol.51) : 今、世界が噂するレストランはどこだ!?

+ 建築の必読書ダイジェスト 50

世界中のレストランを集めた号である。料理の説明を中心としながらも建築家が手がけたレストランやインテリアも取り上げている。雑誌中盤からは建築本が 100 冊取り上げられ紹介されている。(図 5 2)



図 5 2

July(vol.52) : 建築ツウは、なぜルイス・カーンが好きなのか?

建築家ルイス・カーンに着目した号である。ソーク生物学研究所やキンベル美術館などカーンが設計を行った建築作品の詳細からカーン自身がどのような人物であったかを紹介している。雑誌後半では建築家がどのような車に乗っているのか、また好きな車についてなど建築家と車の関係が載せられている。(図 5 3)



図 5 3

August(vol.53) : 建築・デザインで読み解くオリンピック。

建築・デザインとオリンピックの関係に注目した号である。当時開催されたアテネオリンピックに関する建築・デザインから過去のオリンピックに関するものまで年代を超えて紹介されている。雑誌後半では建築家が手掛けたレストランが特集され、建築と食という新しい視点から建築が紹介されている。(図 5 4)



図 5 4

September(vol.54) : ニッポンのモダニズム建築 100

日本で建てられたモダニズム建築に注目した号である。实例を 100 件紹介すると同時に現代に残るモダニズム建築がどのようにして誕生したのかという歴史背景の説明から現状とその魅力について多くの建築家や著名人が語っている。(図 5 5)



図 5 5

October(vol.55) : 安藤忠雄の最新作、地中美術館がスゴイ。

+ ファッション界を騒がす、建築 デザインの大ニュース

建築家安藤忠雄の作品、直島の地中美術館が大きく取り上げられた号である。展示室の様子から構成の詳細から当時の安藤の最新建築の様子まで記されている。雑誌後半では建築とファッションの一体化として建築家レム・コールハースがプラダブティックを手掛けたことやル・コルビュジエ設計のサヴォア邸で行われたファッションモデルの写真撮影の様子が掲載されている。(図 5 6)



図 5 6

November(vol.56)：デザインセレブを追え!

デザイナーに焦点を当てた号である。デザイナーの日常や仕事風景など普段は見ることのできない様子を知ることができる。またデザイナーの歴史にも触れている。雑誌中盤で建築家青木淳が特集されている。(図57)



図57

December(vol.57)：日本のホテル大特集!

日本のホテルに焦点をあて泊まれる建築作品として紹介している。最新の建築は少なく秋吉台芸術村(1998年磯崎新設計)やホテル・イル・パラッツォ(1989年アルド・ロッシ設計)など90年代以前の作品がその多くを占め各々の詳細と共に掲載されている。(図58)



図58

2005年

January(vol.58)：ニューヨーク、新生MoMAのすべて。

ニューヨークの改築されたMoMAの魅力を建築家谷口吉生のインタビューを交えて紹介している。雑誌後半では2004年注目の世界各国の建築を取り上げている。またアーキラボ展の秘密やニューヨークの魅力や同都市と縁の深い建築家フィリップ・ジョンソンについて特集されている。

(図59)



図59

February(vol.59)：住宅案内2005

建築家による2005年最新住宅を中心に建築家への依頼方法やこれから家を建てる施主に勧める書籍を紹介している。また建築家の設計した集合住宅や別荘、ハウスメーカーによる住宅など住環境に特化した号となっている。(図60)



図60

March(vol.60)：そろそろインドに呼ばれてませんか?

インドのデザインとインドのライフスタイルを紹介している。建築ではモダニストとインドの現代建築の関係について建築家ル・コルビュジエとチャンティガールや建築家ルイス・カーンの建築作品を取り上げている。

(図61)



図61

April(vol.61) : スーパーシティ東京総力特集。Supercity Tokyo 2005

東京における最新の建築とデザインを手掛けた建築家やデザイナーの視点から読み解いていく内容。また最新のブラダブティック青山(ヘルツォーク&ド・ムーロン設計)やTOD'S青山(伊東豊雄設計)などの商業建築を第三者(フレデリック・ミゲルー氏)の観点からその見所を紹介している。(図62)



図62

May(vol.62) : 21世紀のミュージアム。

金沢21世紀美術館(SANAA設計)や富弘美術館(ヨコミゾマコト設計)を中心に世界各国の建築家による最新の美術館を取り上げた号である。また美術館だけでなく注目の展示会やキュレーターたちの意見など深く掘り込んだ内容となっている。雑誌後半では当時開催中であった愛知万博を建築の観点からその魅力を紹介している。またそれに伴い会場周辺の愛知県の注目建築も取り上げている。(図63)



図63

June(vol.63) : 津波の後のアジアへ。+追悼・丹下健三

建築家丹下健三への追悼の意が込められた内容である。建築界だけでなく政界や芸術分野など他分野の著名人からの氏との思い出や氏への言葉などが載せられている。雑誌後半では2004年12月に発生したスマトラ沖地震による大津波の被災地の様子を紹介している。特に建築分野の視点から現地の様子を紹介し、それと関連させ日本における耐震技術の現状を取り上げている。(図64)



図64

July(vol.64) : 見る、撮る、買う!建築写真の楽しみ。

建築写真家になる方法や彼らの作品、建築写真の撮り方など建築写真に焦点を当てた号である。(図65)



図65

August(vol.65) : 建築バカンス 100

世界各地の建築をバカンスの訪問地として取り上げている。2004年竣工のスペインのアグバー・タワーからフランス・パリのポンピドゥー・センターまで最新建築から名建築まで年代を問わず紹介している。またそれに関連させ各地のホテル情報を掲載し旅行ガイドブック並みの内容となっている。(図66)



図66

September (vol.66) : 丹下健三 DNA

建築家丹下健三が残した傑作の数々と氏の影響を受けた建築家たちについて紹介されている。具体的には丹下氏の歴史と共に日本国内外の建築界の変移、氏の影響を「遺伝子」と例えどのように各建築家に応用・実現されているか、氏との思い出などで誌面は構成されている。(図67)



図 6 7

October (vol.67) : 勝手にトレンド予測!

流行を大予測する内容でファッションやフードと同様に建築が取り上げられている。各項目が独立して紹介されるのではなくファッションと建築のように組み合わせて紹介されている。雑誌後半ではロハス建築の特徴を考え方から素材まで詳細に掲載している。(図68)



図 6 8

November (vol.68) : 日本デザインの超最前線、お見せします。

雑誌前半は日本のプロダクトデザインについてまとめられており建築は一切登場しない。雑誌後半に「3大巨匠の手がけた有名住宅」という表題の下、ミース・ファン・デル・ローエのファーンズワース邸、フランク・ロイド・ライトの落水荘、ル・コルビュジエのラ・ロッシュ=ジャンヌレ邸がファッションモデルと共に紹介されている。(図69)



図 6 9

December (vol.69) : ル・コルビュジエ、デザインの秘密。

建築家ル・コルビュジエのデザインに注目した号である。具体的な内容はコルビュジエとインテリアデザイナーであるアイリーン・グレイ、シャルロット・ペリアンの3人の人間関係とコルビュジエのデザインの因果関係を紐解いている。雑誌中盤には紀宮様ご成婚を記念し結婚で見る有名建築を特集している。(図70)



図 7 0

2004年から新たに住宅に着目した特集、「ファッションと建築」や「電化製品と建築」、「車と建築」、「海と建築」など他分野と建築とを融合させた特集が増えるようになる。また雑誌の主な舞台が海外から日本国内となり、日本人建築家が毎号登場するようになる。さらに特集内容が創刊当時と比較し専門性を帯びてきており『CasaBRUTUS』の専門誌化が垣間見られる。

2-3 小結

以上から CasaBRUTUS の内容は生活を主軸に置いていたものから年代を重ねるごとに建築を全面に押し出したものへ変化していることがわかる。具体的には舞台が海外から日本へと移り変わり、建築家の建築作品が充実し頻出するようになった。また積極的に建築と他分野とを関連させる特集への挑戦は創刊されてから9年と歴史の浅い CasaBRUTUS だからこそ可能である試みであると考えられる。その結果、読者は建築を身近に感じ取れるようになり、建築に対する意識を強めている。

次章より『CasaBRUTUS』(一般誌)の作品説明文を専門誌と比較・検討する。

【注釈】

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------|
| 図1 ブルー・タス特別増刊号『CasaBRUTUS』1984年9月号,表紙 | 図36 『CasaBRUTUS』2003年2号,表紙 |
| 図2 『CasaBRUTUS』1998年冬号,表紙 | 図37 『CasaBRUTUS』2003年3号,表紙 |
| 図3 『CasaBRUTUS』1999年春号,表紙 | 図38 『CasaBRUTUS』2003年4号,表紙 |
| 図4 『CasaBRUTUS』1999年夏号,表紙 | 図39 『CasaBRUTUS』2003年5号,表紙 |
| 図5 『CasaBRUTUS』1999年秋号,表紙 | 図40 『CasaBRUTUS』2003年6号,表紙 |
| 図6 『CasaBRUTUS』1999年冬号,表紙 | 図41 『CasaBRUTUS』2003年7号,表紙 |
| 図7 『CasaBRUTUS』2000年春号,表紙 | 図42 『CasaBRUTUS』2003年8号,表紙 |
| 図8 『CasaBRUTUS』2000年夏号,表紙 | 図43 『CasaBRUTUS』2003年9号,表紙 |
| 図9 『CasaBRUTUS』2000年11号,表紙 | 図44 『CasaBRUTUS』2003年10号,表紙 |
| 図10 『CasaBRUTUS』2000年12号,表紙 | 図45 『CasaBRUTUS』2003年11号,表紙 |
| 図11 『CasaBRUTUS』2001年1号,表紙 | 図46 『CasaBRUTUS』2003年12号,表紙 |
| 図12 『CasaBRUTUS』2001年2号,表紙 | 図47 『CasaBRUTUS』2004年1号,表紙 |
| 図13 『CasaBRUTUS』2001年3号,表紙 | 図48 『CasaBRUTUS』2004年2号,表紙 |
| 図14 『CasaBRUTUS』2001年4号,表紙 | 図49 『CasaBRUTUS』2004年3号,表紙 |
| 図15 『CasaBRUTUS』2001年5号,表紙 | 図50 『CasaBRUTUS』2004年4号,表紙 |
| 図16 『CasaBRUTUS』2001年6号,表紙 | 図51 『CasaBRUTUS』2004年5号,表紙 |
| 図17 『CasaBRUTUS』2001年7号,表紙 | 図52 『CasaBRUTUS』2004年6号,表紙 |
| 図18 『CasaBRUTUS』2001年8号,表紙 | 図53 『CasaBRUTUS』2004年7号,表紙 |
| 図19 『CasaBRUTUS』2001年9号,表紙 | 図54 『CasaBRUTUS』2004年8号,表紙 |
| 図20 『CasaBRUTUS』2001年10号,表紙 | 図55 『CasaBRUTUS』2004年9号,表紙 |
| 図21 『CasaBRUTUS』2001年11号,表紙 | 図56 『CasaBRUTUS』2004年10号,表紙 |
| 図22 『CasaBRUTUS』2001年12号,表紙 | 図57 『CasaBRUTUS』2004年11号,表紙 |
| 図23 『CasaBRUTUS』2002年1号,表紙 | 図58 『CasaBRUTUS』2004年12号,表紙 |
| 図24 『CasaBRUTUS』2002年2号,表紙 | 図59 『CasaBRUTUS』2005年1号,表紙 |
| 図25 『CasaBRUTUS』2002年3号,表紙 | 図60 『CasaBRUTUS』2005年2号,表紙 |
| 図26 『CasaBRUTUS』2002年4号,表紙 | 図61 『CasaBRUTUS』2005年3号,表紙 |
| 図27 『CasaBRUTUS』2002年5号,表紙 | 図62 『CasaBRUTUS』2005年4号,表紙 |
| 図28 『CasaBRUTUS』2002年6号,表紙 | 図63 『CasaBRUTUS』2005年5号,表紙 |
| 図29 『CasaBRUTUS』2002年7号,表紙 | 図64 『CasaBRUTUS』2005年6号,表紙 |
| 図30 『CasaBRUTUS』2002年8号,表紙 | 図65 『CasaBRUTUS』2005年7号,表紙 |
| 図31 『CasaBRUTUS』2002年9号,表紙 | 図66 『CasaBRUTUS』2005年8号,表紙 |
| 図32 『CasaBRUTUS』2002年10号,表紙 | 図67 『CasaBRUTUS』2005年9号,表紙 |
| 図33 『CasaBRUTUS』2002年11号,表紙 | 図68 『CasaBRUTUS』2005年10号,表紙 |
| 図34 『CasaBRUTUS』2002年12号,表紙 | 図69 『CasaBRUTUS』2005年11号,表紙 |
| 図35 『CasaBRUTUS』2003年1号,表紙 | 図70 『CasaBRUTUS』2005年12号,表紙 |

第3章

分析・考察

3-1. 分析対象

1-4の対象条件に該当した建築作品は96であり、以下これを分析対象とする。次のページの表1は一般誌を基準に分析対象を整理した表である。表の縦軸は上から対象条件に該当した作品が掲載されている一般誌の発刊年月日、ページ数が若い順番で配列されている。また表の横軸は左から

- 「番号」
- 「一般誌における分析対象の掲載年」
- 「一般誌における分析対象の掲載号数」
- 「一般誌における分析対象の掲載ページ」
- 「分析対象の建築名」
- 「分析対象の建築家名」
- 「分析対象の建築用途」
- 「分析対象の竣工年」
- 「一般誌における分析対象説明文の執筆者」
- 「一般誌における分析対象説明文の文章量」^{注1)}

- 「専門誌の種類」(sk = 新建築, jt = 新建築住宅特集)
- 「専門誌における分析対象の掲載年」
- 「専門誌における分析対象の掲載月」
- 「専門誌における分析対象の掲載ページ」
- 「専門誌における分析対象説明文の執筆者」
- 「専門誌における分析対象説明文の文章量」^{注1)}

という順序で16項目の分析対象の情報が配列されている。

表1 分析対象一覧

発行年	号	ページ	建築名	建築家	建築用途	竣工年	文	文章量
1999	SPRING	28	水ノガラス	隈研吾	別荘	1995	Noriyoshi Suzuki	30
2000	SUMMER	20	東京国立博物館法隆寺宝物館	谷口吉生	美術館・博物館	1999	Keiichiro Fujisaki	15
	1	13	ルイ・ヴィトン松屋銀座店	青木淳	商業施設	2000	Shigekazu Ohno	13
	3	24	せんだいメディアテーク	伊東豊雄	複合文化施設	2001	Keiichiro Fujisaki	53
2001	3	26	観老天命転地	荒川修作	公園施設	1995	Eni Okazaki	20
	3	135	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1990	Rie Nishikawa	15
	3	39	ミホ・ミュージアム	I・M・ペイ	美術館・博物館	1996	Seiichi Sugimae	14
	8	64	メゾン・エルメス	レンゾ・ピアノ	商業施設	2001	Shigekazu Ohno	11
	4	48	光の館	ジェームス・タレス	美術館・宿泊施設	2000	Chie Sumiyoshi	15
	4	66-67	アンパンマンミュージアム	古谷誠章	美術館・博物館	1996	Chie Sumiyoshi	11
	7	39	下馬の連続住居	北山恒	集合住宅	2002	Naoko Aono + Mika Kakegawa	13
	9	103	ビューリッツァー美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	Mika Yoshida	13
	9	104	シカゴ美術館・屏風ギャラリー	安藤忠雄	展示空間	1992	Junko Kawakami	17
	9	105	ユネスコ観想空間	安藤忠雄	公園施設	1995	Katsumi Yokota	15
	9	106	アルマーニ/テアトロ	安藤忠雄	劇場	2001	Kaoru Tashiro	12
	9	107	FABRICA	安藤忠雄	教育施設	2000	Kaoru Tashiro	14
	9	108	ヴィトラ・セミナーハウス	安藤忠雄	教育施設	1993	Katsumi Yokota	19
	9	110	ピカデリー・ガーデンズ	安藤忠雄	公園施設	2002	Megumi Yamashita	10
	9	115	淡路舞舞台	安藤忠雄	公園施設	1999	Shigekazu Ohno	8
2002	9	120	南岳山 光明寺	安藤忠雄	宗教建築	2000	Norio Takagi	14
	9	121	木の殿堂	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	Norio Takagi	14
	9	124-125	国際子ども図書館	安藤忠雄	図書館	2002	Kaz Yuzawa	16
	9	126	直島コンクリートミュージアム	安藤忠雄	美術館・博物館	1992	Naoko Aono	40
	9	131	近つ飛鳥博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	Keisuke Takazawa	11
	9	132	大阪府立茨木池博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	Keisuke Takazawa	8
	9	134	兵庫県立美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	Norio Takagi	10
	10	17	サーベントイン・ギャラリー	伊東豊雄	パビリオン	2002	Megumi Yamashita	9
	11	27	琴北町民ホール	阿部仁史	劇場	2002	Shigekazu Ohno	8
	11	68	コム・デ・ギャルソン京都店	川久保玲	商業施設	2002	Chisato Seki	16
	12	102-103	三養荘	村野藤吾	宿泊施設	1989	Naoko Aono	27
	1	23	オアシス21	大林組	バスターミナル	2002	Norio Takagi	8
	3	17	フォートワース現代美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2002	Mika Yoshida + David G. Imber	9
	7	73	護王神社	杉本博司	宗教建築	2002	Yoko Hoshino	13
	7	74	PAM	坂茂	研究所	2002	Keiichiro Fujisaki	15
	7	78	まつだい雪国農耕文化村センター	MVRDV	複合文化施設	2003	Naoko Aono	13
	7	80	ルイ・ヴィトン高知店	乾久美子	商業施設	2003	Yoko Hoshino	9
	8	42	朱鷺メッセ	横文彦	複合施設	2003	Shigekazu Ohno	10
	8	58	デル・ソル・ポニエンテ	隈研吾	飲食施設	2001	Takeo Terao	8
	8	59	国民宿舎足摺テラス	團紀彦	宿泊施設	1998	Takeo Terao	8
	8	62	なにわの海の時空館	ポール・アンドルー	美術館・博物館	2000	Pomu-Kikaku	10
	8	63	海の博物館	内藤廣	美術館・博物館	1992	Pomu-Kikaku	13
	8	64	松島ヨットハーバー・公園事務所	阿部仁史	公園施設	2000	Shigekazu Ohno	10
	9	174	野間自由幼稚園	安藤忠雄	教育施設	2004	Chisato Seki	11
	1	15	建外SOHO	山本理顕	集合住宅	2004	Shigekazu Ohno	8
	3	28	北向傾斜住宅	三分一博志	個人住宅	2003	Junko Koshima + Housekeeper	23
	3	30	プライベート・ギャラリー	塚塚隆生	個人住宅	2002	Junko Koshima + Housekeeper	20
	3	32	SHS	眞田大輔	個人住宅	2003	Junko Koshima + Housekeeper	18
	3	37	屋根の家	手塚貴晴+由比/池田昌弘	個人住宅	2001	Norio Takagi	17
	3	38	L	青木淳	個人住宅	1999	Norio Takagi	24
	3	41	S-tube	納谷新	個人住宅	1999	Norio Takagi	18
	3	46	MUJI+INFILリノベーション	吉岡徳仁	個人住宅	2004	Norio Takagi + Naoko Aono	20
	3	52	二軒家アパートメント	木下道郎	集合住宅	2003	Norio Takagi	16
	3	53	N3コニテ	横河健	集合住宅	2003	Norio Takagi	11
	3	54	Kashima Surf Villa	千葉学	別荘	2003	Norio Takagi	20
	3	66	スペースブロック ハノイモデル	小嶋一浩・曲淵英邦	集合住宅	2003	Naoko Aono	14
	7	25	まつもと市民芸術館	伊東豊雄	劇場	2004	Shigekazu Ohno	10
	8	110-111	奥社の茶屋	隈研吾	商業施設	2003	Naoko Aono	8
	10	35	ECORIUM	谷口吉生	ゴミ処理場	2004	Chisato Seki	9
	10	57	地中美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	Naoko Aono	10
	10	62	ランゲン美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	Tomo Miichi	13
	10	64	サイトウ・キネン・フェスティバル舞台美術	安藤忠雄	劇場	2004	Mari Hashimoto	15
	10	156-157	東雲キャナルコートCODAN	建築家多数	集合住宅	2003	植田実+Norio Takagi	22
	12	55	二期倶楽部東館	コンラン&パートナーズ+山本圭介	宿泊施設	2003	Nobuko Terada	19
	12	75	ホテル・イル・パラッツォ	アルド・ロッシ	宿泊施設	1989	Keiichiro Fujisaki	19
	12	78	秋吉台国際芸術村	磯崎新	複合施設	1998	Kenichiro Fujisaki	18
	2	22	G	青木淳	個人住宅	2004	Fumiko Suzuki	25
	2	28	精舎の家	大谷弘明	個人住宅	2003	Tami Okano	18
	2	30	クリスタル・ブルック	山下保博	個人住宅	2004	Tami Okano	15
	2	34	上原の家	みかんぐみ	個人住宅	2003	Naoko Aono	36
	2	38-39	トラス下の矩形	五十嵐淳	個人住宅	2004	Junko Koshima	37
	2	42	九段の家	阪根宏彦	個人住宅	2003	Junko Koshima	48
	2	44-46	展望台の家	手塚貴晴+由比/池田昌弘	個人住宅	2004	Naoko Aono	37
	2	58-59	襲の家	早草睦恵	個人住宅	2004	Junko Koshima	38
	2	60	HP	米田明/池田昌弘	個人住宅	2004	Junko Koshima	35
	2	72	The House of F.F	丸山洋志	個人住宅	2004	Naoko Aono	16
	2	109	Vague	北山恒	集合住宅	2004	Norio Takagi	20
	2	111	MESH	千葉学	集合住宅	2005	Fumiko Suzuki	18
	2	117	barres	木下道郎	集合住宅	2004	Norio Takagi	18
	2	182	勝浦の別荘	千葉学	別荘	2003	Fumiko Suzuki	25
	2	184	黒犬荘	塚本由晴	別荘	2004	Fumiko Suzuki	19
	2	186	森を捕まえる家	手塚貴晴+由比/池田昌弘	別荘	2004	Fumiko Suzuki	18
2005	2	188-189	カーザ・リベラ	西森隆雄	別荘	2003	Fumiko Suzuki	16
	4	104	ブラダブティック青山	Herzog & de Meuron	商業施設	2003	Koko Hatafuku	9
	4	105	TOD'S表参道ビル	伊東豊雄	商業施設	2004	Koko Hatafuku	10
	4	112	Dior	乾久美子	商業施設	2004	Koko Hatafuku	11
	4	113	Dior表参道	SANNA	商業施設	2003	Koko Hatafuku	11
	5	67	金沢21世紀美術館	妹島和世+西沢立衛/SANNA	美術館・博物館	2004	Naoko Aono	33
	5	114	スペイン館	アレハンドロ・ザエラ=ポロ	パビリオン	2005	Katsura Hiratsuka	34
	5	116	三井・東芝館	大江匠	パビリオン	2005	Katsura Hiratsuka	12
	5	117	トヨタグループ館	みかんぐみ	パビリオン	2005	Katsura Hiratsuka	12
	5	77-78	富弘美術館	ヨコシマコト	美術館・博物館	2005	Naoko Aono	52
	5	135	豊田市美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1995	Kazumi Yamamoto	19
	10	105	竹中工務店本店ビル	菅原二	オフィス	2004	Norio Takagi	43
	10	172-173	モエレ沼公園	サム・ノグチ+アーキテクトファイブ	公園施設	2005	Rie Nishikawa + Ai Sakamoto	15
	10	177	札幌ドーム	原広司	競技施設	2001	Rie Nishikawa + Ai Sakamoto	8
	11	230	House YK / ILANDS	赤松佳珠子	個人住宅	2003	Naoko Aono	19

専門誌名	掲載年	月	ページ	文	文章量
sk	1995	7	163-164	隈研吾	78
sk	2001	5	78-79	谷口吉生	47
sk	2000	12	145	真神尚史/青木淳建築設計事務所	9
sk	2001	3	102	東健男/伊東豊雄建築設計事務所	73
sk	1995	11	184-185	荒川修作	31
sk	1992	7	261	谷口吉生	28
sk	1996	9	116	佐藤修/紀昶館設計室	46
sk	2001	8	84-85	レンゾ・ピアノ	37
sk	2000	8	173	石田大五	21
sk	1996	11	194	古谷誠章	51
sk	2002	5	150-151	北山恒	21
sk	2002	3	90-91	安藤忠雄	41
sk	1993	1	212	安藤忠雄	8
sk	1996	3	149	安藤忠雄	19
sk	2001	12	99	安藤忠雄	15
sk	2000	9	94-95	安藤忠雄	30
sk	1994	2	144-145	安藤忠雄	33
sk	2003	3	170	安藤忠雄	15
sk	2000	7	62-63	安藤忠雄	29
sk	2001	1	88-89	安藤忠雄	33
sk	1994	7	160	安藤忠雄	26
sk	2002	7	60	安藤忠雄	22
sk	1993	7	202	安藤忠雄	26
sk	1994	9	153	安藤忠雄	17
sk	2001	11	123	安藤忠雄	22
sk	2002	9	100	安藤忠雄	10
sk	2002	9	108	三好隆之/伊東豊雄建築設計事務所	12
sk	2002	7	148	阿部仁史	10
sk	2002	9	152	川久保玲	12
sk	1989	5	297	近藤正志	45
sk	2002	11	123	葛西秀樹/大林組	26
sk	2003	5	80-81	安藤忠雄	47
sk	2003	2	171-173	杉本博司	78
sk	2003	1	62	坂茂	15
sk	2003	8	105	ヤコブ・ファン・ライス/MVRDV	17
sk	2003	5	121	乾久美子	24
sk	2003	8	54	福永知義/横総合計画事務所	13
sk	2001	7	137	隈研吾	16
sk	1999	10	183	團紀彦	13
sk	2000	9	104-105	ポール・アンドルー	65
sk	1990	7	276-277	内藤廣	52
sk	2000	4	98-99	阿部仁史	15
sk	2004	7	89	安藤忠雄	19
sk	2004	7	102-103	山本理顕	116
jt	2003	11	37	三分一博志	16
sk	2002	9	181	塚塚隆生	15
jt	2004	3	108-109	眞田大輔/すわ製作所	31
jt	2001	8	45	手塚貴晴+手塚由比	63
jt	2000	4	43	青木淳	63
jt	1999	6	156	納谷新	15
jt	2004	3	142	西川英彦/吉岡徳仁	56
sk	2003	9	181	木下道郎	16
sk	2003	5	135	横河健	12
sk	2004	1	135	千葉学	33
sk	2003	9	164	小嶋一浩	23
sk	2004	7	58-59	竹内申一/伊東豊雄建築設計事務所	36
sk	2003	7	167	隈研吾	22
sk	2004	7	53	谷口吉生	16
sk	2004	9	80	安藤忠雄	36
sk	2005	1	83	安藤忠雄	39
sk	2004	11	85	安藤忠雄	15
sk	2005	6	155	渡辺真理+木下庸子+高橋貴+高橋晶子	17
sk	2003	10	89	山本圭介	13
sk	1990	1	100	アルド・ロッシ	19
sk	1999	5	145	磯崎新アトリエ/平林繁	19
sk	2004	9	147	青木淳	30
jt	2004	5	68	大谷弘明	25
sk	2004	9	189	山下保博	18
jt	2004	4	33	吉岡寛之/みかんぐみ	16
jt	2004	9	28	五十嵐淳	23
jt	2004	8	126	阪根宏彦	25
jt	2005	1	55	横尾真+池田昌弘/池田昌弘建築研究所	11
jt	2004	7	69	早草睦恵	30
jt	2004	7	83	米田明	11
jt	2004	11	42-43	丸山洋志	52
sk	2005	2	111	北山恒	21
jt	2005	3	33	千葉学	10
sk	2005	8	163	木下道郎	18
jt	2003	10	24	千葉学	18
sk	2004	11	31	塚本由晴	44
jt	2004	10	82	手塚貴晴+手塚由比	38
jt	2003	10	52	西森隆雄	16
sk	2003	9	50, 53	Herzog & de Meuron	73
sk	2005	1	97	伊東豊雄	15
sk	2004	12	147	乾久美子	10
sk	2004	1	69	石上純也/SANNA	16
sk	2004	11	80	川嶋貴介/SANNA	13
sk	2005	5	133	編集部	9
sk	2005	5	166	相原和弘/プランテック総合計画事務所	11
sk	2005	5	163	鶴田洋平/みかんぐみ	8
sk	2005	4	62-63	ヨコシマコト	101
sk	1996	1	124	谷口吉生	33
sk	2004	12	80	菅原二	33
sk	2003	8	100	川村純一/アーキテクトファイブ	26
sk					

表1より分析対象のもつ性質として「建築作品数」「建築家」「建築用途」「文章量」について以下、順次見ていく。

3-1-1. 分析対象数

図1は一般誌における年代別の分析対象数の推移を示したものである。図より全体的に分析対象数が年々増加傾向であることがわかる。詳しく見ると創刊当初の1998年からは分析対象は抽出されず、1999年、2000年においてもそれぞれ1件とわずかであった。それが2001年から増加し始め、2002年を境にその傾向が著しくなっている。これから1-4で設けた条件に合う説明文(8文以上で日本人建築家による建築作品に関するもの)が一般誌において増加傾向にあることが読み取れる。つまり一般誌における日本人建築家の建築作品の注目度が上昇しているといえる。

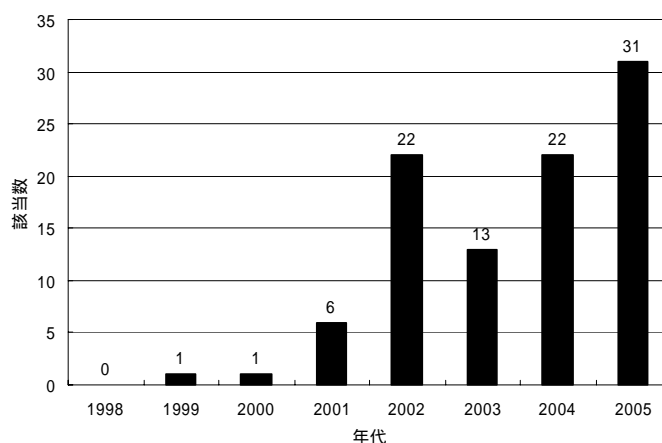


図1 一般誌における分析対象数の推移

3-1-2. 建築家

表2は分析対象作品の建築家名とその作品数の集計結果を示したものである。結果より建築家の人数は合計で56人(グループ)であった。詳しく見ていくと該当作品数は他の建築家よりも大きな差をつくり安藤忠雄が20作品で最多であることがわかる。またこの集計結果と表1から該当建築作品の多い建築家の登場する傾向には大きく2種類あることがわかる。1つは安藤忠雄に代表されるような1つ号に集中して登場する「集中型」である。もう1つは谷口吉生や伊東豊雄に代表されるような複数の号に渡って何回も登場する「継続型」である。

図2は年代別に見た一般誌における分析対象作品の建築家人数の推移を示している。これより全体的に増加傾向にあることがわかる。詳しく見ると1998年創刊当初は日本人建築家の登場回数はわずかであったが、2001年を境に増加し始め、2005年には27人と2001年の6人の3倍以上まで上昇した。これは3-1-1で示した結果と比例しているといえる。

	建築家名	作品数		建築家名	作品数
1	安藤忠雄	20	31	塩塚隆生	1
2	伊東豊雄	4	32	眞田大輔	1
3	谷口吉生	4	33	納谷新	1
4	青木淳	3	34	吉岡徳仁	1
5	隈研吾	3	35	横河健	1
6	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	3	36	小嶋一浩 + 曲淵英邦	1
7	千葉学	3	37	コンラン&パートナーズ + 山本圭介	1
8	北山恒	2	38	アルド・ロッシ	1
9	阿部仁史	2	38	磯崎新	1
10	乾久美子	2	39	大谷弘明	1
11	木下道郎	2	40	山下保博	1
12	みかんぐみ	2	41	五十嵐淳	1
13	SANNA	2	42	阪根宏彦	1
14	荒川修作	1	43	早草睦恵	1
15	I・M・ペイ	1	44	米田明 / 池田昌弘	1
16	レンゾ・ピアノ	1	45	丸山洋志	1
17	ジェームス・タレス	1	46	塚本由晴	1
18	古谷誠章	1	47	西森隆雄	1
19	川久保玲	1	48	Herzog & de Meuron	1
20	村野藤吾	1	49	アレハンドロ・ザエラ = ポロ	1
21	大林組	1	50	大江匡	1
22	杉本博司	1	51	ヨコモゾマコト	1
23	坂茂	1	52	菅順二	1
24	MVRDV	1	53	イサム・ノグチ + アーキテクトファイブ	1
25	横文彦	1	54	原広司	1
26	團紀彦	1	55	赤松佳珠子	1
27	ポール・アンドルー	1	56	設計者多数	1
28	内藤廣	1		計	96
29	山本理顕	1			
30	三分一博志	1			

表 2 分析対象作品の建築家名とその作品数の集計結果

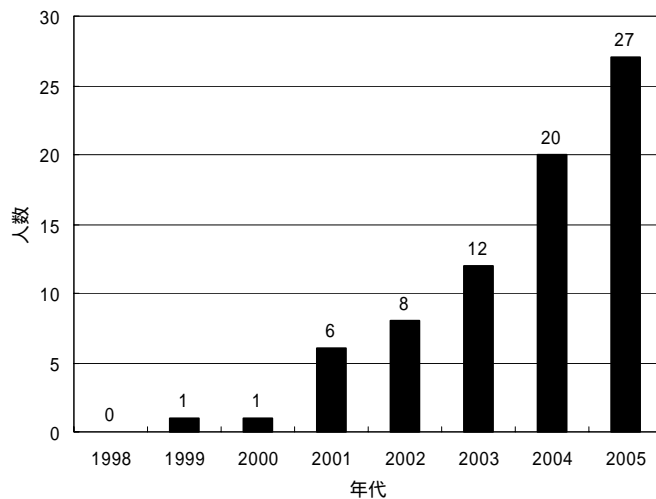


図 2 一般誌における該当建築家人数の推移

3-1-3. 建築用途

表3は分析対象における建築用途の集計結果である。これより分析対象の建築用途の種類は合計で21種類であった。詳しく見ていくと「美術館・博物館」と「個人住宅」がそれぞれ18作品ずつであり最多であった。この2つ用途が多い理由として一般誌の特集の組み方が挙げられる。2章より「美術館・博物館」は2000年以降、つまり季刊期から毎年特集が組まれ紹介されている。一方「個人住宅」は創刊当時にはまったく登場しなかったが、2004年の「住宅特集」を境に紹介されるようになった。このように建築用途に関連する特集がこの結果に影響していると考えられる。また表より登場回数が上位の用途に注目する。結果「美術館・博物館」(18件)「個人住宅」(18件)「商業施設」(9件)「集合住宅」(9件)「別荘」(6件)「公園施設」(6件)であった。これより住環境に関連する用途が多いことがわかる。以上より一般誌は近年住環境に関連する建築作品に着目していると判断可能である。

図は一般誌における年代別の建築用途数の推移を示したものである。これより2002年に建物用途の種類が急増していることが指摘できる。これは2002年から「安藤忠雄特集」のように1人の建築家に着目した特集が組まれるようになり、建築用途を問わず多くの当該建築作品が紹介されたためである。また2002年以降は建築用途数が安定傾向になっている。この理由は「美術館特集」や「ホテル特集」などの用途別特集が定番となり用途が分散することが減少したためであると考えられる。

	建築用途	該当数		建築用途	該当数
1	美術館+博物館	18	13	複合施設	2
2	個人住宅	18	14	展示空間	1
3	商業施設	9	15	図書館	1
4	集合住宅	9	16	バスターミナル	1
5	別荘	6	17	研究所	1
6	公園施設	6	18	飲食施設	1
7	劇場	4	19	ゴミ処理施設	1
8	パビリオン	4	20	オフィス	1
9	宿泊施設	4	21	競技施設	1
10	教育施設	3		計	96
11	複合文化施設	3			
12	宗教施設	2			

表3 分析対象作品の建築用途の集計結果

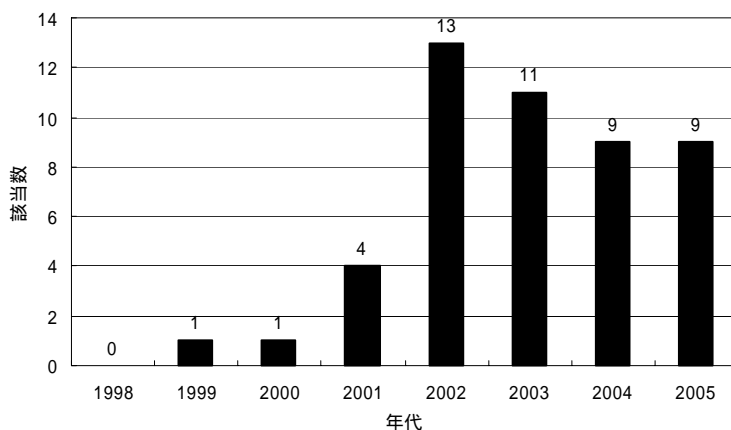


図3 一般誌における建築用途の推移

3-1-4. 文章量

分析対象の作品説明文の文章量は合計で一般誌1707文(1作品平均17.78文)、専門誌2743文(1作品平均28.57文)であり、一般誌の文章量は専門誌の約6割である。このことから専門誌は一般誌と比べ文章の量的伝達能力が高いといえる。

図4は両誌における文章量の年代別平均の推移を表している。が一般誌の推移、が専門誌の推移をそれぞれ示している。これより2002年以降、一般誌の平均文章量が年々増加し、2005年では23.45文と一般誌の全体平均の17.78文を上回った。このことから一般誌における作品説明文量が増加しており量的伝達能力が向上しているといえる。また、この変化は一般誌の専門誌化の一端を示唆していると考えられる。

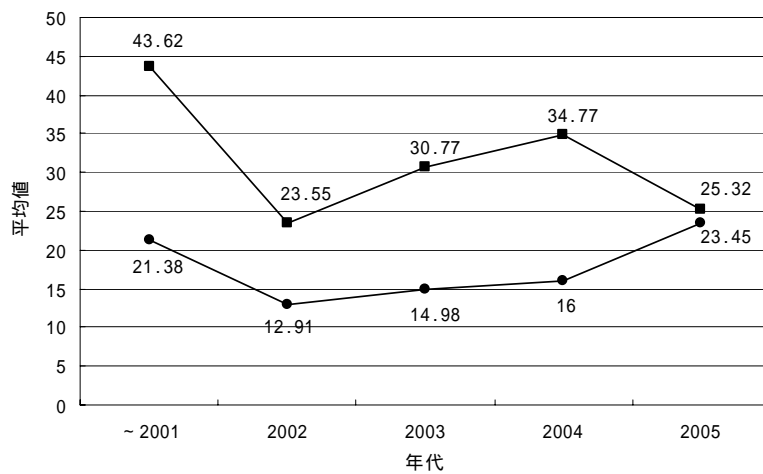


図4 両誌における文章量の年代別平均の推移

以下、上記の96の分析対象を「表題」「特徴的な単語」「修辞技法」「記述内容の特徴」の4項目についての調査・分析・考察を示していく。

【註釈】

- 1) ここでいう「文章量」の「文章」とは句点までを1文とするもので「量」とはその数量のことを指す。
- 2) 1998年 - 2000年の平均値を統一しているのは、各年の作品数が僅かであり、正確な結果が得られないためである。

3-2. 表題

誌面において読者が最初に注目する記述は表題である。また表題には書き手側の文章上での意図が反映されている場合が多い。ここでは両誌における表題に着目し、その差異から両誌の特質を分析・考察する。

() 調査方法

奥山、鴛海らの表題に関する研究^{文13)}を参考に「作品説明文とは別に記事の冒頭で示されている記述」^{注1)}と「表題」を定義し、図1のように両誌の分析対象から該当するものを抽出する。

抽出した表題を集計し、図表化する。

図表をもとに、表題による両誌の特質を分析・考察する。



図5 表題の抽出例

() 結果

表4は両誌から抽出した作品別の表題の一覧である。表題を分析するに当たって表題を構成する要素に着目した。以下表題の構成要素とその例を示す。

「用途」	例：ありそうでなかった <u>美術館</u> なんです。
「地名」	例： <u>マンチェスター</u> に登場した <u>イギリス</u> で唯一の ANDO 建築。
「建築家」	例：20世紀末遺産、 <u>アルド・ロッシ</u> がすごい。
「素材」	例：連なる <u>ガラスブロック</u> が作る、膨らみのある空間。
「環境」	例：どこからでも <u>海</u> と対話できる
「条件」	例： <u>4m x 40mの敷地</u> に建つ「木造打放し」
「形状」	例： <u>黒いボックス</u> は京都の街を、そして店内を映し出す鏡でした。
「手法」	例： <u>リノベーション</u> / 意味の真空状態
「建築名」 ^{注2)}	例： <u>淡路夢舞台</u> に想う
「構成」	例：ふたつの細長い床
「構造」	例：4m x 40mの敷地に建つ「 <u>木造打放し</u> 」
「比喻」	例：海を見渡す展望台を載せて <u>背伸びをする</u> 家。
「印象」	例： <u>会場内でひときわ目立つ</u> 、建築を覆う建築。
「喚起」	例：心豊かに自由に歩いてください。

上記の14項目に表題の要素を分類した。この分類を元に表4には各表題に該当する要素名を記載している。以下、この表をもとに分析・考察を進めていく。

表4 作品別表題と構成要素の一覧

	建築名	建築家	一般誌の表題	要素	要素数
1	水/ガラス	隈研吾	水とガラスが太平洋へ誘う限りなく透明な世界。	(素材)(環境)	2
2	東京国立博物館法隆寺宝物館	谷口吉生			0
3	ルイ・ヴィトン松屋銀座店	青木淳	銀座に至るショッピング空間現る。	(地名)(用途)	2
4	せんだいメディアテーク	伊東豊雄	遂に完成! 未来の公共文化施設のエッセンスとは?	(用途)	1
5	養老天命反転地	荒川修作	キツイ、ケン、でも気になる!? 世界-アブない公園へ行こう。	(用途)(喚起)	2
6	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	谷口吉生			0
7	ミホ・ミュージアム	I・M・ペイ	ルーブル美術館のピラミッドでおなじみのブリック-質建築家、I・M・ペイの隠れ家的ミュージアムが滋賀の山奥にあった!	(建築)(建築家)(用途)(地名)(環境)	4
8	メゾン・エルメス	レンゾ・ピアノ	レンゾ・ピアノ設計の「エルメスの家」が東京・銀座に誕生しました。	(建築家)(比喩)(地名)	3
9	光の館	ジェームス・タレス			0
10	アンパンマンミュージアム	古谷誠章	ミュージアムデザインはソフトで自由に遊ぶらば。	(用途)(比喩)	2
11	下馬の連続住居	北山恒			0
12	ビューリッツァー美術館	安藤忠雄	時がたつのを忘れそうな静謐な空間が広がる。	(印象)	1
13	シカゴ美術館・屏風ギャラリー	安藤忠雄	漆黒の柱の間をさまよいつながら、日本の伝統美をあらためて発見する。	(地名)	1
14	ユネスコ瞑想空間	安藤忠雄	素材も要素も削ぎ落とされたスピチュアルガーデン。	(用途)	1
15	アルマーニ/テアトロ	安藤忠雄	帝王アルマーニの「永久性」を形にしたテアトロ。	(用途)(条件)	2
16	FABRICA	安藤忠雄	ANDO空間で創造する。アーティストたちの至福。	(建築家)	1
17	ヴィトラ・セミナーハウス	安藤忠雄	楽しいデザイナーズ工場に囲まれてANDOとゲーリーがにらめっこ。	(建築家)(比喩)	2
18	ピカデリー・ガーデンズ	安藤忠雄	マンチェスターに登場したイギリスで唯一のANDO建築。	(地名)(建築家)	2
19	淡路夢舞台	安藤忠雄	夢舞台のテーマは緑の再生です	(建築名)(環境)	2
20	南岳山 光明寺	安藤忠雄			0
21	木の殿堂	安藤忠雄	木の豊かさを五感で感じてください。	(素材)(喚起)	2
22	国際子ども図書館	安藤忠雄			0
23	直島コンポラリーアートミュージアム	安藤忠雄	緑に隠された直島の美術館は、海と空を眺めるためのものでした。	(環境)(地名)(用途)	3
24	近つ飛鳥博物館	安藤忠雄	地域への眼差し、古代との対話。	(手法)	1
25	大阪府立狭山池博物館	安藤忠雄	親水空間として甦った狭山池。	(用途)(地名)	2
26	兵庫県立美術館	安藤忠雄	心豊かに自由に歩いてください。	(喚起)	1
27	サーベントイン・ギャラリー	伊東豊雄			0
28	零北町民ホール	阿部仁史	日本-スプリングな町民ホールが、熊本・零北に登場	(用途)(地名)	2
29	コム・デ・ギャルソン京都店	川久保玲	黒いボックスは京都の街を、そして店内を映し出す鏡でした。	(形状)(地名)(比喩)(手法)	4
30	三養荘	村野藤吾			0
31	オアシス21	大林組	屋張名古屋は名古屋城じゃなく、バスターミナルで待つ?	(地名)(用途)	2
32	フォートワース現代美術館	安藤忠雄	建築とアートが親密な。ありそうでなかった美術館なんです。	(比喩)(用途)	2
33	護王神社	杉本博司			0
34	PAM	坂茂			0
35	まつだい雪国農耕文化村センター	MVRDV	のどかな田園風景に出現した6本足の生き物は、日本初のMVRDVの作品でした。	(環境)(比喩)(建築家)	3
36	ルイ・ヴィトン高知店	乾久美子	あのLVショップのファサードに異変あり。ストーンスクリーに浮かぶダミエ柄は必見。	(用途)(素材)	2
37	朱鷺メッセ	横文彦	横文彦が示す、水に一番近い、ガラスのプロムナード。	(用途)(建築家)(素材)	3
38	デル・ソル・ポエエンテ	隈研吾	目の前は大きな海と小さな海。	(環境)	1
39	国民宿舎足摺テルメ	團紀彦	どこからでも海と対話できる。	(環境)	1
40	なにわの海の時空館	ポール・アンドルー	なにわの海は百花繚乱。	(地名)(環境)	2
41	海の博物館	内藤藤	海のロマンを木で表現する。	(環境)(素材)(手法)	3
42	松島ヨットハーバー・公園事務所	阿部仁史	海に浮かんだようなヨット小屋。	(環境)(用途)(比喩)	3
43	野間自由幼稚園	安藤忠雄	全部が遊び場! ちよっとうらやましい空間です。	(印象)	1
44	建外SOHO	山本理顕	北京に、山本理顕の未来都市がよいよい誕生!	(地名)(建築家)	2
45	北向傾斜住宅	三分一博志	この場所に導かれ、必要性から生まれた美しさ。	(印象)	1
46	プライベート・ギャラリー	塚塚隆生	絵を描き、絵を飾る。そのためだけに建てられた家。	(条件)(用途)	2
47	SHS	真田大輔	欲しい部分は一から作る。ここは誰にも似ていない家。	(用途)(比喩)	2
48	屋根の家	手塚貴晴・由比/池田昌弘	施主の要望で生まれた、屋根で暮らせる心地よい家。	(条件)(用途)	2
49	L	青木淳	住宅はオーダーメイド。施主が住みやすければいい。	(用途)	1
50	S-tube	納谷新	プレハブの骨格を補強する木造チューブで空間が激変。	(構造)(印象)	2

	専門誌の表題	要素	要素数
	フレーム/エッジ	(構造)(手法)	2
	建築へめざすもの	-	0
	裸形の表層	-	0
	出来事から"延長"を見つけるために	-	0
	設計について	-	0
	人が人に会う場所	-	0
	新しいダイアグラム	(手法)	1
	ここにしかない"アートの場"を生み出す	-	0
	刺激する16本の柱	(構造)	1
	歴史との応答	(手法)	1
	淡路夢舞台に想う	(建築名)	1
	木造建築の原点に立ち返る	(手法)	1
	オアシス21都市施設としての提案	(建築名)	1
	フォートワース現代美術館をめぐる	(建築名)	1
	APPROPRIATE PROPORTION	(手法)	1
	テクスチャーとグラフィックの間にあるもの	-	0
	3つの構造システムの混在した断面について	(手法)	1
	柔らかな基壇	(手法)	1
	「何か水に浮かぶ球体を・・・」	(形状)	1
	海の時間	(環境)	1
	松島ヨットハーバー・公園事務所	(建築名)	1
	底と一体化する。縁側の幼稚園	(構成)(用途)(手法)	3
	Instant Neighborhood	(手法)	1
	体験の選択肢を豊富にすること	(手法)	1
	無垢という工法思想	(手法)	1
	屋根の上と屋根の下	(構成)	1
	「いたせりつくせり」でないこと	(手法)	1
		-	0

表4 作品別表題と構成要素の一覧

	建築名	建築家	一般語の表題	要素	要素数
51	MUJI+INFILLリノベーション	吉岡徳仁	「何も無い」をデザインした、折りの開閉で激変する部屋。	(手法)(用途)	2
52	二軒家アパートメント	木下道郎	趣味とパーティー用に作った、最上階のオーナー住戸。	(用途)(条件)	2
53	N3ユニテ	横河健	都心に住まう新しい形。3世帯のオーナー住戸。	(環境)(用途)	2
54	Kashima Surf Villa	千葉学	サーファーによるサーファーのための週末ヴィラ。	(条件)(用途)	2
55	スペースブロック ハノイモデル	小嶋一浩+曲淵英邦	縦ではなく横に広がる高密度集合住宅が完成。	(構成)(用途)	2
56	まつもと市民芸術館	伊東豊雄			0
57	奥社の茶屋	隈研吾	素材と建築のハーモニーが、隈研吾レストランの秘密です。	(建築家)(用途)	2
58	ECORIUM	谷口吉生	美術館を超える都市施設?谷口吉生の新革命建築が完成。	(用途)(建築家)	2
59	地中美術館	安藤忠雄	4人目のアーティスト、安藤が見せるコンクリートの芸術。	(建築家)(素材)	2
60	ランゲン美術館	安藤忠雄	十余年を経て完成するガラスとコンクリートの美術館。	(用途)(素材)	2
61	サイトウ・キネン・フェスティバル舞台美術	安藤忠雄	田中一光展のペットボトルをさらに進化してオペラの舞台へ。	(素材)(用途)	2
62	東雲キャナルコートCODAN		軽やかに表情を変える集合住宅。	(比喩)(用途)	2
63	二期倶楽部東館	コンラン&パートナーズ+山本圭介			0
64	ホテル・イル・パラッツォ	アルド・ロッシ	20世紀未遺産、アルド・ロッシがすごい。	(建築家)	1
65	秋吉台国際芸術村	磯崎新			0
66	G	青木淳	空間の「質」を考えた建築。この家は作り方に秘密があります。	(用途)	1
67	積層の家	大谷弘明	10坪の家では、間近な壁がモノを言う。	(用途)(構造)	2
68	クリスタル・ブルック	山下保博	連なるガラスブロックが作る、膨らみのある空間。	(素材)	1
69	上原の家	みかんぐみ	本棚を構成するといふ、発明から生まれた家。	(構造)(用途)(手法)	3
70	トラス下の矩形	五十嵐淳	「何も無い」を操作したヒューマンスケールが心地よい家	(手法)(用途)	2
71	九段の家	阪根宏彦	傾きからテラリと見せる。アクロバティックな快適都市生活。	(環境)	1
72	展望台の家	手塚貴晴+由比/池田昌弘	海を見渡す展望台を載せて直伸びをする家。	(環境)(比喩)(用途)	3
73	襲の家	早草睦恵	常識はあえて気にしない。色の薄さで新鮮な表情を獲得。	(手法)	1
74	HP	米田明/池田昌弘	当たり前の技術を少し応用、木を見せずに木を生かす。	(素材)(手法)	2
75	The House of F.F	丸山洋志	複雑な三次元曲面の答えは、「光が滑り落ちてくる箱」。	(比喩)	1
76	Vague	北山恒	水盤が横たわる外部空間が、気持ちを豊かにします。	(印象)	1
77	MESH	千葉学	水回り空間が、内と外との適度な距離感を育みます。		0
78	barres	木下道郎	半外部空間を取り込んだら、光と風に満ちました。	(環境)	1
79	勝浦の別荘	千葉学	読書を楽しむためのキューブ別荘。	(条件)(形状)(用途)	3
80	黒犬荘	塚本由晴	軽井沢にある別荘としての別荘。	(地名)(用途)	2
81	森を捕まえる家	手塚貴晴+由比/池田昌弘	静かな森の中にあるアトリエ。	(環境)(用途)	2
82	カーザ・リベラ	西森隆雄	幾通りもの「食」を楽しむための別荘。	(条件)(用途)	2
83	ブラダグティック青山	Herzog & de Meuron			0
84	TOD'S表参道ビル	伊東豊雄			0
85	Dior	乾久美子			0
86	Dior表参道	SANNA			0
87	金沢21世紀美術館	妹島和世+西沢立衛/SANNA			0
88	スペイン館	アレハンドロ・ザエラ+ボロ	会場内でひとときを目立つ、建築を覆う建築。	(印象)	1
89	三井・東芝館	大江匡	夏は涼めてうれしい、水に覆われたパビリオン。	(素材)(用途)	2
90	トヨタグループ館	みかんぐみ	みかんぐみが手がけた地球循環型パビリオン。	(建築家)(用途)	2
91	富弘美術館	ヨコミソマコト			0
92	豊田市美術館	谷口吉生			0
93	竹中工務店東京本店ビル	菅順二	最先端のロハス建築は、東京のオフィスビルでした。	(手法)(地名)(用途)	3
94	モエレ沼公園	イサム・ノグチ+アーキテクトファイブ	グランドオープンしてますます充実。モエレ沼公園に行かないちゃ!	(建築家)	1
95	札幌ドーム	原広司			0
96	House YK / ILANDS	赤松佳珠子	4m×40mの敷地に建つ「木造打放し」。	(条件)(構造)(手法)	3
54(表題数) / 96(作品中)			75 / 96 (78%)	計	141

	専門誌の表題	要素	要素数
		-	0
		-	0
	都市に住み続けること	(環境)	1
	集合のかたち	-	0
		-	0
		-	0
	ふたつの細長い床	(構成)	1
	都市景観の形成	(環境)	1
	自然に埋没する建築	(環境)	1
	森の中に息づく美術館	(環境)(用途)	2
	ペットボトルの小手宙	(比喩)	1
	さまざまな家族を収容できる住まい!	(条件)(用途)	2
		-	0
		-	0
		-	0
	リノベーション/意味の真空状態	(手法)	1
	住宅にPCデザインは可能か	(用途)(素材)	2
	ミシンとコウモリ傘の出会いのような と鉄の構造	ガラスブロック (比喩)(素材)(構造)	3
		-	0
		-	0
	光の壁・光の柱	(手法)(構造)	2
	浮遊感	(手法)	1
		-	0
	内部に外部性をもたらず曲面「HP」	(手法)	1
	「カフェみたい、ギャラリーみたい、ショップみたい」の内側	(比喩)	1
	賃貸マンションがつくる21世紀初頭東京の都市生活	(用途)(地名)(環境)	3
		-	0
	皮膚、ボイド、中間領域	(手法)	1
		-	0
	空間の固有性と交換可能性	(手法)	1
		-	0
	箱に戻る	(形状)	1
		-	0
	不均質な抽象性	(手法)	1
	クロッキーのようにしっかりと希薄なもの	(比喩)	1
		-	0
	明るい開放的な美術館	(用途)	1
		-	0
	Liquid Architecture 共通認識を育てる環境技術	(手法)	1
	地球循環型パビリオン	(用途)	1
	非均質性・非全体性・非中心性	(手法)	1
		-	0
	「サステナブル・ワークス」の実践	(手法)	1
	ふたつの合わせ モエレ沼公園 ガラスのピラミッド	(手法)(建築家)(素材)	3
		-	0
		-	0
54 / 96 (56%)		計	59

() 分析

ここでは「絶対量」「構成要素」の2つの視点から分析を行う。

「絶対量」

表4より分析対象における両誌の表題の該当数は合計で一般誌96作品中75作品(全体の78%)、専門誌96作品中54作品(全体の56%)であった。このことから一般誌は専門誌と比較して表題をつける割合が高いことがわかる。

「構成要素」

表5は両誌の表題を構成する要素の集計結果である。一般誌の表題からは合計141の要素が専門誌の表題からは59の要素が抽出できた。この結果から一般誌の表題は専門誌と比較して多くの要素で構成されていることがわかる。また表から一般誌の表題を構成する要素が14要素すべてに該当しているのに対し、専門誌は「建築家」「印象」「喚起」の3要素が一般誌よりも少なく11要素である。さらに図2は両誌の要素別の割合を示したものである。図より一般誌の表題は「用途」が29%と専門誌の12%と比べ、また他の要素と比較して特に多い。一方、専門誌の場合は「手法」が39%と専門誌における全要素の多くを占めている。

要素	一般誌	専門誌
1 用途	40	7
2 地名	14	1
3 建築家	13	0
4 素材	11	3
5 環境	15	6
6 条件	8	1
7 形状	2	2
8 手法	10	23
9 建築名	2	5
10 構成	2	3
11 構造	4	4
12 比喻	11	4
13 印象	6	0
14 喚起	3	0
計	141	59

表5 表題の構成要素の集計結果

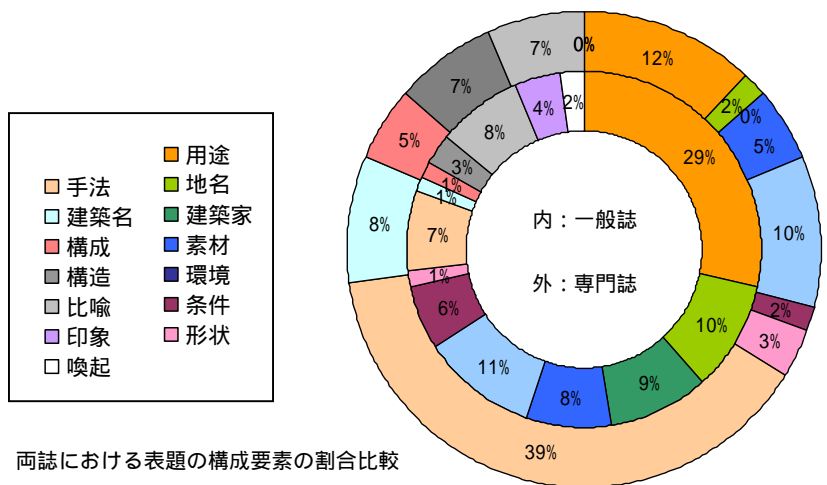


図6 両誌における表題の構成要素の割合比較

() 考察

以上から表題による両誌の特質として「用途と手法」「情報量」の2点が挙げられる。

「用途と手法」

「構成要素」の分析から一般誌の表題には「用途」の要素が専門誌と比べ多い。一方、専門誌の表題は「手法」に同様のことが言える。一般的に「何の建築なのか?」「ここで何ができるのか?」など「用途」に関する情報は一般読者にとって建築に興味を抱く観点のひとつである。それに対し「手法」は建築に携わる専門家にとって興味深い要素である。これらより一般誌は「用途」という使用者側の観点から、専門誌は「手法」というつくる側の観点から表題が設定されていると考えられる。

「情報量」

「絶対量」の分析より一般誌は専門誌よりも表題を付ける傾向があることが指摘できる。さらに「構成要素」の分析より一般誌の表題を構成する要素が専門誌と比べ多様である。これらから一般誌の表題は要素を多種多様に含んでおり、表題から得られる情報量は専門誌よりも多いことが理解できる。

表4より両誌の表題を比較すると一般誌の表題は専門誌のものとは比べ長い。そのため一般誌の表題からは要素の多さとその長さから説明文中から抜き出した「文章」のような印象を受ける。また一般誌の表題には「!」「?」(感嘆修辭疑問符)や「至上」「限りなく」などの誇張表現が多く使用されており、印象に残りやすいという性質も持つと考えられる。一方、専門誌の表題は短く、「フレーム/エッジ」「海の時間」という当該建築作品を誕生させる上で手がかりとなった言葉をそのまま表題にしていると考えられる。

【注釈】

1) 1作品に対してひとつの表題とする。また1作品に複数の表題が存在する場合は、比較して文字の大きさが大きい方を採用した。

2) 分析対象の建築名だけを対象とし、他の建築名は対象外とした。

3-3. 特徴的な単語

文章中には読者に強い働きかけをする単語が存在する。この節では「具体的数値」「固有名詞」「反復語」の3項目を特徴的な単語として以下検討していく。

3-3-1. 具体的数値

文章中において「高さ m」や「枚のガラス」などで表記される具体的数値は正確な情報を読者へ伝達する手段として有効である。特に建築作品は面積や高さ、年月など数値で表される要素を多く含んでいる。ここでは両誌における説明文中の具体的数値に着目し、その差異から両誌の特質を分析・考察する。

() 調査方法

分析対象の説明文中から例のように具体的数値を抽出する。

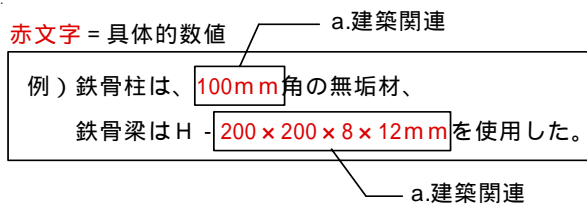
抽出した具体的数値を文章中の前後関係から

- a. 建築関連の数値
- b. 時間に関する数値
- c. 条件に関する数値
- d. その他

の4項目に分類し各項目ごとに細分化していく。

その結果を集計し、図表化する。

図表をもとに、具体的数値による両誌の特質を分析・考察する。



No.72 展望台の家
(新建築住宅特集 2005年1月号より)

() 結果

表5は両誌における分析対象別の具体的数値の該当数とその集計結果を示したものである。また表6は分析対象から抽出した具体的数値を()の をもとに各々の具体的数値が「何を指し示すものか」という観点から5段階に分類した結果を示したものである。第1分類では4項目。第2分類では10項目。第3分類では19項目。第4分類では89項目。第5分類では164項目と段階的に詳細に分類した。表6中の各分類項目の下に - のように数字が書いてある。これはその項目における両誌(左側が一般誌、右側が専門誌)の該当数である。以下これらの表をもとに分析・考察を行っていく。

表5 作品別具体的数値の集計結果

発行年	号	建築名	一般誌	専門誌	
1	1999	SPRING	水ノガラス	1	7
2	2000	SUMMER	東京国立博物館法隆寺宝物館	6	6
3			ルイ・ヴィトン松屋銀座店	4	7
4			せんだいメディアテーク	6	11
5	2001		養老天命反転地	1	2
6			丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	2	5
7			ミホ・ミュージアム	1	16
8			メゾン・エルメス	5	2
9			光の館	1	2
10			アンパンマンミュージアム	0	12
11			下馬の連続住居	0	11
12			ビュリッツァー美術館	1	8
13			シカゴ美術館・屏風ギャラリー	7	5
14			ユネスコ瞑想空間	1	7
15			アルマーニノテアトロ	3	1
16			FABRICA	4	11
17			ヴィトラ・セミナーハウス	0	2
18			ピカデリー・ガーデンズ	0	5
19	2002		淡路夢舞台	0	20
20			南岳山 光明寺	8	7
21			木の殿堂	4	6
22			国際子ども図書館	3	16
23			直島コンポラリアートミュージアム	1	7
24			近つ飛鳥博物館	4	4
25			大阪府立狭山池博物館	3	3
26			兵庫県立美術館	2	3
27			サーペンタイン・ギャラリー	2	3
28			零北町民ホール	2	4
29			コム・デ・ギャルソン京都店	1	0
30			三養荘	4	3
31	2003		オアシス21	1	3
32			フォートワース現代美術館	2	10
33			護王神社	3	7
34			PAM	2	7
35			まつだい雪国農耕文化村センター	4	0
36			ルイ・ヴィトン高知店	2	4
37			朱鷺メッセ	5	2
38			デル・ソル・ボニエンテ	4	2
39			国民宿舎足摺テルメ	0	2
40			なにわの海の時空館	0	8
41			海の博物館	1	12
42			松島ヨットハーバー・公園事務所	1	4
43			野間自由幼稚園	4	5
44	2004		建外SOHO	10	20
45			北向傾斜住宅	1	3
46			プライベート・ギャラリー	3	6
47			SHS	1	9
48			屋根の家	5	21
49			L	2	6
50			S-tube	2	4
51			MUJI+INFILLリノベーション	7	11
52			二軒家アパートメント	0	7
53			N3ユニテ	7	7
54			Kashima Surf Villa	7	7
55			スペースブロック ハノイモデル	5	12
56			まつもと市民芸術館	2	4
57			興社の茶屋	1	5
58			ECORIUM	3	4
59			地中美術館	3	11
60			ランゲン美術館	4	11
61			トウ・キネン・フェスティバル舞台	7	3
62			東雲キャナルコートCODAN	0	10
63			二期倶楽部東館	3	7
64			ホテル・イル・パラッツォ	1	5
65			秋吉台国際芸術村	2	12
66	2005		G	1	0
67			積層の家	9	2
68			クリスタル・ブルック	3	8
69			上原の家	7	4
70			トラス下の矩形	9	8
71			九段の家	15	2
72			展望台の家	12	12
73			襲の家	3	2
74			HP	4	4
75			The House of F.F	2	7
76			Vague	8	6
77			MESH	2	0
78			barres	5	13
79			勝浦の別荘	3	3
80			黒犬荘	3	4
81			森を捕まえる家	3	7
82			カーザ・リベラ	6	3
83			ブラダブティック青山	1	0
84			TOD'S表参道ビル	1	5
85			Dior	0	2
86			Dior表参道	0	6
87			金沢21世紀美術館	4	4
88			スペイン館	6	6
89			三井・東芝館	2	6
90			トヨタグループ館	1	3
91			富弘美術館	3	17
92			豊田市美術館	3	4
93			竹中工務店東京本店ビル	8	16
94			モエレ沼公園	8	19
95			札幌ドーム	4	2
96			House YK / ILANDS	5	6
計			323	628	

表6 具体的数値の分類項目別集計結果

第1分類	第2分類	第3分類	第4分類	第5分類	登場回数		例			
					一般誌	専門誌				
建築関連 175-344	構成 規模 127-234	平面配置 25-66		層	9	21 (5)	3層で構成されている			
				割合	2	3	全体の3分の2			
				戸数	6	13	10戸の			
				機能	2	6	ひとつの機能			
				要素	2	9	3つの要素			
				並び(列)	4	11	2列で配置			
		建築全体 25-50		角度	0	3	45°に振っている			
				高さ	2	7	高さ5m			
				階建	3	12	2階建て			
				大きさ	4	13	29坪の平屋			
				棟数	10	11	20棟の建物群			
				長さ	1	1	全長350m			
		内部空間 77-118		重さ	2	0	24tという巨大さ			
				方向	2	6	3方向に窓			
				色	1	0	2色を基調とした建物			
				階	47 (1)	59 (1)	2階部分は			
				収容人数	2	3	700人収容			
				席数	1	3	1000席			
				大きさ	2	5	約4.5m x 5m x 100m			
				長さ	2	3	全長6m			
				幅	0	3	幅6mの空間			
				面積	4	4	45㎡			
				高さ	6	13	室内の高さは2.5m			
				並び	0	2	2列に並び部屋			
				奥行	2	1	奥行3m			
				重さ	0	2	3tの重さ			
		構造 30-60	全般 0-5		分割	0	3	4分割		
					室数	11 (4)	17	個室が3つ		
					間隔	0	1	10.8m x 10.8スパン		
					骨組み	0	1	12.18m四方の直方体		
	種類				0	2	石・煉瓦・鉄の3つ			
	グリッド				0	1	10.8mの均等グリッド			
	部分 30-55				トラス 4-0		勾配	1	0	勾配0°
							幅	1	0	幅12m
					スラブ 0-2		間隔	2	0	455mm間隔
							高さ	0	2	1mのスラブ厚
			ブレース 0-1		スパン	0	1	10.8m x 10.8mの均等スパン		
					枚数(層)	9	1	3	二重壁	
			壁 10-24		幅・厚み	0	11	15cm幅		
					高さ	1	5	高さ1.2mの壁		
					長さ	0	2	全長64.7mの壁		
					間隔	0	1	壁から3m		
	デザイン				0	2	100mmグリッド			
	本数				9	1	5	10本の柱		
	柱 14-15			太さ	2	5	50cm角の柱			
				高さ	1	1	高さ10mの柱			
	梁 1-5			並び(列)	2	4	2列に並び柱			
				数(層)	1	1	梁を2層で構成			
	庇 0-1			厚さ	0	4	550mmの梁成			
				高さ	0	1	地盤面から6mの高さにある			
	屋根 1-7			勾配	0	1	屋根の勾配は10分の1			
				広さ	1	1	42坪の大屋根			
				枚数	0	3	1枚の屋根			
				厚さ	0	1	150mmの極薄の屋根			
	材料 8-14		全般 1-0		種類	0	1	高さ16mの屋根		
					種類	1	0	鉄、ガラス、木の3種類		
		ガラス 4-2			寸法(大きさ)	枚数	2	1	10.8m角	
						枚数	2	1	240枚のガラス	
		コンクリート 0-5			型枠使用回数	幅	0	2	200mm幅	
						個数	0	1	50回使用した	
		金属版 0-3			強度	個数	0	1	30個のコンクリートブロック	
						強度	0	1	150 k g / m ²	
		石材 1-1			厚み	個数	0	3	厚さ0.8mm	
						個数	1	1	1万4000個の石を使用	
	ペットボトル 1-1	本数	個数	1	1	44000本のペットボトルを使用				
			厚み	0	1	8mmのシール				
	シール 0-1	種類	種類	0	1	6種類のブロックを使用				
			個数	1	0	約1万5000個のブロック				
	設備 10-36			エレベーター 0-1	数	0	1	1本のエレベーターが通っている		
				スロープ 0-2		本数	0	1	1本のスロープ	
						長さ	0	1	全長約180mのスロープ	
				階段 2-3		本数	2	1	2本の階段が交差する	
						蹴上	0	1	蹴上は200mm	
				窓 1-5		踏面	0	1	踏面は330mm	
						個数	1	4	8つの天窗	
				照明 0-2		色	0	1	バリエーションカラーは6色	
						個数	0	2	ひとつの照明	
				戸 1-8		枚数	0	1	4枚のドア	
						幅	0	3	1500mm幅	
						高さ	1	1	高さ5mの扉	
						個所	0	1	戸を2ヶ所に設置	
				バルコニー 0-1		数(層)	0	2	2個の扉	
						幅	0	1	600mm幅の設備バルコニー	
				空調 0-4	タイプ	幅	0	1	4つのタイプがある	
						温度	0	2	低温11の送風を採用	
				削減量		削減量	0	1	50%の削減に成功	
						台数	4	1	車2台分の駐車場	
				駐車場 4-1		本数	0	1	500本の木	
	高さ	0	2			10mの杉の木				
	植栽 1-3		種類	1	0	200種類の植物				
			面積	1	1	5000坪の庭				
	レール 0-2		本数	0	2	2本のレール				
			ワイヤー 0-1	間隔	0	1	2mm			
	サッシュ 0-1		種類	0	1	2種類のサッシュを使い分けて				
			間隔	0	1	300mmピッチのルーバー				

表6 具体的数値の分類項目別集計結果

第1分類	第2分類	第3分類	第4分類	第5分類	登場回数		例		
					一般誌	専門誌			
時間 62-144			歴史 18-47	具体的	5	27 (3)	1973年3月に		
				抽象的	13 (2)	20	21世紀に		
			竣工 19-29	対象	11 (4)	7	2004年3月に竣工		
				その他	8	22 (4)	1987年に建てられた		
			築年数	3	7	築20年			
			出来事	9	18	今年3月に開催する			
			期間	13 (2)	43 (2)	2週間後に			
			人 19-26	施主 9-16	人数 6-7	実際	5	7	家族4人
						想定	1	0	1000人を想定
					年齢	1	3	30代夫婦	
その他 2-6	代	1			2	3代目の			
	世帯	0			3	2世帯			
利用者 7-5	敷地内 19-27	人数		6	5	400万人が訪問			
		種類		1	0	2つのタイプの来館者			
		年齢		0	1	40歳のときに設計			
		人数		1	2	3人の建築家が			
		第3者		1	2	90歳になられた芸術家			
条件 60-88	敷地条件 39-59	敷地周辺 17-20	建物 2-7	棟数(基)	1	4	周辺には3軒の住宅		
				高さ	0	1	高さ約12m		
			階層数	0	2	隣接するのは6階建てのビル			
			間隔	1	0	隣接する建物とは2m離れている			
			幅員	0	1	10m道路			
	道路 1-2	本数	1	1	1本の道				
		体感温度	2	2	体感温度50度				
	温度 3-2	気温	1	0	冬の平均気温は-5				
		移動時間	8	2	4	駅から10分			
	移動 10-9	移動距離	2	5	美術館から400m				
電車 1-0		本数	1	0	電車1本				
法律・法規 3-12	敷地周辺 17-20	高さ制限	0	3	9mの高さ制限				
		容積率	0	1	容積率は400%				
		建蔽率	0	3	建蔽率は50%				
		残響数	0	1	5.0秒				
		その他 3-4	堤防高さ	0	2	4.8mの防波堤			
ポラス率	0		1	ポラス率は50%					
その他 26-52			工費 2-3		2	3	総工費1億7000万円		
				個数	9	17	10脚の椅子		
			枚数	0	2	1枚の絵			
			図書館の冊数	1	0	20万冊			
			関連施設の棟数	0	1	日本には1500の焼却工場			
			参考建築の室数	1	0	4つの茶室がある			
			人口	0	3	人口100万			
			展示品 3-0	地区数	大きさ	2	0	3m x 5mの巨大さ	
					間隔	1	0	壁から30mm	
			回数	5	8	5回目的			
順序	2	3	3番目						
割合	0	4	5回に1回の割合で						
土砂の量 0-2	面積	面積	0	1	40haにおよぶ				
		林分	0	1	甲子園球場170林分				
ゴミの量	0	1	270万tのゴミ						
模型の縮尺	0	3	1 / 100の模型						
室の名前	1	2	No120						
インタビュー相手の人数	1	0	10人にインタビューした結果						
アンケート 0-3	人数	統計	0	2	2500人にアンケートを実施				
		ページ数	2	0	F32の写真				
道路名	0	2	国道12号						
イベント制作年代	1	0	20世紀のオペラ						
合計					323	628			

()分析

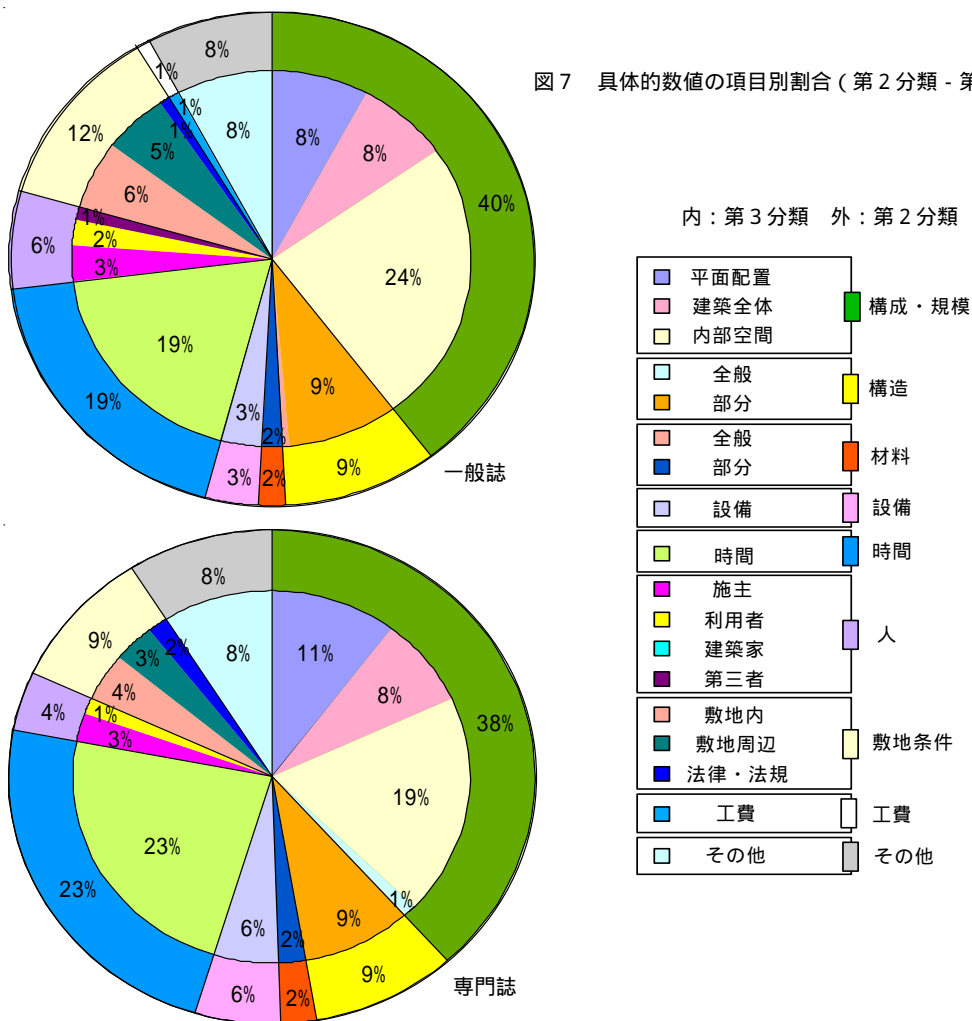
ここでは「絶対量」「割合」「順位」「偏り」の4つの観点から両誌における具体的数値を分析する。

「絶対量」

表5より両誌における具体的数値は合計で一般誌は323、専門誌は628であり、文章量を考慮するとほぼ同じ頻度で用いられていることがわかる。そのため両誌による具体的数値の頻度が目立った差はない。

「割合」

図7は表6上の第2分類と第3分類に着目した両誌における具体的数値の項目別の割合を示したものである。ここで取り上げるのは一般誌40%に対し専門誌38%と両誌とも比較的割合が近似しており両誌において高い割合を占めている「構成・規模」である。第2分類中の「構成・規模」では差は比較的少ないが、第3分類を比較すると差異が明確になる。一般誌では「内部空間」が24%と専門誌の割合19%を上回り、専門誌では「平面配置」が11%と一般誌の8%を上回っている。



「順位」

表6から両誌の第5分類における使用回数が多い項目の順番〔登場頻度の順序は表6内の（順位）で示している項目〕に注目する。一般誌で最も頻出した数値は「当該建築の階数」に関する数値、次いで「期間」に関する数値、抽象的な歴史に関する数値、当該建築の竣工に関する数値、当該建築の室数という順序である。一方、専門誌で最も頻出した数値は「当該建築の階数」に関する数値であり、次いで「期間」に関する数値、具体的な歴史に関する数値、当該建築以外の竣工に関する数値、建築を構成する層に関する数値という順序である。この結果から大きな差異が見られたのは「歴史に関する数値」と「竣工に関する数値」の2点である。「歴史に関する数値」について一般誌では抽象的表現が多用されているのに対し、専門誌では具体的表現が多用されている。また「竣工に関する数値」について一般誌では「当該の建築作品の竣工年」が頻出しているのに対し、専門誌では「当該建築作品以外の竣工年」が頻出している。

「偏り」

表6の項目の中には雑誌によって偏りが見られた項目がみられた。以下、両誌において偏りが見られた項目に着目して分析する。

専門誌のみに該当した項目に注目する（表6上で一般誌の項目が0である項目）。結果は全164項目中73項目（全項目の44%）が専門誌にだけ該当する項目であった。第1分類の項目別で見ると「建築関連」では94項目中49項目（52%）、「時間」では7項目中0項目（0%）、「条件」では40項目中12項目（30%）、「その他」では23項目中12項目（52%）という結果となった。「その他」を除いて第1分類の4項目のうち最も割合が高かった「建築関連」に関してさらに第2分類の項目別の割合を見ていく。その結果「構成・規模」では28項目中5項目（18%）、「構造」では27項目中16項目（59%）、「材料」では12項目中7項目（58%）、「設備」では27項目中21項目（78%）となった。

これらの結果から専門誌だけが扱う具体的数値が多様であることが指摘できる。特に建築関連に関する数値ではその項目の半数以上を専門誌だけが使用している。また「条件」の第3分類である「法律・法規」では7項目中6項目（86%）とほとんど専門誌だけが該当している。

上記のように大半の分類項目で専門誌の該当数が多い結果の中、反対に一般誌が専門誌よりも該当数が多い項目が存在する。その中の2項目に着目した。1つ目は「建築関連 - 構造 - 部分」の中の壁・柱の枚数や本数である（表6内の1）（表7）。2つ目は「敷地条件 - 敷地周辺」の「移動に関する数値」である（表6内の2）（表8）。図のように両数値とも専門誌よりも高い値を示している。

第1概念	第2概念	第3概念	第4概念	第5概念	一般誌	専門誌	例
建築関連	構造	部分	壁	枚数（層）	9	3	二重壁
				幅・厚み	0	11	15cm幅
				高さ	1	5	高さ1.2mの壁
				長さ	0	2	全長64.7mの壁
				間隔	0	1	壁から3m
				デザイン	0	2	100mmグリッド

表7 建築関連 - 構造 - 部分 - 壁

第1概念	第2概念	第3概念	第4概念	第5概念	一般誌	専門誌	例
条件	敷地条件	敷地周辺	移動	移動時間	8	4	駅から10分
				移動距離	2	5	美術館から400m

表8 条件 - 敷地条件 - 敷地周辺 - 移動

() 考察

以上から具体的数値による両誌の特質として「わかりやすさと精確性」「視点位置」「即時性と記録性」「専門性」「移動」の4点が挙げられる。

「わかりやすさと精確性」

「偏り」の分析において一般誌の壁の枚数・柱の本数の該当数が専門誌を上回ったと指摘した。この数値が一般誌において多い理由として「わかりやすさ」が挙げられる。壁・柱の枚数・本数以外の項目を見ると、どれも専門誌の方が多く結果となっている。それは壁の厚みや柱の高さなどの数値は専門家向けの数値であるからである。一方、壁の枚数や柱の本数は専門家だけでなく一般の人でも容易に理解できる。例えば「壁の厚みが250mmあるので大丈夫」という説明よりも「壁が10枚あるので大丈夫」という説明の方が一般の人にとってみれば理解しやすい。従って一般誌では「器具を使用しないで知覚可能な数値」、即ち「わかりやすさを追求した数値表現」を多用しているのに対し、専門誌では「器具を使用して計測する数値」、即ち「精確性を追求した数値表現」を多用していると考察する。

「視点位置」

「割合」の分析において「構成・規模」の項目における両誌の差を指摘した。一般誌では「内部空間」に関する具体的数値の割合が大きいのに対し、専門誌では「平面配置」に関する具体的数値の割合が大きい。このことから両誌における書き手の視点位置の一端を垣間見ることができる。「内部空間」の割合が高い一般誌は立体的な視点位置から、「平面配置」の割合が高い専門誌は平面的な視点位置から、建築作品の構成や規模を捉え、記述していると考えられる。

「即時性と記録性」

「順位」の分析において一般誌は歴史に関する数値が抽象的であり、当該建築に関する数値が多いという結果であった。一方、専門誌は歴史に関する数値が具体的であり、当該建築以外の建築に関する数値が多いという結果であった。これらから以下のように考察する。一般誌は歴史的数値情報に比べ、当該の建築作品に関する数値情報を重視している傾向にある。これは流行と建築の関係を積極的に模索している一般誌の即時性の高さを示していると考えられる。一方、専門誌では一般誌と比べて歴史的数値情報を重視している。これは専門誌の「記録性が高いこと」^{文14)}という特徴が大きく関係しているためであると考えられる。

「専門性」

「偏り」の分析において具体的数値の該当項目が専門誌に多いことを指摘した。またそれらの項目の多くが「構造」「材料」「設備」「法律・法規」といった専門性の高い項目である。この結果より専門性の高さが専門誌の特徴のひとつとすることができる。一方、一般誌は具体的数値において専門性が高いとは言い難い。

「移動」

「偏り」の分析から一般誌の「移動」に関する具体的数値に着目した。数少ない一般誌が専門誌よりも該当数が多い項目である。このことから「移動」に関する具体的数値は一般誌において建築作品自体の情報と同等の価値を持つ情報であると考えられる。読者が掲載されている建築作品に興味を持ち、実際に訪れてみたいと思案したとき「移動」に関する情報は重要となる。両誌の誌面構成を比較すると一般誌の方が建築作品訪問を助長する傾向が強い。一方、専門誌は「移動」に関する情報を建築作品説明のための補足情報として用いていると考えられる。以上から、一般誌は「移動に関する具体的数値」を用いることで読者のもつ潜在的利用者の一面を刺激していると考えられる。

3-3-2. 固有名詞

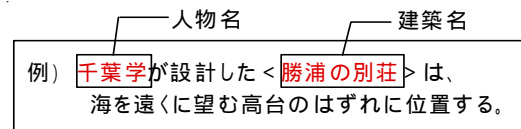
固有名詞とは同じ種類に属する他のものから区別するために、そのものだけに付けた名称を表す語である。それ固有の情報を持つこの言葉には普通名詞にはない説得力がある。ここでは固有名詞に注目し、その内容と効果を分析・考察する。

() 調査方法

例のように両誌の分析対象の説明文から固有名詞を抽出する。

抽出された固有名詞を、その内容に応じて「人物名」「建築名」「地名」の3項目に分類し、図表化を行う。

作成された図表をもとに、固有名詞による両誌の特質を分析・考察する。



No. 79 勝浦の別荘
(CasaBRUTUS vol.59 / February 2005)より

() 結果

表9は両誌における固有名詞の作品別の集計結果を示したものである。またここでは「人物名」「建築名」「地名」の3項目を基本として3段階で固有名詞を分類している。各項目の細分類として「人物名」では「建築家名」「アーティスト名」「クライアント名」「その他の人物名」の4項目、建築名では「当該の建築名」「当該建築家の建築名」「その他の建築名」の3項目、地名では「敷地」「敷地外」の2項目、これらに加えて「プロジェクト名」に分類し合計で10項目とした。さらに「建築家名」の項目では「当該」と「当該外」に「敷地」の項目では「国名」「県名」「市(郡)名」「駅名」に分類し、最終的に14項目とした。なお上記の項目に該当しない固有名詞は「他」に含まれる。

表9 - 1 作品別固有名詞の集計結果（一般誌）

No	発行年	号	建物名	設計者	人物名					建築名			地名					プロジェクト	他	計
					建築家		アーティスト	クライアント	その他	当該	当該建築家による建築	その他	敷地							
					当該	当該外							国	県	市(郡)	駅	敷地以外			
44	2004	1	建外SOHO	山本理顕	1	3				1			1		3					9
45		3	北向傾斜住宅	三分一博志	2															2
46		3	プライベート・ギャラリー	塚塚隆生	2					1										3
47		3	SHS	眞田大輔	1					2									1	4
48		3	屋根の家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	2	4				4										10
49		3	L	青木淳	2	3				5										10
50		3	S-tube	納谷新	1	3														4
51		3	MUJI+INFILLリノベーション	吉岡徳仁	2			1		1	1							1		6
52		3	二軒家アパートメント	木下道郎						1					1					2
53		3	N3ユニテ	横河健	1					1					1					3
54		3	Kashima Surf Villa	千葉学	4			7	1				1				1			14
55		3	スペースブロック ハノイモデル	小嶋一浩 + 曲淵英邦						2					2		2			6
56		7	まつもと市民芸術館	伊東豊雄	1					2	1								1	5
57		8	興社の茶屋	隈研吾	1					1	1				1					4
58		10	ECORIUM	谷口吉生	1					1	1	1			1					5
59		10	地中美術館	安藤忠雄	2		1			1									1	5
60		10	ランゲン美術館	安藤忠雄	4		2	1		2	1	1	1	2	1		3			18
61		10	イトウ・キネン・フェスティバル舞台	安藤忠雄	4		6								1		3	1	1	16
62		10	東雲キャナルコートCODAN																	0
63		12	二期倶楽部東館	コンラン & パートナーズ + 山本圭介	3				1	1										5
64		12	ホテル・イル・バラッツォ	アルド・ロッシ	4	11	1			3					1					22
65		12	秋吉台国際芸術村	磯崎新	1	2				2					2					7
66		2	G	青木淳	4		1	2		2					1					10
67		2	積層の家	大谷弘明	1					1					1					3
68		2	クリスタル・ブルック	山下保博	2					1										3
69		2	上原の家	みかんぐみ	1	2														3
70		2	トラス下の矩形	五十嵐淳	5				1	1			5	1	1	1				15
71		2	九段の家	阪根宏彦	4	2		3							2		1			12
72		2	展望台の家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	4	1				3	2				2					12
73		2	襲の家	早草陸恵	2					1					1					4
74		2	HP	米田明 / 池田昌弘	2	1				2										5
75		2	The House of F.F	丸山洋志	2															2
76	2	Vague	北山恒	2															2	
77	2	MESH	千葉学	2										1					3	
78	2	barres	木下道郎	3															3	
79	2	勝浦の別荘	千葉学	3					1										4	
80	2	黒犬荘	塚本由晴	2					2		1			2					7	
81	2	森を捕まえる家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	2					2					1					3	
82	2	カーザ・リベラ	西森陸雄	2					1					2					5	
83	4	ブラダプティック青山	Herzog & de Meuron	1	2						1	1							5	
84	4	TOD'S表参道ビル	伊東豊雄	1		1			1					2					5	
85	4	Dior	乾久美子						1					1					2	
86	4	Dior表参道	SANNA	1				1											2	
87	5	金沢21世紀美術館	妹島和世 + 西沢立衛 / SANNA	2			6		2										10	
88	5	スペイン館	アレハンドロ・ザエラ = ボロ	3		2			4	1	1	1			13		1		26	
89	5	三井・東芝館	大江匡	2					1	2								1	6	
90	5	トヨタグループ館	みかんぐみ	2				1	1										4	
91	5	富弘美術館	ヨコモシマコト	1		4			3		2								10	
92	5	豊田市美術館	谷口吉生	2						1	1			1		1			6	
93	10	竹中工務店東京本店ビル	菅順二	2	3		1	3	5		2								16	
94	10	モエレ沼公園	ザム・ノグチ + アーキテクトファイ	4					6					1					11	
95	10	札幌ドーム	原広司	1					1	2				2			1	2	9	
96	11	House YK / ILANDS	赤松佳珠子	3															3	
計					177	58	42	44	14	115	15	39	9	17	65	6	37	6	20	664
					335						169			134						

表9-2 作品別固有名詞の集計結果(専門誌)

No	飛行年	号	建物名	設計者	人物名				建築名			地名					プロジェクト	他	計	
					建築家		アーティスト	クライアント	その他	当該	当該建築家による建築	その他	敷地							敷地以外
					当該	当該外							国	県	市(郡)	駅				
1	1999	SPRING	水ノガラス	隈研吾					9		16				1			46		
2	2000	SUMMER	東京国立博物館法隆寺宝物館	谷口吉生					8	1	16						1	26		
3		1	ルイ・ヴィトン松屋銀座店	青木淳					1									1		
4		3	せんだいメディアテーク	伊東豊雄					2									7		
5		3	養老天命反転地	荒川修作					5									3		
6		3	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	谷口吉生					3									7		
7		3	ミホ・ミュージアム	I・M・ペイ		4		1			1	1	2	1	4	1		11		
8		8	メゾン・エルメス	レンゾ・ピアノ							1	1	2	1				20		
9		4	光の館	ジェームス・タレス					5					2	3	1		16		
10		4	アンパンマンミュージアム	古谷誠章				1	1					3		2	1	13		
11		7	下馬の連続住居	北山恒					3					1			3	7		
12		9	ビューリッツァー美術館	安藤忠雄					2	3				1				6		
13		9	シカゴ美術館・屏風ギャラリー	安藤忠雄		4	4	1	2		2			2				15		
14		9	ユネスコ瞑想空間	安藤忠雄											1	1		1		
15		9	アルマーニ/テアトロ	安藤忠雄		2	5	1	2		2			2				14		
16		9	FABRICA	安藤忠雄								2		1				5		
17		9	ヴィトラ・セミナーハウス	安藤忠雄		4	8		6			3	2	2	7			32		
18		9	ピカデリー・ガーデンズ	安藤忠雄		9	2	3			4			2	9		1	30		
19		9	淡路夢舞台	安藤忠雄		1			3					3	1			8		
20		9	南岳山 光明寺	安藤忠雄					10		3			1		1		15		
21		9	木の殿堂	安藤忠雄					1		2			1				4		
22		9	国際子ども図書館	安藤忠雄					3	2				1	1			7		
23		9	直島コンポラリアートミュージアム	安藤忠雄										1				1		
24		9	近つ飛鳥博物館	安藤忠雄										2				2		
25		9	大阪府立狭山池博物館	安藤忠雄							1				3			4		
26		9	兵庫県立美術館	安藤忠雄					2		4			8				14		
27		10	サーベントライン・ギャラリー	伊東豊雄							1			1				2		
28		11	荻北町民ホール	阿部仁史										2				2		
29		11	コム・デ・ギャルソン京都店	川久保玲		1	4		1					4				10		
30		12	三養荘	村野藤吾										1		1		5		
31		1	オアシス21	大林組					1		2			1				4		
32		3	フォートワース現代美術館	安藤忠雄		6	3		1		7	1	4					22		
33		7	護王神社	杉本博司							2			3		2	10	35		
34		7	PAM	坂茂				3	1	2	1							7		
35		7	まつだい雪国農耕文化村センター	MVRDV					1									1		
36		7	ルイ・ヴィトン高知店	乾久美子				4						1				5		
37		8	朱鷺メッセ	横文彦		1			1					2				0		
38		8	デル・ソル・ポニエンテ	隈研吾														0		
39		8	国民宿舎足摺テルメ	團紀彦					2					1				3		
40		8	なにわの海の時空館	ポール・アンドルー		4			2	2	2			5	1		1	17		
41		8	海の博物館	内藤廣										1				4		
42		8	松島ヨットハーバー・公園事務所	阿部仁史										3				3		
43		9	野間自由幼稚園	安藤忠雄		1			1					1				3		

表9-2 作品別固有名詞の集計結果(専門誌)

No	発行年	号	建物名	設計者	人物名					建築名			地名					プロジェクト	他	計
					建築家		アーティスト	クライアント	その他	当該	当該建築家による建築	その他	敷地							
					当該	当該外							国	県	市(郡)	駅	敷地以外			
44	2004	1	建外SOHO	山本理顕	1	11				1	2		4	11		9	4		5	48
45		3	北向傾斜住宅	三分一博志												2	1			3
46		3	プライベート・ギャラリー	塚塚隆生																0
47		3	SHS	眞田大輔		1									1	1				3
48		3	屋根の家	手塚貴晴・由比/池田昌弘		2					1							6		9
49		3	L	青木淳		3						2								5
50		3	S-tube	納谷新							2									2
51		3	MUJI+INFILLリノベーション	吉岡徳仁	1				10		7									18
52		3	二軒家アパートメント	木下道郎													5	1		6
53		3	N3ユニテ	横河健							2	1					1	2		6
54		3	Kashima Surf Villa	千葉学																0
55		3	スペースブロック ハノイモデル	小嶋一浩・曲淵英邦		2								2		5	2			11
56		7	まつもと市民芸術館	伊東豊雄						4	1							1		8
57		8	興社の茶屋	隈研吾							1					1				5
58		10	ECORIUM	谷口吉生									1		1	3		1		6
59		10	地中美術館	安藤忠雄			3	3			5			2	2	7			5	27
60		10	ランゲン美術館	安藤忠雄			1	10			5	2	4		1	1		3		27
61		10	イトウ・キネン・フェスティバル舞台	安藤忠雄			4													4
62		10	東雲キャナルコートCODAN														1	1		2
63		12	二期倶楽部東館	ロンラン&パートナーズ+山本圭介							1						3			4
64		12	ホテル・イル・バラッツォ	アルド・ロッシ							2	4				2	3			11
65		12	秋吉台国際芸術村	磯崎新			1				1					1			1	4
66		2	G	青木淳							1									1
67		2	積層の家	大谷弘明																0
68	2	クリスタル・ブルック	山下保博						1	1	1				1				4	
69	2	上原の家	みかんぐみ		1														1	
70	2	トラス下の矩形	五十嵐淳												1				1	
71	2	九段の家	阪根宏彦		1										2				3	
72	2	展望台の家	手塚貴晴・由比/池田昌弘												1	1			1	
73	2	襲の家	早草睦恵												1				1	
74	2	HP	米田明/池田昌弘																0	
75	2	The House of F.F	丸山洋志		3														3	
76	2	Vague	北山恒		1										1				2	
77	2	MESH	千葉学							1									1	
78	2	barres	木下道郎												1				1	
79	2	勝浦の別荘	千葉学		1														1	
80	2	黒犬荘	塚本由晴							1						9			10	
81	2	森を捕まえる家	手塚貴晴・由比/池田昌弘												1				1	
82	2	カーザ・リベラ	西森陸雄							1	1				1				3	
83	4	ブラダプティック青山	Herzog & de Meuron			1	4			5			1			1			12	
84	4	TOD'S表参道ビル	伊東豊雄			1									2	1			4	
85	4	Dior	乾久美子												1				2	
86	4	Dior表参道	SANNA	1			4								1				6	
87	5	金沢21世紀美術館	妹島和世+西沢立衛/SANNA												1				1	
88	5	スペイン館	アレハンドロ・ザエラ=ポロ	1						1	1						6	3	12	
89	5	三井・東芝館	大江匡																0	
90	5	トヨタグループ館	みかんぐみ				2												2	
91	5	富弘美術館	ヨコモソマコト		3	5				1		3	1	1			2		16	
92	5	豊田市美術館	谷口吉生			3					2				5				10	
93	10	竹中工務店東京本店ビル	菅原二				1								1				2	
94	10	モエレ沼公園	サム・ノグチ+アーキテクトファイ	15						2	6			1	3	2			29	
95	10	札幌ドーム	原広司												2			1	3	
96	11	House YK/ILANDS	赤松佳珠子		1														1	
計					31	85	41	78	24	116	30	85	19	14	146	2	68	14	27	776
					260					231			249							

()分析

表9より「絶対量」「割合」の2つの観点から両誌における固有名詞を分析する。

「絶対量」

表10は各項目の集計結果を示したものである。これより合計で一般誌は664、専門誌は776の固有名詞を抽出した。文章量を考慮すると一般誌のほうが専門誌よりも固有名詞の使用頻度が比較的高い。

	人物名					建築名			地名					プロジェクト	他	計
	建築家		アーティスト	クライアント	その他	当該	当該建築家による建築	その他	敷地			敷地以外				
	当該	当該外							国	県	市(郡)		駅			
一般誌	335					169			134					6	20	664
	177	58	42	44	14	115	15	39	9	17	65	6	37			
専門誌	260					231			249					14	27	776
	31	85	41	78	24	116	30	85	19	14	146	2	68			

表10 固有名詞の項目別集計結果

「割合」

図8は表10をもとに両誌における固有名詞の項目の割合を示したものである。「人物名」「建築名」「地名」の3項目の割合に注目する。専門誌では「人物名」33%「建築名」30%「地名」32%とバランスよく固有名詞が使用されているのに対し、一般誌では「人物名」50%「建築名」25%「地名」21%と固有名詞が「人物名」に集中している。「人物名」を詳細に見ると「当該建築家名」の項目が一般誌で26%と一般誌における「人物名」の半分以上を占めている。また一般誌特有の項目は「駅名」である。この項目は専門誌からほとんど抽出されなかった。一方、専門誌において特徴的な固有名詞は「建築名」である。一般誌では25%に対して専門誌では30%と割合が比較的大きい。その要因として細分類の「その他の建築名」が挙げられる。これは一般誌では6%であるのに対して専門誌では11%と差が見られる。また「地名」では両誌の特徴が現れている。まず専門誌の特徴は「地名」の細分類中の「敷地(市郡名)」である。一般誌が10%であるのに対して専門誌は19%と大きな差が見られる。同時に「敷地(市郡名)」の割合は専門誌の固有名詞の中で最大の割合である。

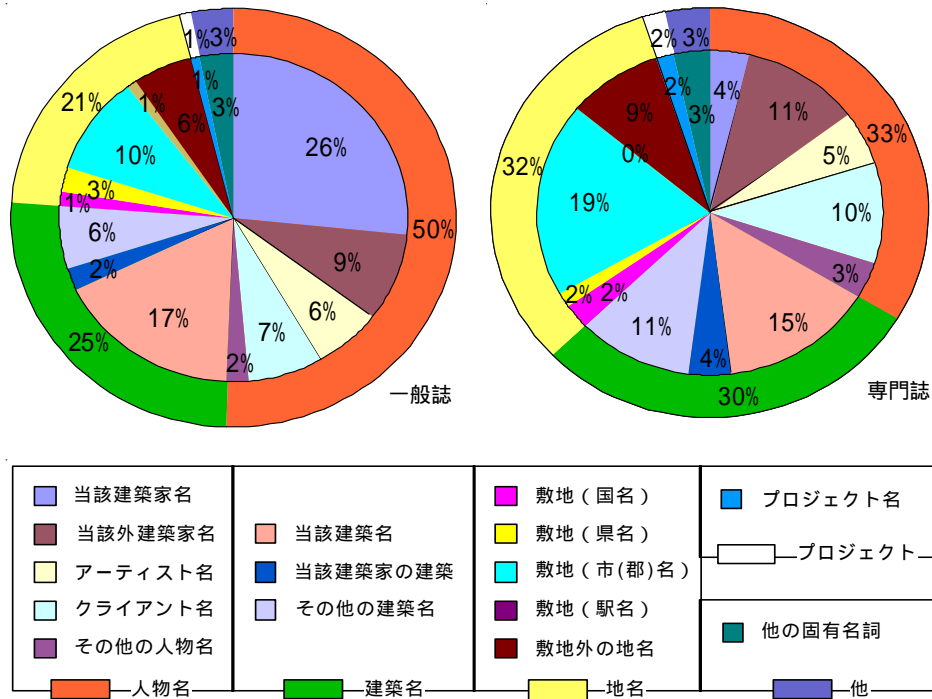


図8 固有名詞の項目別割合

() 考察

以上から固有名詞による両誌の特質として「建築家名」「地名」の2点が挙げられる。

「建築家名」

専門誌において当該建築家名が文章中に登場するのは稀である。登場する場合は表紙、目次、タイトル、後ページの紹介の4ヶ所が主である。そのため同誌面上に連続して登場することはわずかである。加えて専門誌の作品説明文は当該の建築家により書かれているため必然的に専門誌では登場回数が少なくなる。そのため専門誌の説明文においては建築作品が主、建築家は従の関係であるといえる。一方、一般誌では分析より建築家名が頻出している。そのため一般誌の説明文における建築作品と建築家との関係に差はなく、共に主といえる。ここから一般誌では建築家を建築作品の製作者としてだけでなく建築家個人を積極的に取り上げ、読者に印象付けるといふ「宣伝」の意図が読み取れる。説明文中に建築家名が登場することで読者は自然と「注目されている建築家である」と理解し一般誌からの情報を受け取る。これに伴い建築家の印象や知名度が大きく変化する。それは結果として建築家の建築作品や設計論をファッションブランドと同様のブランド化するという効果を生みさせていると推測する。これは専門誌にはない傾向である。

「地名」

分析から専門誌における「地名」は国名や県名という表記ではなく「市（郡）名」のように細かな地名まで記された建築作品が多いことが判明した。このことから専門誌において建築作品の正確な所在地の記入は専門誌の説明文における定式化された記述構成のひとつであると推測できる。また「地名」の小分類である「駅名」は両誌において違う扱いがされていると考察する。専門誌において「駅名」は上記の「市（郡）名」と同様に建築作品の補足情報である。一方、一般誌における「駅名」は前述した「具体的数値」の「移動」の考察と同様に読者のもつ潜在的利用者の一面を刺激する働きをしていると考える。

3-3-3. 反復語

反復語は繰り返し使用される言葉のことである。これにより書き手側の意図を強調するなど言葉の重要性を強調可能となる。また反復語は読者の記憶に残りやすい。ここではそのような文章中で登場する反復語に注目し、その内容と効果を分析・考察する。

() 調査方法

文章量の違いにより抽出する反復語の量に差が出てしまうため、今回は文章量に応じて以下のように条件を設けた。

- a. 文章量を四捨五入する。
- b. aで得た数値を10分の1にする
- c. 四捨五入した段階で20文以下は自動的に下限を3とする。^{注1)}

例) 文章量を35文とする。

- a. 四捨五入する = 40
- b. 1 / 10 にする = 4

よって

この分析対象の説明文中に

4回以上登場した言葉が**反復語**となる。

条件から抽出された反復語を集計し、図表化する。^{注2)}

作成された図表をもとに、反復語による両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

表11は()の条件のもと抽出した両誌の反復語を分析対象ごとに集計したものである。さらに抽出された反復語はその意味に応じて表のように16項目に分類した。以下この表11をもとに分析・考察を行っていく。

分類項目		例	一般誌	専門誌	
人関連	人名	当該の建築家	安藤忠雄	13	3
		その他の建築家	ゲーリー	3	3
		クライアント	エルメス	8	8
		その他	猪熊弦一郎	2	1
		名称	施主	14	17
	行為	瞑想	9	13	
建築関連	手法	色	25	91	
	建築名	当該	法隆寺宝物館	9	10
		その他	日向邸	0	4
	用途	建築	美術館	35	41
		室	展示室	4	26
	構成	柱	38	34	
	構造	木造	6	15	
	素材	ガラス	13	21	
	設備	シャッター	6	11	
	条件	インテリア	屏風	7	9
環境		駅前	25	78	
歴史		伝統	0	14	
地名		イタリア	6	16	
	他	危険	5	5	
計			228	420	

表11 両誌における反復語の意味別集計結果

()分析

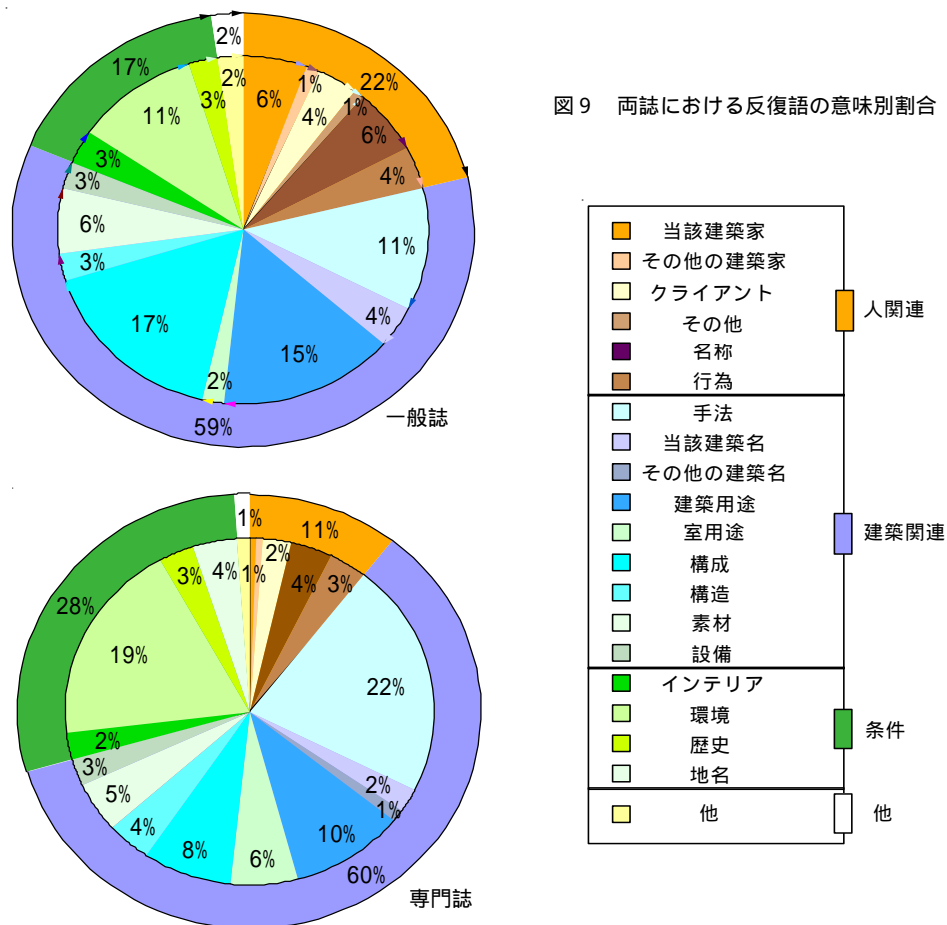
ここでは「絶対量」「割合」の2つの観点から両誌における反復語を分析する。

「絶対量」

表11より合計で一般誌は228、専門誌は420の反復語を抽出した。()において文章量の差を考慮した条件を示したため、この結果から一般誌に比べ専門誌に反復語が頻出していることがわかる。

「割合」

図9は両誌の項目別の割合を示したものである。図から両誌において「人間関連」「建築関連」「条件」の3分類それぞれに特徴が見られる。「人間関連」では一般誌が22%と専門誌における11%の倍の割合である。その要因として「当該建築家」の項目が挙げられる。次に「建築関連」は一般誌では59%、専門誌では60%と近似した割合であるが、その構成に差が見られる。一般誌では「建築関連」の主な構成要素として「当該建築名」「建築用途」「構成」の3項目が挙げられる。3項目共に専門誌よりも割合が大きい。一方専門誌における主な構成要素は「手法」と「室用途」の2項目である。さらに「条件」では一般誌が17%、専門誌が22%と比較すると専門誌における割合が高い。この差の主な要因は「環境」の項目の割合の差である。



() 考察

以上から反復語による両誌の特質として「媒体としての人」「外視点と内視点」「建築作品の観光地化」「印象と統一」「主体と背景」「特集」の6点が挙げられる。

「媒体としての人」

上記の結果から「人」に関する反復語が一般誌には多いことが分かる。即ち、これは一般誌が建築と同じくらい「人」に着目していることを示している。専門的知識の少ない一般の読者にとって「人」が関連する記述表現からの受け取る情報は理解しやすい。説明文を通じて読者は紹介されている建築に関わる人々の感情や感覚などを自身のものとして擬似的に体験するの。つまり一般誌には読者が容易に共有可能である「人」という媒介を積極的に使用している意図が読み取ることができる。この点から建築家は専門誌では積極的に使用されていない「人」という媒介の重要性とその効果を自身の表現手法の参考にすると考察する。

「外視点と内視点」

「割合」の分析において両誌の「用途」に関する割合に差が見られた。一般誌では「建築用途」、専門誌では「室用途」に比重を置いている。このことから視点の違いが指摘可能である。一般誌は「建築用途」という外部から建築を捉えた表現をしている。一方、専門誌は「室用途」という内部から建築を捉えた表現をしている。これは両誌の書き手の立場が大きく関係している。一般誌の場合は記者という建築制作において第三者である立場から説明文を書いている。そのため建築に対するアプローチは必然的に外部からとなる。それに対し専門誌の場合は建築家という建築制作の中核に位置する立場から説明文を書いている。そのため建築に対するアプローチは必然的に内部(根源部分)からとなる。この差異が上記の「用途」の差異に関連していると考えられる。

「建築作品の観光地化」

総合的な割合において一般誌は専門誌に比べ「用途」に関する言葉を多く反復使用する傾向にある。専門誌における建築の用途に関する情報は意匠や技術に関する情報に比べ重みを置かれていない。一方、一般誌において建築の用途に関する情報は意匠と同等の価値を持つ。一般誌が対象としているのは最新の建築作品であると同時に「現役の建築」^{文15)}である。一般誌の誌面構成を見ると地図やイベントの情報が掲載しているなどガイドブックに似た印象を受ける。これは意図的に行われていることである。以上から一般誌は建築を観光資源としようとしていると考えられる。お寺巡りや遺跡巡りと同様に建築作品をひとつの観光目的として捉え、現役の建築の魅力をその用途と絡めて紹介することで観光地化を助長している。また建築家を紹介することでその範囲を拡大させてもいる。またこの延長線上には読者への影響として次のことが考えられる。一般誌からの情報により読者の持つ建築のステレオタイプ(典型性)とプロトタイプ(類型性)が増加する。結果、従来の固定観念を持ったままの施主に比べ一般誌の読者に含まれる潜在的施主は専門家に近づいた存在となる。そのため建築家と施主との関係が大きく変化し、より専門的

なやり取りとなる。この変化は建築家の設計手法に大きく影響してくる。つまり「施主の専門化」が一般誌によって助長されていると考えられる。

「印象と統一」

集計結果から一般誌よりも専門誌の方が反復語を多用していることが理解できた。だが反復語の使用が少ないことは単純に強調するものが少ないことを指すわけではない。反復語が少ないことは言葉の多様性を含んでいる。一般誌において同様のものを表現する時に数種類の言葉を用いている。例えば“斜めになっている土地”を示す言葉の場合、一般誌では斜面、傾斜、斜め、角度のある、と同一文章中において4種類の言葉で表現されている。それに対し専門誌の反復語の頻出は共通性(一貫性)を示している。これらは読者に与える文章の印象に直結すると考えられる。一般誌では多種多様な言葉を用いることで変化に富んだ説明文を生み出している。これは結果として読者に柔軟な印象を与える。一方、専門誌の言葉が統一された文章は読者に硬い印象を与えるだろう。この表現の違いは文章量も大きく関わっているといえる。文章量が少ない一般誌において重要なのは「印象」である。言葉の統一よりも一文一文の伝えたい趣旨やイメージを最もよく表している適切な言葉を使用していると考えられる。その結果、多種多様な表現となっている。対して、専門誌は文章量が多いため言葉の統一がされていないと情報の正確性を維持できない。そのため記録性を重視する専門誌において言葉の統一は絶対的な規則であると考えられる。

【註釈】

- 1) 条件の下限を3とした理由は、該当数2では反復する効果が不十分であると判断したためである。
- 2) 「建築」「建物」「空間」「私(僕)」という単語は多用されているため今回は対象外とした。

3-4. 修辞技法

3-1で示したように専門誌の1作品における説明文の長さに対して、一般誌のそれは約半分である。そこで一般誌は少ない文章量で読者に十分な情報を提供するために修辞技法を用いている。それらは「比喩表現」「擬音語・擬態語」「体言止め」の3項目であり、以下、順次検討していく。

3-4-1. 比喩表現

「まるで のような」や「 をイメージした」などの比喩表現を使用することで書き手は読者に実際の様子を具体的にイメージさせることができる。特にその表現内容が読者にとって身近であるほど大きな効果を生む。ここでは両誌の説明文中に登場する比喩表現に着目し、その内容と効果を比較することで各雑誌の特徴を分析・考察する。

() 調査方法

各雑誌の記述中から以下の条件を満たす文節を比喩表現として抽出する。

- a. 「まるで のような」「 をイメージした」という言葉が付随している

例) 繭の中にいるような、浴衣を羽織るようなイメージ

- b. 別の言葉に「言い換えている」または「例えている」文節

例) 夜間の建築作品の様子 「光の箱」

条件に該当したものを属性別に分類し、図表化する。

図表をもとに、比喩表現による両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

表12は両誌における分析対象別の比喩表現の該当数とその集計結果を示したものである。さらに表13は分析対象から抽出した比喩表現を「種類」「内容」「対象」に分類し整理したものである。また説明文中に登場した比喩表現をすべて記載してある。

比喩表現の種類は多岐に渡るが「種類」の項目では「直喩」「隠喩」「擬人法」の3種類を選択し、抽出した比喩表現はすべてこの3種類に分類した。「直喩」とは、修辞法における比喩のひとつで一つの事物を直接に他の事物にたとえることであり、「たとえば」「まるで」「ようだ」などとはっきりと比喩であることを示した比喩表現である。次いで「隠喩」とは言葉の上で、たとえの形式をとらない比喩表現である。最後に「擬人法」とは人間でないものを人間になぞらえて表現する方法である。

「内容」の項目は「比喻表現が何に例えているのか」という表現内容に着目している。ここでは「直喩」と「隠喩」に該当する表現を2段階に分類した。第1分類では「生物」「箱」「アート」「器」「ファッション」「雑貨」「乗り物」「建築」「建築の一部」「街」「自然」「雰囲気」「状態」の13項目に分類する。「隠喩」では「生物」「雑貨」「箱」「器」「乗り物」「建築」「空間」「その他」の8項目に分類した。第2分類は各項目ごとに細分類し「直喩」では28項目、「隠喩」は9項目となった。比喻表現の内容別の集計結果は表13の左側に表示した。 - と表示している数字は左側が一般誌の該当数、右側が専門誌の該当数を示している。各項目の並び方は表の下に行くほど規模が大きくなるような順序をとっている。

「対象」の項目は「何に対して比喻表現を使用しているのか」ということに着目している。対象は「建築自体」「空間」「構造」「素材」「その他」の5つに分類した。「建築自体」はその名の通り比喻表現の対象が紹介されている建築自体の場合である。「空間」は文章上で空間と書かれているものだけでなく、寝室などの内部空間、場所や庭などの外部空間や抽象的な空間もここに該当する。「構造」は鉄骨などの構造材や屋根や壁などが該当する。「素材」はガラスやアクリルスクリーンなどが該当する。「その他」には上記の4つの項目以外の比喻対象が該当する。以下この表12、表13をもとに分析・考察を行っていく。

発行年	建築名	一般誌	専門誌	
1	1999	水ノガラス	7	1
2	2000	東京国立博物館法隆寺宝物館	0	1
3	2001	ルイ・ヴィトン松屋銀座店	0	0
4		せんだいメディアテーク	2	0
5		養老天命反転地	1	1
6		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	0	0
7		ミホ・ミュージアム	1	0
8		メゾン・エルメス	1	3
9		光の館	3	0
10	2002	アンバンマンミュージアム	1	1
11		下馬の連続住居	0	1
12		ビューリッツァー美術館	0	1
13		シカゴ美術館・屏風ギャラリー	2	0
14		ユネスコ瞑想空間	0	1
15		アルマーニ/テアトロ	0	0
16		FABRICA	0	0
17		ヴィトラ・セミナーハウス	2	0
18		ピカデリー・ガーデンズ	0	0
19		淡路夢舞台	1	0
20		南岳山 光明寺	0	3
21		木の殿堂	0	0
22		国際子ども図書館	0	0
23	直島コンボラリーアートミュージアム	2	0	
24	近つ飛鳥博物館	0	2	
25	大阪府立狭山池博物館	0	0	
26	兵庫県立美術館	0	1	
27	サーベントイン・ギャラリー	0	0	
28	琴北町民ホール	0	2	
29	コム・デ・ギャルソン京都店	3	1	
30	三養荘	2	8	
31	2003	オアシス21	1	5
32		フォートワース現代美術館	2	2
33		護王神社	1	1
34		PAM	0	0
35		まつだい雪国農耕文化村センター	1	0
36		ルイ・ヴィトン高知店	1	0
37		朱鷺メッセ	1	1
38		デル・ソル・ボニエンテ	1	0
39		国民宿舎足摺テルメ	0	0
40		なにわの海の時空館	0	2
41	2004	海の博物館	0	3
42		松島ヨットハーバー・公園事務所	2	4
43		野間自由幼稚園	2	0
44		建外SOHO	2	6
45		北向傾斜住宅	1	0
46		プライベート・ギャラリー	1	1
47		SHS	1	1
48		屋根の家	0	1
49		L	0	1
50		S-tube	1	0
51		MUJI+INFILLリノベーション	0	1
52		二軒家アパートメント	0	0
53		N3コニテ	0	0
54		Kashima Surf Villa	0	1
55	スペースブロック ハノイモデル	0	0	
56	まつもと市民芸術館	3	2	
57	興社の茶屋	0	3	
58	ECORIUM	1	1	
59	地中美術館	0	2	
60	ランゲン美術館	2	3	
61	サイトウ・キネン・フェスティバル舞台美術	1	1	
62	東雲キャナルコートCODAN	0	0	
63	二期倶楽部東館	1	2	
64	ホテル・イル・バラツツォ	0	1	
65	秋吉台国際芸術村	0	0	
66	G	0	0	
67	積層の家	0	0	
68	クリスタル・ブルック	3	1	
69	上原の家	0	0	
70	トラス下の矩形	0	0	
71	九段の家	3	0	
72	展望台の家	1	1	
73	襲の家	0	0	
74	HP	2	0	
75	The House of F.F	4	3	
76	Vague	0	2	
77	MESH	0	0	
78	barres	0	0	
79	勝浦の別荘	1	0	
80	黒犬荘	1	0	
81	2005	森を捕まえる家	1	0
82		カーザ・リベラ	1	0
83		ブラダブティック青山	2	6
84		TOD'S表参道ビル	0	1
85		Dior	0	0
86		Dior表参道	7	0
87		金沢21世紀美術館	2	1
88		スペイン館	0	0
89		三井・東芝館	0	1
90		トヨタグループ館	1	0
91	富弘美術館	5	3	
92	豊田市美術館	0	1	
93	竹中工務店東京本店ビル	1	1	
94	モエレ沼公園	0	0	
95	札幌ドーム	1	0	
96	House YK / ISLANDS	1	0	
計		91	93	

表 1.2 両誌における比喩表現の集計結果

表 1-3 比喩表現の項目別分類結果

第1分類	第2分類	例	文章上の対象	対象	種類	一般誌	専門誌	
生物 6-4	動物 3-2	カタツムリのような渦巻き状態	作品	その他	直喩	1		
		繭の中にあるような	空間	空間	直喩	1		
		ハリネズミのような	構造体	構造	直喩	1		
		両翼を広げて休む鳥のようなかたち	初音	建築自体	直喩		1	
		生物が増殖するように	建設過程	その他	直喩		1	
	植物 3-2	海草のような	柱	構造	直喩	1		
		花が開いていくような	外観	建築自体	直喩	1		
		すっきりと芽が立っているような	外観	建築自体	直喩	1		
		両側に枝のように分岐	建物	建築自体	直喩		1	
		森の樹木のような	空間	空間	直喩		1	
箱 2-1	箱のような	空間	空間	直喩	1			
	大きな積み木の箱を重ねたような	パビリオン	建築自体	直喩	1			
	ただの箱のようなかたち	建物全体	建築自体	直喩		1		
アート 4-4	絵画 1-2	キャンパスのような	壁	構造	直喩	1		
		絵画のような表情	公園	空間	直喩		1	
	音楽 1-0	真っ白な紙に自由に絵を描くようなもの	設計	その他	直喩		1	
		静かな戯曲の序幕のよう	生活	その他	直喩	1		
	写真 1-0	モノクロ写真みたい	建物	建築自体	直喩	1		
		アートみたいなもの	空間自体	空間	直喩	1		
器 1-2	その他 1-2	コンクリートに象嵌されたかのような印象	ガラス	素材	直喩		1	
		現代彫刻の間を通り抜けるような印象	光	その他	直喩		1	
		重厚な木の机に置かれた漆器のように	壁面	構造	直喩	1		
		石造ビビンバの器のようなもの	壁	構造	直喩		1	
		細長いワインボトルのような形状	敷地	空間	直喩		1	
		ドレスのような	アクリルスクリーン	素材	直喩	1		
ファッション 4-2	衣服 4-1	布の滑らかさ	アクリルスクリーン	素材	直喩	1		
		布で覆われているような	建物全体	建築自体	直喩	1		
		裏返しシャツのような	仕上げ材	素材	直喩	1		
	装飾品 0-1	布のドレープのように	壁面	構造	直喩		1	
		枝の先に結ぶ花冠のように	家々	建築自体	直喩		1	
		万華鏡のように	ガラス	素材	直喩	1		
雑貨 7-11	玩具 3-4	並んだシャボン玉のように	部屋配置	空間	直喩	1		
		バスルのように	部屋配置	空間	直喩	1		
		浴衣を羽織るようなイメージ	建築	建築自体	直喩		1	
		ヤジロベエのように支える	構造	構造	直喩		1	
	家具 1-1	もくろたきよろしく	窓	構造	直喩		1	
		バスルを解くかのように	部屋配置	空間	直喩		1	
		さまざまなものを映し出す鏡	壁面	構造	直喩	1		
		部屋のベッド	ベッド	その他	直喩		1	
		鳥かごのよう	構造	構造	直喩	1		
		スプーンで削られたゼリー	形状	建築自体	直喩	1		
		スタレのよう	壁	構造	直喩		1	
		水晶	建物全体	建築自体	直喩		1	
その他 3-6	傘のような形状	建物全体	建築自体	直喩		1		
	ブルザ(袋の原型)	建物全体	建築自体	直喩		1		
	望遠鏡	チューブ	構造	直喩		1		
	魔法のランタンが灯ったかのような印象	建物	建築自体	直喩		1		
	メビウスの輪の表裏のようなもの	公共性	その他	直喩		1		
	まるでUF0の母船のよう	ガラス製ルーフ	素材	直喩	1			
乗り物 1-1	船をつくるよう	構造体	構造	直喩		1		
	グラナダのアルハンブラのような	場所	空間	直喩	1			
	建築 9-11	具体的 1-3	法隆寺をイメージする建築	建築	建築自体	直喩		1
			能楽堂のよう	壁	構造	直喩		1
			ヴェネツィアの教会建築のような	建築	建築自体	直喩		1
		抽象的 8-8	バラックのような建物	建物	建築自体	直喩	1	
			シェルターのように心地よい場所	場所	空間	直喩	1	
			自分で組み立てた基地	家	建築自体	直喩		1
			植物園のような	大空間	空間	直喩		1
			迷路のような	壁	構造	直喩		1
			まるでギャラリーのような	空間	空間	直喩	1	
			城のような	部屋	空間	直喩	1	
			美術館のような	外観	建築自体	直喩	1	
			美術館のような	場所	建築自体	直喩		1
			劇場のような	空間	空間	直喩		1
			独立した住宅のような棟	棟	建築自体	直喩		1
			砦のような	住宅	建築自体	直喩		1
			伝統的な日本の家屋のよう	木製パネル	素材	直喩		1
			典型的な家屋	建物	建築自体	直喩		1
			巣穴のような	住まい	建築自体	直喩		1
黒い冷たい倉庫に入るような感覚	ショップ	建築自体	直喩		1			
建築一部 4-5	縁側 1-3	「縁側」のような	廊下	空間	直喩	1		
		「縁側」のような	緩衝空間	空間	直喩		1	
		「縁側」のような	空間	空間	直喩		1	
	庭 3-2	日本の縁側のような	空間	空間	直喩		1	
		坪庭のような	光庭	空間	直喩	1		
		お寺の石庭のような	露天風呂	空間	直喩	1		
街 2-3	庭 3-2	脱衣場のよう	家	建築自体	直喩	1		
		庭の焼きのよう	廊下	空間	直喩		1	
		庭のよう	松島	空間	直喩		1	
		小さな街のような宿	宿	建築自体	直喩	1		
		街路沿いに個性の違った家がある感じ	部屋配置	空間	直喩	1		
		湖岸の群落のよう	棟	建築自体	直喩		1	
街並みのよう	街並みのよう	外部空間	空間	直喩		1		
	どこか懐かしい村のイメージ	ホテル	建築自体	直喩		1		
計						40	44	

表 1-3 比喩表現の項目別分類結果

第1分類	第2分類	例	文章上の対象	対象	種類	一般語	専門語
自然 11-8	海 4-0	水の中でゆらめく海草というイメージ	チューブ	チューブ	構造	1	
		波頭のような	屋根	構造	1		
		太平洋に浮かんでいる感覚	ガラスの箱	建築自体	1		
		自分の体が海に浮かんでいるような	建物	建築自体	1		
	水 2-2	深い水の中のイメージ	部屋	空間	1		
		泡のような形のガラス	ガラス	素材	1		
		一瞬にして凍りついた水	ガラス	素材	1	1	
		水がべールのよう	水	素材	1	1	
	森 2-2	明るい森のような	空間	空間	1		
		まるで森の上で寝ているような気分	寝室	空間	1		
		森を歩いているような	壁面	構造	1	1	
		木漏れ日のような	光	その他	1	1	
	山 2-1	山の稜線のような	屋根	構造	1		
		山並みをコピーしたかのような	鉄骨	構造	1		
		原っぱのようなもの	ミュージアムのデザイン	その他	1	1	
		草原の上を飛ぶように	感覚	その他	1		
	その他 1-3	丘を形成するような	階段	空間	1	1	
		地形のような	建物	建築自体	1	1	
		洞窟的な空間イメージ	建物	建築自体	1	1	
		夢のような遊び場	遊び場	空間	1		
雰囲気 3-7	別世界 3-2	別次元を漂うかのように	感覚	その他	1		
		桃源郷のような光景	光景	その他	1		
		まるで別世界のよう	チューブ内	構造	1	1	
		古墳の世界に入ったような感覚	空間	空間	1		
	その他 0-5	ダイアグラムそのものような空間	空間	空間	1		
		道のよう	建物	建築自体	1	1	
		光と空気のみ構成されたような	空間	空間	1	1	
		網の目のように	水路	その他	1	1	
状態 10-10	行動 7-1	SOHOのような	生活	その他	1	1	
		空気をはらんだかのように	形状	建築自体	1		
		丸めた画紙で眺めるような	海	その他	1		
		手のひらに載せたような	建物	建築自体	1		
		飛び上がりがたくなるような	美術館	建築自体	1		
		数学の方程式が解けた瞬間のような	感覚	その他	1		
		ピースサインに見えてくる	柱	構造	1		
		光と時間を魔法で封じ込めたかのように	壁	構造	1		
	状況 3-9	編集するかのように	作品配置	その他	1	1	
		そこだけ溶けてしまったかのような	窓	構造	1		
		スローモーション映像のように	感覚	その他	1		
		浮かぶように建っている	別荘	建築自体	1		
		壊さ止めるような印象	建物	建築自体	1	1	
		ワークショップのような	作業	その他	1		
		空中に持ち上げられている	建物全体	建築自体	1		
		空中にいるように感じられる	空間	空間	1		
地面から浮いているよう	建物	建築自体	1				
水面に浮かぶ木のお堂のイメージ	建物	建築自体	1				
液体が瞬間的に固まってしまったかのような	ガラス	素材	1				
どの方向も正面であるような	形状	建築自体	1				
シーンを切り替えられるような	空間	空間	1				
						計	24 25
						合計	64 69

第1分類	第2分類	例	文章上の対象	対象	種類	一般語	専門語
生物 1-1		アート作品の黒子	建物	建築自体	隠喻	1	
		知覚の延長器官	建物全体	建築自体	隠喻	1	1
雑貨 4-1		一世代の夢の結晶	家	建築自体	隠喻	1	
		アクリルの布	アクリルスクリーン	素材	隠喻	1	
		ドレスの質感	アクリルスクリーン	素材	隠喻	1	
		固体と気体の中間的な生成物	舞台	空間	隠喻	1	
箱 1-2		1枚のリボン	建物	建築自体	隠喻	1	1
		3つの箱	建物	建築自体	隠喻	1	
		白い箱	形式主義	その他	隠喻	1	
器 0-3		光の箱	建物全体	建築自体	隠喻	1	
		洗練されたアートの容器	美術館	建築自体	隠喻	1	
		定住させる器	家	建築自体	隠喻	1	
乗り物 1-1		人生シミュレーションを映し出す器	住宅	建築自体	隠喻	1	
		未来の戦艦	建物	建築自体	隠喻	1	
建築 8-3	具体的 1-0	水の宇宙船	大屋根	構造	隠喻	1	1
		現代版桂離宮	建物	建築自体	隠喻	1	
	抽象的 7-3	コンクリートのタイムトンネル	エントランス	空間	隠喻	1	1
		見えないショップ	コンセプト	その他	隠喻	1	
		「用の美」の建築	建物	建築自体	隠喻	1	
		エルメスの家	建物	建築自体	隠喻	1	
		昭和の竜宮城	目黒雅叙園	建築自体	隠喻	1	
		白亜の摩天楼	建物	建築自体	隠喻	1	
		夢の未来都市	建物	建築自体	隠喻	1	
		物たちの難民収容所	建物	建築自体	隠喻	1	1
空間 4-2		新しい港	建物	建築自体	隠喻	1	
		膨らみのある空間	空間	空間	隠喻	1	
		意識が彷徨う異空間	家	建築自体	隠喻	1	
		魔法の空間	幼稚園	建築自体	隠喻	1	
		静謐で観想的な内部空間	内部空間	空間	隠喻	1	
		空間の地形	余白	その他	隠喻	1	
その他 5-6		空間のふくらみ	空間	空間	隠喻	1	
		優雅な旋律	建物	建築自体	隠喻	1	
		精神的な広がり	住宅	建築自体	隠喻	1	
		水の環境芸術	家	建築自体	隠喻	1	
		植物のアナロジー	外観	建築自体	隠喻	1	
		一種のチェーンナップ	リノベーション	その他	隠喻	1	
		芸術の森	美術館	建築自体	隠喻	1	1
		第2の地形	建物	建築自体	隠喻	1	
		死者の世界	収蔵	空間	隠喻	1	
		光の運河	平面構成	空間	隠喻	1	
		無の豊穡	何も無い空間	空間	隠喻	1	
		積層するレイヤー	建物	建築自体	隠喻	1	
						計	24 19

例	文章上の対象	対象	種類	一般語	専門語
女性らしい	アクリルスクリーン	素材	擬人法	1	
家族のようにゲストを迎えてくれる	空間	空間	擬人法	1	
女性のボディのよう	建物全体	建築自体	擬人法	1	
赤ん坊になったような危うい感じ	感覚	その他	擬人法	1	
群落の頭のように	宴会場	空間	擬人法	1	
物はゆっくりと老いる	物	その他	擬人法	1	
口を開けている	サンクンガーデン	空間	擬人法	1	
訪ねる人に語りかけてくるような	場所	空間	擬人法	1	
				計	3 5

総合計 91 93

() 分析

ここでは「絶対量」「種類」「内容」「対象」の4つの観点から両誌における比喩表現を分析する。

「絶対量」

表12より比喩表現の絶対量は一般誌が91、専門誌が93であり、文章量を考慮すると比喩表現は専門誌に比べ一般誌の方が2倍近い頻度で使用していることがわかる。従って、比喩表現は一般誌の特徴といえる。

「種類」

表13より比喩表現の種類別の集計結果は「直喩」が一般誌64 専門誌69、「隠喩」が一般誌24 専門誌19、「擬人法」が一般誌3 専門誌5となった。図10はこの情報をもとに両誌における比喩の種類別の割合を示したものである。これより両誌間に比喩表現の種類による大きな差異は見られない。

	一般誌	専門誌	計
直喩	64	69	133
隠喩	24	19	43
擬人法	3	5	8
計	91	93	184

表14 比喩表現の種類

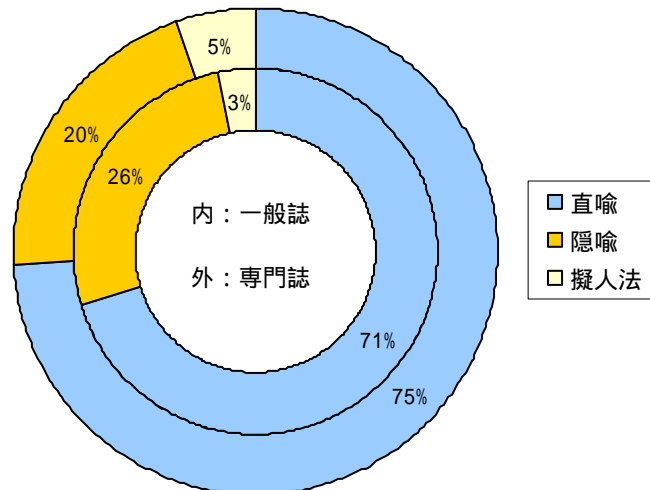


図10 両誌における比喩表現の種類別の割合

「内容」

表15は直喩における内容別の集計結果を示したものである。また図11は表15をもとに両誌における直喩の内容別の割合を示したものである。これより両誌に特徴的な差異が見られた項目は「生物」「ファッション」「建築」「自然」「状態」の5項目である。図より「生物」の項目において一般誌が10%であるのに対し専門誌が6%と差が見られる。詳細に見ると一般誌は「動物」「植物」両項目において一般誌よりも高い割合を示している。「ファッション」の項目は一般誌の割合が6%に対して専門誌が3%と比較的差が大きい。その主な要因は第2分類の「衣服」である。次に「建築」では第2分類における「具体的建築」の項目の差がそのまま「建築」の割合の差となっている。さらに「自然」の項目では両誌の割合の差が一般誌17%、専門誌11%と比較的大きいことがわかる。この要因として第2分類の「海」の項目が一般誌からだけ抽出されたことが挙げられる。最後に第1分類における「状態」の割合による両誌の大きな差は見ら

れないが、第2分類では明確な差が見られる。一般誌では「行動」の項目が11%と「状態」の割合の大半を占めている。一方、専門誌では「状況」の項目が13%と大半を占めている。

第1分類	第2分類	一般誌	専門誌
生物	動物	3	2
	植物	3	2
箱		2	1
アート	絵画	1	2
	音楽	1	0
	写真	1	0
	その他	1	2
器		1	2
ファッション	衣服	4	1
	装飾品	0	1
雑貨	玩具	3	4
	家具	1	1
	その他	3	6
乗り物		1	1

第1分類	第2分類	一般誌	専門誌
建築	具体的	1	3
	抽象的	8	8
建築一部	縁側	1	3
	庭	3	2
街		2	3
自然	海	4	0
	水	2	2
	森	2	2
	山	2	1
	その他	1	3
雰囲気	別世界	3	2
	その他	0	5
状態	行動	7	1
	状況	3	9
計		64	69

表15 両誌における比喻表現の内容別集計結果(直喩)

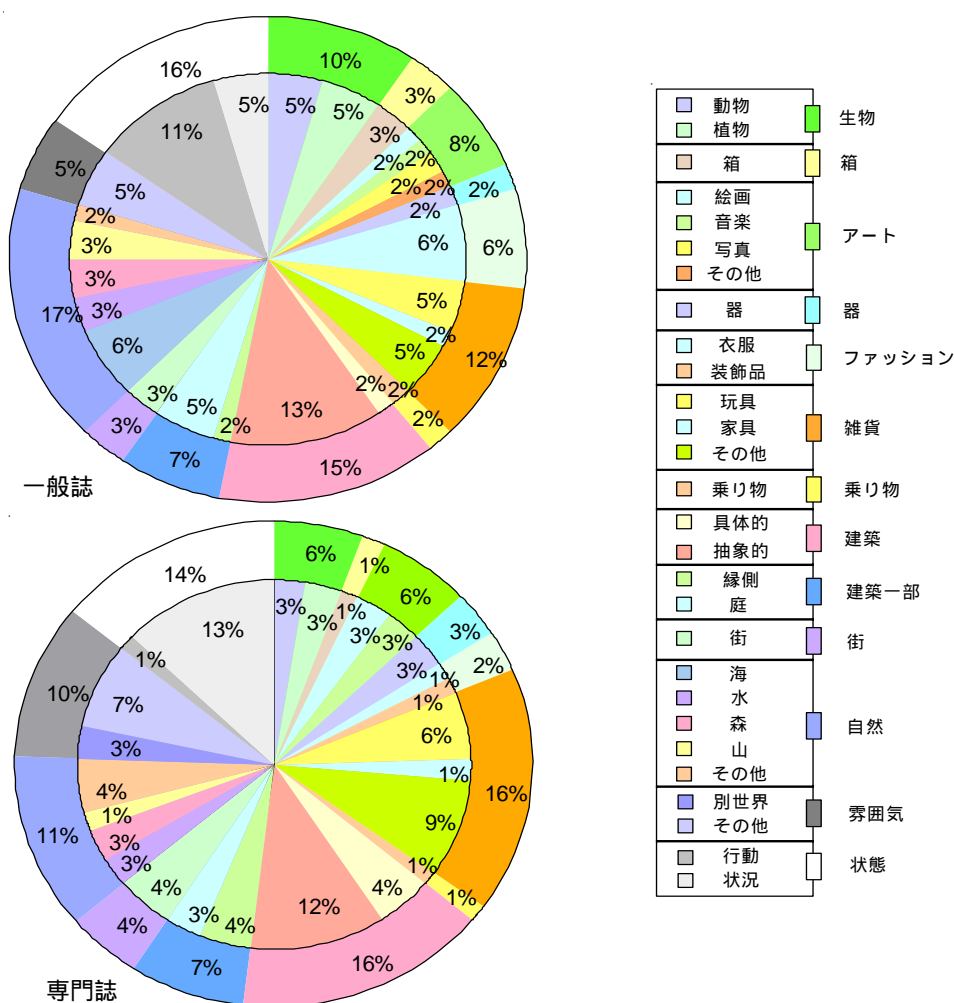


図1.1 両誌における比喻表現の内容の割合(直喩)

表 1 6 は隠喩における表現の集計結果を示したものである。また図 1 2 は表 1 6 をもとに両誌の割合を示したものである。これより差が見られる項目は「雑貨」「箱」「器」「建築」「空間」の 5 項目である。比較して一般誌の割合が大きい項目は「雑貨」「建築」「空間」の 3 項目である。反対に、専門誌の割合が大きい項目は「箱」「器」の 2 項目である。

	一般誌	専門誌
生物	1	1
雑貨	4	1
箱	1	2
器	0	3
乗り物	1	1
建築	8	3
空間	4	2
その他	5	6
計	24	19

表 1 6 両誌における比喩表現の内容別集計結果（隠喩）

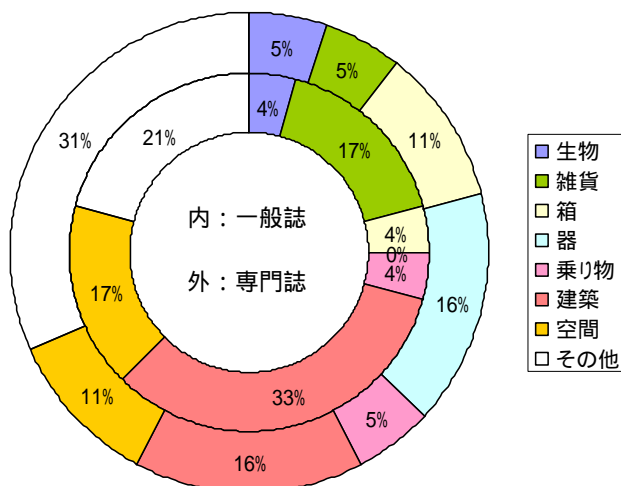


図 1 2 両誌における比喩表現の内容の割合（隠喩）

「対象」

表 1 7 は両誌における直喩の対象の集計結果を示したものである。また図 1 3 は表 1 7 をもとに両誌における直喩の対象の割合を示したものである。これより両誌を比較して差が見られた項目は「建築自体」「空間」「構造」の 3 項目である。「建築自体」では専門誌が 39%と一般誌の 27%と比較して 12%も高い。一方「構造」では一般誌が 23%であるのに対して専門誌が 13%と 10%の差、「空間」では一般誌が 23%に対し専門誌 25%と 3%の差が見られる。

	一般誌	専門誌
建築自体	17	27
空間	18	17
構造	15	9
素材	6	5
その他	8	11
計	64	69

表 1 7 両誌における比喩表現対象の集計結果（直喩）

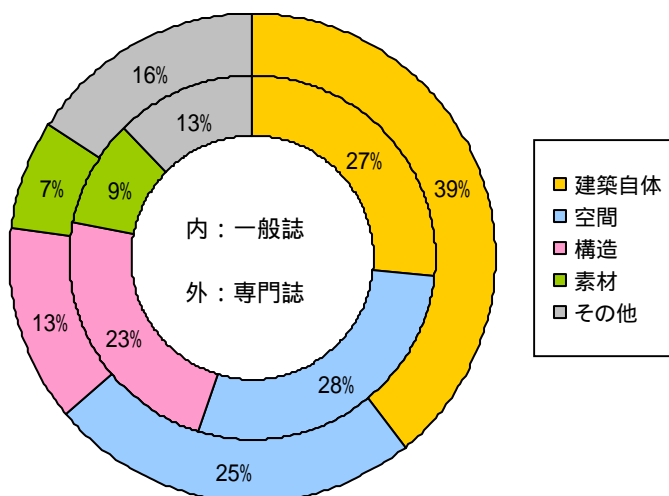


図 1 3 両誌における比喩表現対象の割合（直喩）

表18は両誌における隠喩の対象の集計結果を示したものである。また図14は表18をもとに両誌における隠喩の対象の割合を示したものである。これより両誌共に「建築自体」が半分以上を占めていることがわかる。また一般誌において特徴的な項目は「素材」である。専門誌では該当しなかった。一方、専門誌において特徴的な項目は「空間」と「構造」の2項目である。両項目とも一般誌よりも大幅に高い割合を示している。

	一般誌	専門誌
建築自体	16	11
空間	4	5
構造	0	1
素材	2	0
その他	2	2
計	24	19

表18 両誌における比喩表現対象の集計結果(直喩)

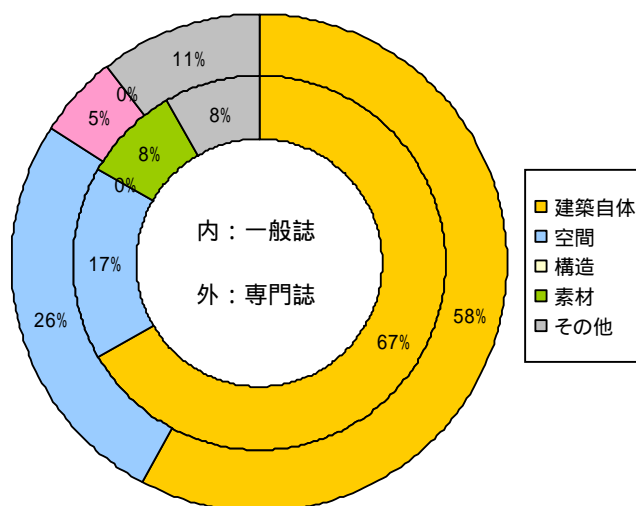


図14 両誌における比喩表現対象の割合(直喩)

() 考察

以上から比喩表現による両誌の特質として「特集」「具体と抽象」の2点が挙げられる。

「特集」

「内容」(直喩)の分析より一般誌における「ファッション」と「自然」の割合が専門誌と比べ大きいことを指摘した。またその要因が「ファッション」の場合は「衣服」の項目、「自然」の場合は「海」であるとも指摘した。これらは共に一般誌の特集テーマとなったものである。このことから衣食住を主要なテーマとしている一般誌の特徴や毎号組まれている特集が強く反映していると考えられる。またこれは建築だけを特集している専門誌にはほとんど見られない比喩表現であると言える。(例 特集:今年の夏は「建築と海」を見に行こう 比喩:波頭のような屋根、特集:ファッション 建築 比喩:ドレスのようなアクリルスクリーン)

「わかりやすさ」

「対象」の分析より一般誌では「空間」や「構造」の項目が専門誌と比べ比喩対象となりやすい傾向にある。このことから一般誌は比喩表現を用いることで言葉の具体性を高め、「空間」の抽象性、「構造」の専門性をその編集方針から「わかりやすく」していると考えられる(例:森のように明るい空間、スダレのような壁)。

3-4-2. 擬音語・擬態語

擬音語は、「がちゃがちゃ」のような音や「わんわん」のような動物の鳴き声などを言語化したものである。また擬態語は、笑うことを「にこにこ」と言うように、実際には音声を伴わない事象について、様子を文字として書き表したものである。これらを用いることで、ものごとを生き生きと表現する効果や、ものごとに対し読者が親近感を抱く効果など、さまざまな効果が生まれる。ここでは各雑誌の文章中に使用されている擬音語・擬態語に注目し、その使用頻度とその内容について分析・考察を行う。

() 調査方法

『擬音語・擬態語辞典』^{文16)}を参考にし、対象の記述中から擬音語・擬態語に該当する言葉を対象の作品説明文から抽出する。

抽出した擬音語・擬態語を集計し、図表化する。

作成された図表をもとに、擬音語・擬態語による両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

表19は擬音語・擬態語は一般誌からは61、専門誌からは30抽出することができた。またその種類は49種類(共通5種類、一般誌28種類、専門誌16種類)である。

これらの結果は表20に示す。表20の横軸は左から「文章中から抽出した擬音語・擬態語」「各雑誌での該当数」「種類」「使用パターン」の順となっている。「使用パターン」は『日本語解釈活用事典』^{文17)}にまとめられている「擬態語」がどのような場合に使われるかを参考にし

- a.動物の動作例)ピョンピョン跳ねる、ニコニコ集う
- b.動物の様態例)ガッチリ構える、ドッシリ座る
- c.人間の感覚例)ヒンヤリする、ピリッと辛い
- d.感情・心理状態例)ウキウキはずむ心、ムカムカする、
- e.事象の状況・変化.....例)キラキラ光る星、サラサラした砂

の5つの使用パターンに擬音語・擬態語を分類した。

発行年	建築名	一般誌	専門誌	
1	1999	水 / ガラス	0	0
2	2000	東京国立博物館法隆寺宝物館	0	1
3		ルイ・ヴィトン松屋銀座店	0	0
4		せんたいメディアテーク	2	1
5	2001	養老天命反転地	2	0
6		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	0	0
7		ミホ・ミュージアム	0	0
8		メゾン・エルメス	0	0
9		光の館	2	0
10		アンパンマンミュージアム	0	1
11		下馬の連続住居	1	0
12		ビューリッツァー美術館	2	0
13		シカゴ美術館・屏風ギャラリー	2	0
14		ユネスコ仮想空間	0	0
15		アルマーニ / テアトロ	0	0
16		FABRICA	0	0
17		ヴィトラ・セミナーハウス	2	0
18		ピカデリー・ガーデンズ	0	0
19	2002	淡路舞舞台	0	0
20		南岳山 光明寺	0	1
21		木の殿堂	0	1
22		国際子ども図書館	0	1
23		直島コッポラリーアートミュージアム	2	0
24		近つ飛鳥博物館	2	0
25		大阪府立狭山池博物館	0	0
26		兵庫県立美術館	0	0
27		サーベントイン・ギャラリー	0	0
28		釜北町民ホール	0	0
29		コム・デ・ギャルソン京都店	1	0
30		三養軒	2	0
31		オフィス21	0	0
32		フォートワース現代美術館	0	0
33		護王神社	0	0
34		PAM	0	0
35		まつだい雪国農耕文化村センター	0	0
36		ルイ・ヴィトン高知店	0	3
37	2003	朱鷺メッセ	0	0
38		デル・ソル・ボニエンテ	0	0
39		国民宿舎足摺テルメ	0	0
40		なにわの海の時空館	1	0
41		海の博物館	0	0
42		松島ヨットハーバー・公園事務所	1	0
43		野間自由幼稚園	0	0
44		建外SOHO	0	0
45		北向傾斜住宅	0	1
46		プライベート・ギャラリー	0	0
47		SHS	0	0
48		屋根の家	1	2
49		L	0	1
50		S-tube	0	0
51		MUJI+INFILLリノベーション	1	1
52		二軒家アパートメント	0	0
53		N3ユニテ	0	0
54	2004	Kashima Surf Villa	0	1
55		スペースブロック ハノイモデル	1	0
56		まつもと市民芸術館	1	2
57		興社の茶屋	0	0
58		ECORIUM	0	0
59		地中美術館	1	0
60		ランゲン美術館	0	1
61		サイトウ・キネン・フェスティバル舞台美術	0	0
62		東雲キャナルコートCODAN	0	0
63		二期倶楽部東館	2	1
64		ホテル・イル・バラツォ	1	0
65		秋吉台国際芸術村	2	0
66		G	0	0
67		種層の家	2	0
68		クリスタル・ブルック	0	0
69		上原の家	1	0
70		トラス下の矩形	2	0
71		九段の家	0	0
72		展望台の家	1	0
73		襲の家	1	0
74		HP	4	0
75		The House of F.F	0	1
76		Vague	0	2
77		ESH	1	0
78		barres	0	0
79		勝浦の別荘	1	1
80		黒犬荘	0	1
81	2005	森を捕まえる家	2	0
82		カーザ・リベラ	0	1
83		ブラダブティック青山	0	2
84		TOD'S表参道ビル	0	0
85		Dior	0	0
86		Dior表参道	0	0
87		金沢21世紀美術館	2	0
88		スペイン館	2	0
89		三井・東芝館	1	0
90		トヨタグループ館	0	0
91		富弘美術館	7	3
92		豊田市美術館	0	0
93		竹中工務店東京本店ビル	1	0
94		モエレ沼公園	0	0
95		札幌ドーム	0	0
96		House YK / ILANDS	1	0
		計	61	30

表 1 9 両誌の擬音語・擬態語の作品別集計結果

表 2 0 両誌の擬音語・擬態語とその使用パターン一覧

	一般誌	専門誌	種類	パターン
ゆっくり	5	2	態	動物の様態
ゆったり	3	5	態	動物の様態
のんびり	3	1	態・情	動物の様態
ひっそり	2	1	態	動物の様態
ギリギリ	1	1	態・音	建築や物体の様相
ぴったり	6	0	態	建築や物体の様相
じっくり	4	0	態	動物の様態
しっかり	3	0	態	動物の様態
ちょっと	3	0	態	動物の動作
どンドン	2	0	態・音	建築や物体の様相
ぐるり	2	0	態	動物の動作
ぐるぐる	2	0	態	建築や物体の様相
ぽっかり	2	0	態	建築や物体の様相
ちゃんと	2	0	態	動物の様態
たっぷり	2	0	態	人間の感覚
すっきり	2	0	態・情	人間の感覚
そろそろ	1	0	態	感情・心理状態
ばんばん	1	0	態・音	建築や物体の様相
うっかり	1	0	態・情	人間の感覚
ひんやり	1	0	態	人間の感覚
わくわく	1	0	態・情	感情・心理状態
ふっと	1	0	態	人間の感覚
こんもり	1	0	態	建築や物体の様相
ぼおっ	1	0	態・音	建築や物体の様相
さらり	1	0	態・音	建築や物体の様相
きっちり	1	0	態	動物の様態
ニッコリ	1	0	態	動物の動作
ふんわり	1	0	態	建築や物体の様相
すっかり	1	0	態	動物の様態
うっすら	1	0	態	建築や物体の様相
ぼこぼこ	1	0	態・音	建築や物体の様相
ぎっしり	1	0	態	建築や物体の様相
さっと	1	0	態	動物の動作
はっきり	0	3	態	動物の様態
バラバラ	0	2	態・音	建築や物体の様相
きちんと	0	2	態	建築や物体の様相
ぼろぼろ	0	1	態	建築や物体の様相
すっぼり	0	1	態	建築や物体の様相
がらり	0	1	態・音	建築や物体の様相
ぼんやり	0	1	態・情	建築や物体の様相
いそいそ	0	1	態・情	建築や物体の様相
ぶらぶら	0	1	態	動物の動作
がらん	0	1	態・音	建築や物体の様相
ずっしり	0	1	態	動物の様態
キリッ	0	1	態	人間の感覚
びっしり	0	1	態	建築や物体の様相
ひよりより	0	1	態	動物の様態
ずるずる	0	1	態・音	建築や物体の様相
しっくり	0	1	態	人間の感覚
計	61	30		

音：擬音語 態：擬態語 情：擬情語

()分析

ここでは「絶対量」「使用パターン」「内容」の4つの観点から両誌における擬音語・擬態語を分析する。

「絶対量」

表19より両誌における擬音語・擬態語の登場回数は一般誌61回、専門誌30回である。文章量を考慮すると4倍の頻度で一般誌の記述中に登場していることがわかる。また表20より擬音語・擬態語の種類が一般誌28種類、専門誌16種類という結果から一般誌は専門誌に比べ多種の擬音語・擬態語を使用している。そのため擬音語・擬態語を用いるのは一般誌の特徴とすることができる。

「使用パターン」

図15は表20をもとに()で設定した「使用パターン」の割合を雑誌別に示したものである。項目別に見ていくと、一般誌において専門誌よりも割合が大きい項目は「動物の動作」「人間の感覚」「感情・心理状態」の3項目である。哲学者ジョン・ロックの単純観念はこの観点のより深い考察に有効であると考え^{注1)}この観念を参考に建築や物体の様相を示す擬音語・擬態語(例 バラバラ、ずっしり)を一次性質、人間の感覚を示す擬音語・擬態語(例 ひんやり、ニッコリ)を二次性質と位置付ける。この視点で見ると一般誌では二次性質が65%と専門誌の57%よりも8%多い。

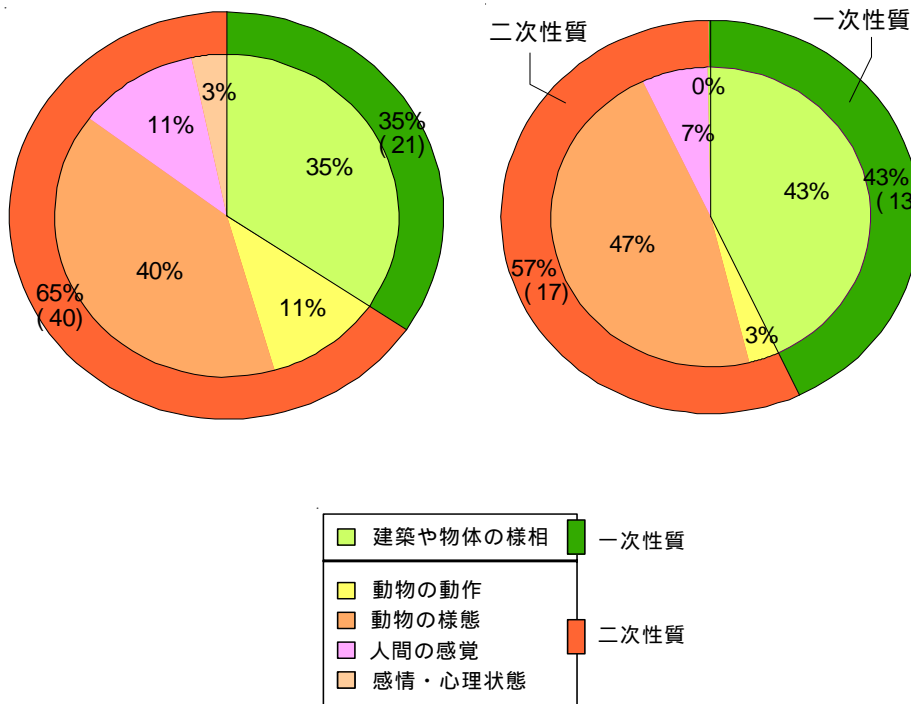


図10 両誌における比喻表現の種類の内訳

「内容」

ここでは各雑誌において頻出した擬音語・擬態語、また各雑誌だけで使用されている擬音語・擬態語に注目する。

表20より一般誌で使用頻度が最多であった擬音語・擬態語は「ぴったり」(6回)である。次いで「ゆっくり」(5回)「じっくり」(4回)が続く。一方、専門誌で使用頻度が最多であった擬音語・擬態語は「ゆったり」(5回)である。次いで「はっきり」(3回)である。

次に各雑誌だけで使用されている擬音語・擬態語に注目する。表より一般誌では28種類が該当した。このうち「ぴったり」(6回)「じっくり」(4回)「しっかり」(3回)「ちょっと」(3回)が特に使用頻度が高い。一方、専門誌では16種類が該当した。このうち「はっきり」(3回)「バラバラ」(2回)「きちんと」(2回)が特に使用頻度が高い。

() 考察

以上から擬音語・擬態語による両誌の特質として「わかりやすい表現」「一次性質と二次性質」「欲求の応答」の3点が挙げられる。

「わかりやすい表現」

「絶対数」の分析より一般誌における擬音語・擬態語の使用頻度は専門誌の4倍であることが見出せた。擬音語・擬態語の効果は生き生きとした文章表現が可能となることである。建築作品がどんな状態なのか、また訪問・体験することでどのような感覚・心理状態になるのか、が擬音語・擬態語を用いることで読者に伝わり易くなる。そのため一般誌が擬音語・擬態語を多用している理由としてその編集方針である「わかりやすい表現」^{文19)}に対応している表現方法であるからとだといえよう。

「一次性質と二次性質」

「使用パターン」の分析より一般誌では二次性質が専門誌と比較して多くの割合を占めていた。特に一般誌では人間の感情や感覚を表現する擬音語・擬態語を比較的多く使用している。一方、専門誌では一次性質の割合が一般誌よりも大きい。このことから、専門誌では建築(や物質)の様相を表現する擬音語・擬態語を比較的多く使用している。以上から擬音語・擬態語を用いることで一般誌は「人」の感情に則して情報を伝達しているのに対し、専門誌は「建築」の詳しい様相を読者に伝達するという両誌の意図が読み取れる。

「欲求への応答」

「内容」の分析より擬音語・擬態語の意味に各雑誌の意図が読み取れる。一般誌で最も多く使用されていた「ぴったり」からは読者の欲求への応答が連想可能である。また「ゆっくり」「じ

っくり」という言葉からは日常生活で多くの人びとが理想とする状況を連想させる。つまり時間のある状況である。これらの擬音語・擬態語を使用することで人々が日頃から求めているあこがれ・興味・理想を誌面上で実現していると考えられる。そのような状況を演出することで、一般誌は人びとを引き付けている可能性がある。

【注釈】

1) ロックによれば単純観念を生み出す根拠(原因)はもともと物体側にあるとされる。物体自体には固性・延長・運動などが備わっており、それを「一次性質」とし、他方、色・音・味などの単純観念は、あくまでも人間の感覚によって生み出される主観的な性質＝「二次性質」としている。^{文¹⁸)}

3-4-3. 体言止め

体言止めとは、「設計は有名な伊東豊雄。」のように末尾を名詞(代名詞)で終わる技法である。この技法は用いることで読者に文章の余韻を残すことが可能となる修辞技法である。ここでは体言止めの使用頻度から分析・考察を行う。

() 調査方法

説明文の文末に注目し体言止め表現の有無を判断し、集計する。

集計した結果を表化する。

表をもとに、体言止めによる両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

表2-1は両誌の体言止めの使用回数を作品別に集計した結果を示したものである。以下この表をもとに分析・考察を行う。

表2-1 両誌における体言止めの使用回数の集計結果

発行年	建築名	一般誌	専門誌	
1	1999	水ノガラス	0	0
2	2000	東京国立博物館法隆寺宝物館	2	0
3		ルイ・ヴィトン松屋銀座店	4	0
4		せんだいメディアテーク	4	2
5	2001	養老天命反転地	7	0
6		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	0	0
7		ミホ・ミュージアム	3	6
8		メゾン・エルメス	4	0
9		光の館	6	2
10		アンパンマンミュージアム	2	0
11		下馬の連続住居	4	0
12		ビューリッツァー美術館	3	2
13		シカゴ美術館・屏風ギャラリー	4	0
14		ユネスコ瞑想空間	6	0
15		アルマーニ/テアトロ	4	0
16		FABRICA	4	2
17		ヴィトラ・セミナーハウス	8	0
18		ピカデリー・ガーデンズ	2	0
19		淡路夢舞台	1	1
20	2002	南岳山 光明寺	2	1
21		木の殿堂	3	0
22		国際子ども図書館	1	0
23		直島コンポラリアートミュージアム	4	1
24		近つ飛鳥博物館	4	0
25		大阪府立狭山池博物館	3	0
26		兵庫県立美術館	1	0
27		サーベントイン・ギャラリー	4	1
28		荻北町民ホール	2	0
29		コム・デ・ギャルソン京都店	2	4
30		三養荘	4	0
31		オアシス21	3	0
32		フォートワース現代美術館	2	0
33		護国神社	5	2
34		PAW	3	0
35		まつだい雪国農耕文化村センター	3	0
36		ルイ・ヴィトン高知店	4	0
37	2003	朱鷺メッセ	3	0
38		デル・ソル・ポニエンテ	0	1
39		国民宿舎足摺デルメ	2	0
40		なにわの海の時空館	2	0
41		海の博物館	5	0
42		松島ヨットハーバー・公園事務所	3	0
43		野間自由幼稚園	3	1
44		建外SOHO	4	0
45		北向傾斜住宅	2	0
46		プライベート・ギャラリー	4	0
47		SHS	4	0
48		屋根の家	3	11
49		L	5	1
50		S-tube	0	0
51		MUJI+INFILLリノベーション	7	0
52		二軒家アパートメント	6	1
53		N3コニテ	3	0
54	2004	Kashima Surf Villa	8	0
55		スペースブロック ハノイモデル	4	1
56		まつもと市民芸術館	4	2
57		興社の茶屋	2	0
58		ECORIUM	5	0
59		地中美術館	1	0
60		ランゲン美術館	4	3
61		サイトウ・キネン・フェスティバル舞台美術	3	2
62		東雲キャナルコートCODAN	1	0
63		二期倶楽部東館	4	0
64		ホテル・イル・バラツォ	3	0
65		秋吉台国際芸術村	1	0
66		G	3	6
67		積層の家	3	4
68		クリスタル・ブルック	3	2
69		上原の家	2	0
70		トラス下の矩形	11	1
71		九段の家	15	0
72		展望台の家	3	0
73		裏の家	4	0
74		HP	6	0
75		The House of F.F	1	0
76		Vague	4	0
77		MESH	5	0
78		barres	3	2
79		勝浦の別荘	3	0
80		黒犬荘	2	0
81	2005	森を捕まえる家	2	5
82		カーザ・リベラ	5	0
83		ブラダブティック青山	3	4
84		TOD'S表参道ビル	0	0
85		Dior	2	0
86		Dior表参道	3	0
87		金沢21世紀美術館	4	0
88		スペイン館	8	2
89		三井・東芝館	2	0
90		トヨタグループ館	3	0
91		富弘美術館	3	0
92		豊田市美術館	7	0
93		竹中工務店東京本店ビル	14	0
94		モエレ沼公園	5	0
95		札幌ドーム	3	0
96		House YK / ILANDS	2	1
		計	348	74

() 分析

「絶対数」の観点から両誌における体言止めを分析する。

「絶対数」

表 2 1 より体言止めを一般誌では 348 回、専門誌では 74 回使用しており、文章量を考慮すると一般誌において体言止めは 9 倍以上の頻度で使用されている。従って一般誌における体言止めの使用はその特徴といえる。

() 考察

以上から体言止めによる両誌の特質として「印象性」が挙げられる。

「印象性と正確性」

「絶対数」の分析より一般誌における体言止めの使用頻度は専門誌と比較して非常に高い。体言止めの効果として文章の印象を強く読者に残すことが可能となる。従って一般誌は体言止めを積極的に活用することで「印象」に残る説明文作成を心掛けていると考えられる。一方、専門誌は文章量が一般誌の 2 倍であり、体言止めが少ないことから精確な情報を豊富な文章量で説明・記録する記述作成を心掛けていると考えられる。

3-5. 記述内容の特徴

説明文を構成する最も大きい単位は記述である。そのため記述に見られる特徴は両誌の特質が大きく表れていると考えられる。

以下、記述内容の特徴として「施主・利用者」「場面の変遷」について述べる。

3-5-1. 施主・利用者

作品説明文中に登場する人物の中で読者に最も近い存在は施主・利用者である。そのため読者は建築作品の構造やデザイン・使用されている素材に関する記述よりも実際にそれを建てた施主や実施に訪れその建築を体験する利用者に関する記述に惹かれる。ここでは施主・利用者に関する記述に注目し、その内容について分析・考察を行う。

() 調査方法

以下 6 項目に該当する記述を説明文から抽出する。

a. 施主のデータ

例) この家に住んでいるのはともに仕事を持つ夫婦。

b. 施主の要望

例) 「はなれ」のように、ある程度独立性のある客間がひとつほしいという要望もあった。

c. 施主の要望に対する建築家の提案

例) 室内には、人がとどまるきっかけとなるいくつかの「ISLAND / しま」を一行に並べました。

d. 建築家の希望

例) 単なる隙間にすぎないかもしれないが、とにかく生命力溢れる場所となってほしい。

e. 施主の利用状況・感想

例) 「螺旋階段を下りる時、いつもきれいだなあって眺めています」

f. 第三者による利用状況・感想

例) ベッドに横たわると、まるで森の上で寝ているような気分になれる。

また a、b、c、d の 4 項目を「竣工前」、e、f の 2 項目を「竣工後」とする。

抽出した記述を集計し、図表化する。

図表をもとに、施主・利用者の記述による両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

表 2 2 は() 調査方法で設定した項目別の絶対量とその集計結果を雑誌別に示したものである。また表中に表示されている() 内の数値は各説明文中において 5 文目以内に該当する記述の数を示している。

表 2 2 - 1 一般誌における施主・利用者に関する記述の集計結果

	発行年	建築名	建築家	用途	竣工	竣工前				竣工後		その他	計
						施主のデータ	施主の要望	建築家の提案	建築家の希望	施主の利用状況	第三者による利用状況		
1	1999	水ノガラス	隈研吾	別荘	1995	0	1	2	0	0	0	0	3
2	2000	東京国立博物館法隆寺宝物館	谷口吉生	美術館・博物館	1999	0	0	0	0	0	0	0	0
3		ルイ・ヴィトン松屋銀座店	青木淳	商業施設	2000	0	0	0	0	1	0	0	1
4	2001	せんだいメディアテーク	伊東豊雄	複合文化施設	2001	0	0	0	0	0	0	0	0
5		養老天命反転地	荒川修作	公園施設	1995	0	0	0	0	0	7 (1)	0	7
6		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1990	0	0	0	0	0	2	0	2
7		ミホ・ミュージアム	I・M・ペイ	美術館・博物館	1996	0	0	0	0	0	5 (4)	0	5
8		メゾン・エルメス	レンゾ・ピアノ	商業施設	2001	0	0	0	0	0	1 (1)	0	1
9		光の館	ジェームス・タレス	美術館・宿泊施設	2000	0	0	0	0	0	6	0	6
10		アンパンマンミュージアム	古谷誠章	美術館・博物館	1996	0	0	0	1 (1)	0	0	0	1
11	下馬の連続住居	北山恒	集合住宅	2002	0	2	1 (1)	0	0	0	0	3	
12	ビューリッツァー美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	0	0	0	0	4 (1)	3 (1)	0	7	
13	シカゴ美術館・屏風ギャラリー	安藤忠雄	展示空間	1992	0	0	0	0	0	10 (3)	0	11	
14	ユネスコ瞑想空間	安藤忠雄	公園施設	1995	0	0	0	0	0	5 (1)	0	5	
15	アルマーニ/テアトロ	安藤忠雄	劇場	2001	0	1	0	0	1	4 (2)	0	6	
16	FABRICA	安藤忠雄	教育施設	2000	1 (1)	0	0	0	0	3 (1)	0	4	
17	ヴィトラ・セミナーハウス	安藤忠雄	教育施設	1993	0	0	0	0	0	8	0	8	
18	ピカデリー・ガーデンズ	安藤忠雄	公園施設	2002	1	1 (1)	0	0	1	0	0	3	
19	淡路夢舞台	安藤忠雄	公園施設	1999	0	1	1 (1)	3 (1)	0	0	0	5	
20	南岳山 光明寺	安藤忠雄	宗教建築	2000	0	0	0	0	0	4	0	4	
21	木の殿堂	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	0	0	0	0	1	5	0	6	
22	国際子ども図書館	安藤忠雄	図書館	2002	0	1 (1)	2	1	1	0	0	5	
23	直島コンボラリーアートミュージアム	安藤忠雄	美術館・博物館	1992	0	0	0	0	0	16 (1)	0	11	
24	近つ飛鳥博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	0	0	0	0	0	3	0	3	
25	大阪府立狭山池博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	0	0	0	0	0	0	0	0	
26	兵庫県立美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	0	1 (1)	2 (1)	0	0	0	0	3	
27	サーベントイン・ギャラリー	伊東豊雄	パビリオン	2002	0	0	0	0	1	0	0	1	
28	琴北町民ホール	阿部仁史	劇場	2002	0	0	0	0	1	2 (1)	0	3	
29	コム・デ・ギャルソン京都店	川久保玲	商業施設	2002	1	1	1	0	2	0	0	5	
30	三養荘	村野藤吾	宿泊施設	1989	1	0	0	0	0	6	0	7	
31	オアシス21	大林組	バスターミナル	2002	0	0	0	0	0	1 (1)	0	1	
32	フォートワース現代美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2002	0	0	0	0	0	2	0	2	
33	護王神社	杉本博司	宗教建築	2002	0	0	0	0	0	2 (1)	0	2	
34	PAM	坂茂	研究所	2002	0	0	0	0	0	3 (1)	0	3	
35	まつだい雪国農耕文化村センター	MVRDV	複合文化施設	2003	0	0	0	0	1	1 (1)	0	2	
36	ルイ・ヴィトン高知店	乾久美子	商業施設	2003	0	0	0	0	0	0	0	0	
37	朱鷺メッセ	横文彦	複合施設	2003	0	0	0	0	1	2	0	3	
38	デル・ソル・ボニエンテ	隈研吾	飲食施設	2001	1 (1)	0	0	0	0	1	0	2	
39	国民宿舎足摺デルメ	團紀彦	宿泊施設	1998	0	0	0	0	0	1 (1)	0	1	
40	なにわの海の時空館	ポール・アンドルー	美術館・博物館	2000	0	0	0	0	0	2 (1)	0	2	
41	海の博物館	内藤廣	美術館・博物館	1992	0	0	0	0	0	4 (1)	0	4	
42	松島ヨットハーバー・公園事務所	阿部仁史	公園施設	2000	0	0	0	0	0	1 (1)	0	1	
43	野間自由幼稚園	安藤忠雄	教育施設	2004	0	0	0	0	3 (1)	1	0	4	

表22-1 一般誌における施主・利用者に関する記述の集計結果

	発行年	建築名	建築家	用途	竣工	竣工前				竣工後		その他	計
						施主のデータ	施主の要望	建築家の提案	建築家の希望	施主の利用状況	第三者による利用状況		
44		建外SOHO	山本理顕	集合住宅	2004	0	0	0	0	0	0	0	0
45		北向傾斜住宅	三分一博志	個人住宅	2003	0	0	0	0	0	2	0	2
46		プライベート・ギャラリー	塚塚隆生	個人住宅	2002	5 (3)	2	2	0	0	0	0	9
47		SHS	眞田大輔	個人住宅	2003	1	0	0	0	0	0	0	1
48		屋根の家	手塚貴晴+由比ノ池田昌弘	個人住宅	2001	0	1 (1)	3 (2)	0	0	0	1	5
49		L	青木淳	個人住宅	1999	1	2	3 (2)	0	1	1	0	8
50		S-tube	納谷新	個人住宅	1999	0	0	0	0	0	0	0	0
51		MUJI+INFILLリノベーション	吉岡徳仁	個人住宅	2004	0	1 (1)	1 (1)	0	0	1	0	3
52		二軒家アパートメント	木下道郎	集合住宅	2003	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0	1	2	0	6
53		N3ユニテ	横河健	集合住宅	2003	0	2 (2)	1	0	4 (1)	0	0	7
54		Kashima Surf Villa	千葉学	別荘	2003	3	2	3	0	1	1	0	11
55		スペースブック ハノイモデル	小嶋一浩+曲淵英邦	集合住宅	2003	0	1 (1)	1	0	0	0	0	2
56		まつもと市民芸術館	伊東豊雄	劇場	2004	0	0	0	0	2	1 (1)	0	3
57		奥社の茶屋	隈研吾	商業施設	2003	0	0	0	0	0	0	0	0
58		ECORIUM	谷口吉生	ゴミ処理場	2004	0	0	0	0	0	2 (1)	0	2
59		地中美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	0	0	0	0	0	3 (2)	0	3
60		ランゲン美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	0	0	0	0	2	1	0	3
61		グライツェル美術館	安藤忠雄	劇場	2004	0	2	2 (1)	1 (1)	1	0	0	6
62		東雲キャナルコートCODAN	設計者多数	集合住宅	2003	0	0	0	0	0	2 (1)	0	2
63		二期倶楽部東館	コンラン&パートナーズ+山本圭介	宿泊施設	2003	0	0	0	0	0	3 (2)	0	3
64		ホテル・イル・バラッツォ	アルド・ロッシ	宿泊施設	1989	0	0	0	0	0	2	0	2
65		秋吉台国際芸術村	磯崎新	複合施設	1998	0	0	0	0	0	3 (1)	0	3
66		G	青木淳	個人住宅	2004	1 (1)	2 (1)	3	0	0	2	2 (2)	11
67		積層の家	大谷弘明	個人住宅	2003	0	0	4	0	0	1	0	5
68		クリスタル・ブルック	山下保博	個人住宅	2004	0	1	1	0	0	3 (1)	0	5
69		上原の家	みかんぐみ	個人住宅	2003	2 (2)	0	1	0	3	6	0	11
70		トラス下の矩形	五十嵐淳	個人住宅	2004	0	2	2	0	1	5	0	11
71		九段の家	阪根宏彦	個人住宅	2003	2 (1)	5 (1)	1	1	3	4	0	11
72		展望台の家	手塚貴晴+由比ノ池田昌弘	個人住宅	2004	0	1	1	0	0	5 (1)	0	7
73		襲の家	早草睦恵	個人住宅	2004	2 (2)	3 (1)	2	0	0	5	4	11
74		HP	米田明ノ池田昌弘	個人住宅	2004	0	0	0	0	2	3 (1)	0	5
75		The House of F.F	丸山洋志	個人住宅	2004	2 (1)	1 (1)	1	0	0	3	0	7
76		Vague	北山恒	集合住宅	2004	0	0	0	1	0	3 (1)	0	4
77		MESH	千葉学	集合住宅	2005	0	0	0	1	0	0	0	1
78		barres	木下道郎	集合住宅	2004	0	0	0	0	1	1	0	2
79		勝浦の別荘	千葉学	別荘	2003	1	0	3	0	2	2	0	8
80		黒犬荘	塚本由晴	別荘	2004	2	0	1 (1)	0	0	0	1	4
81		森を捕まえる家	手塚貴晴+由比ノ池田昌弘	別荘	2004	1	0	2	0	0	2	0	5
82		カーザ・リベラ	西森陸雄	別荘	2003	1	1	4 (1)	0	1	0	0	7
83		ブラダブティック青山	Herzog & de Meuron	商業施設	2003	0	0	0	0	0	1	0	1
84		TOD'S表参道ビル	伊東豊雄	商業施設	2004	0	0	0	0	0	3 (1)	0	3
85		Dior	乾久美子	商業施設	2004	0	0	0	0	0	0	0	0
86		Dior表参道	SANNA	商業施設	2003	0	0	0	0	0	7 (2)	0	7
87		金沢21世紀美術館	妹島和世+西沢立衛/SANNA	美術館・博物館	2004	0	1	2	0	11	4	0	11
88		スペイン館	アレハンドロ・ザエラ=ポロ	パビリオン	2005	0	1	1	0	9	2 (1)	0	11
89		三井・東芝館	大江匡	パビリオン	2005	0	1 (1)	1 (1)	0	1	0	0	3
90		トヨタグループ館	みかんぐみ	パビリオン	2005	0	1 (1)	0	0	0	1	0	2
91		富弘美術館	ヨコミツマコト	美術館・博物館	2005	0	0	0	0	0	5	0	5
92		豊田市美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1995	0	0	0	0	0	2	0	2
93		竹中工務店東京本店ビル	菅原二	オフィス	2004	1 (1)	1	1	0	0	2 (2)	0	5
94		モエレ沼公園	隈研吾	公園施設	2005	0	0	0	0	1	0	0	1
95		札幌ドーム	原広司	競技施設	2001	1 (1)	0	1	0	0	0	0	2
96		House YK / ILANDS	赤松佳珠子	個人住宅	2003	1 (1)	0	2 (1)	0	0	2	0	5
					計	33	44	60	9	65	208	9	42

表 2 2 - 2 専門誌における施主・利用者に関する記述の集計結果

	発行年	建築名	建築家	用途	竣工	竣工前				竣工後		その他	計
						施主のデータ	施主の要望	建築家の提案	建築家の希望	施主の利用状況	第三者による利用状況		
1	1999	水ノガラス	隈研吾	別荘	1995	0	0	0	0	0	0	0	0
2	2000	東京国立博物館法隆寺宝物館	谷口吉生	美術館・博物館	1999	0	1	2	0	0	0	0	3
3		ルイ・ヴィトン松屋銀座店	青木淳	商業施設	2000	0	0	0	0	0	0	0	0
4		せんだいメディアテーク	伊東豊雄	複合文化施設	2001	0	1 (1)	1	2	0	0	0	4
5		養老天命反転地	荒川修作	公園施設	1995	0	0	0	4 (1)	0	0	0	4
6		丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1990	0	1	1	0	0	0	0	2
7		ミホ・ミュージアム	I・M・ペイ	美術館・博物館	1996	0	0	0	2	0	0	0	2
8		メゾン・エルメス	レンゾ・ピアノ	商業施設	2001	0	4 (3)	1	0	0	0	0	5
9		光の館	ジェームス・タレス	美術館・宿泊施設	2000	0	1 (1)	1 (1)	0	0	0	1	3
10		アンパンマンミュージアム	古谷誠章	美術館・博物館	1996	0	1	3	1	0	0	0	5
11		下馬の連続住居	北山恒	集合住宅	2002	0	0	0	0	0	0	0	0
12		ビュリツター美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	2	1	1	0	0	0	0	4
13		シカゴ美術館・屏風ギャラリー	安藤忠雄	展示空間	1992	0	0	0	1	0	0	0	1
14		ユネスコ瞑想空間	安藤忠雄	公園施設	1995	0	1 (1)	1	1	0	0	1	4
15		アルマーニ/テアトロ	安藤忠雄	劇場	2001	0	1 (1)	1 (1)	1	0	0	0	3
16		FABRICA	安藤忠雄	教育施設	2000	2	1 (1)	1	0	0	0	0	4
17		ヴィトラ・セミナーハウス	安藤忠雄	教育施設	1993	2 (2)	1	1	0	0	0	0	4
18		ピカデリー・ガーデンズ	安藤忠雄	公園施設	2002	0	1 (1)	1	0	0	0	0	2
19		淡路夢舞台	安藤忠雄	公園施設	1999	0	2	1 (1)	1	0	0	0	4
20		南岳山 光明寺	安藤忠雄	宗教建築	2000	0	1 (1)	1	1	0	0	0	3
21		木の殿堂	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	0	1 (1)	1	3	0	0	0	5
22		国際子ども図書館	安藤忠雄	図書館	2002	1 (1)	3 (1)	2	1	0	0	0	7
23		直島コンボラリーアートミュージアム	安藤忠雄	美術館・博物館	1992	0	0	0	0	0	0	0	0
24		近つ飛鳥博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	1994	0	1 (1)	2 (1)	5	0	0	0	8
25		大阪府立狭山池博物館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	0	1 (1)	1	1	0	0	0	3
26		兵庫県立美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2001	0	0	0	0	0	0	0	0
27		サーベントイン・ギャラリー	伊東豊雄	ハビリオン	2002	0	1 (1)	1	0	0	0	0	2
28		琴北町民ホール	阿部仁史	劇場	2002	0	1	1	0	0	0	0	2
29		コム・デ・ギャルソン京都店	川久保玲	商業施設	2002	1 (1)	1 (1)	1	1	0	0	0	4
30		三養荘	村野藤吾	宿泊施設	1989	0	0	0	0	0	0	0	0
31		オアシス21	大林組	バスターミナル	2002	0	1 (1)	1 (1)	1	0	0	0	3
32		フォートワース現代美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2002	0	0	0	0	0	0	0	0
33		護王神社	杉本博司	宗教建築	2002	0	1 (1)	1 (1)	1	0	0	0	3
34		PAM	坂茂	研究所	2002	1 (1)	0	0	0	0	0	0	1
35		まつだい雪国農耕文化村センター	MVRDV	複合文化施設	2003	0	0	0	0	0	0	0	0
36		ルイ・ヴィトン高知店	乾久美彦	商業施設	2003	0	0	0	0	0	0	0	0
37		朱鷺メッセ	権文彦	複合施設	2003	0	0	0	1	0	0	0	1
38		デル・ソル・ボニエンテ	隈研吾	飲食施設	2001	0	0	0	0	0	0	0	0
39		国民宿舎足摺デルメ	團紀彦	宿泊施設	1998	0	1 (1)	0	0	0	0	0	1
40		なにわの海の時空館	ポール・アンドルー	美術館・博物館	2000	0	0	0	1	0	2	0	3
41		海の博物館	内藤廣	美術館・博物館	1992	0	0	0	0	0	0	0	0
42		松島ヨットハーバー・公園事務所	阿部仁史	公園施設	2000	0	0	0	0	0	0	0	0
43		野間自由幼稚園	安藤忠雄	教育施設	2004	0	1 (1)	1 (1)	0	0	0	0	2

表 2 2 - 2 専門誌における施主・利用者に関する記述の集計結果

	発行年	建築名	建築家	用途	竣工	竣工前				竣工後		その他	計
						施主のデータ	施主の要望	建築家の提案	建築家の希望	施主の利用状況	第三者による利用状況		
44	2004	建外SOHO	山本理顕	集合住宅	2004	1	0	0	0	0	0	0	1
45		北向傾斜住宅	三分一博志	個人住宅	2003	1 (1)	1 (1)	1	0	0	0	0	3
46		プライベート・ギャラリー	塩塚隆生	個人住宅	2002	0	2 (1)	3 (1)	0	0	0	0	5
47		SHS	眞田大輔	個人住宅	2003	1 (1)	1 (1)	1	0	0	0	0	3
48		屋根の家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	個人住宅	2001	2 (2)	3 (1)	2	1	10	5	0	23
49		L	青木淳	個人住宅	1999	1 (1)	1 (1)	3 (1)	0	0	0	0	5
50		S-tube	納谷新	個人住宅	1999	1 (1)	1 (1)	3 (1)	0	0	0	0	5
51		MUJI+INFILLリノベーション	吉岡徳仁	個人住宅	2004	1	1 (1)	3	1	0	0	0	6
52		二軒家アパートメント	木下道郎	集合住宅	2003	0	0	1	1	0	0	0	2
53		N3ユニテ	横河健	集合住宅	2003	0	1	1	0	0	0	0	2
54		Kashima Surf Villa	千葉学	別荘	2003	2	2 (1)	1	1	0	0	0	6
55		スペースブロック ハノイモデル	小嶋一浩 + 曲淵英邦	集合住宅	2003	0	3	2	1	0	0	0	6
56		まつもと市民芸術館	伊東豊雄	劇場	2004	1	1	2	1	3	0	0	8
57		興社の茶屋	隈研吾	商業施設	2003	1	0	0	0	0	0	0	1
58		EGORIUM	谷口吉生	ゴミ処理場	2004	0	1 (1)	1	3	0	0	0	5
59		地中美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	1	1 (1)	1	0	0	0	0	3
60		ランゲン美術館	安藤忠雄	美術館・博物館	2004	4	3	4	2	0	0	1	14
61		アート・スペース・エッセイ・ホール	安藤忠雄	劇場	2004	0	2 (2)	1 (1)	1	1	0	0	5
62		東雲キャナルコートCODAN	設計者多数	集合住宅	2003	0	1	3	1	0	0	0	5
63		二期倶楽部東館	コンラン&パートナーズ + 山本圭介	宿泊施設	2003	0	1 (1)	1 (1)	2	0	0	0	4
64		ホテル・イル・バラツォ	アルド・ロッシ	宿泊施設	1989	0	0	0	0	0	0	0	0
65		秋吉国際芸術村	磯崎新	複合施設	1998	0	0	0	0	0	0	0	0
66		G	青木淳	個人住宅	2004	0	0	0	0	0	0	0	0
67		積層の家	大谷弘明	個人住宅	2003	0	0	1 (1)	0	0	1	0	2
68		クリスタル・ブルック	山下保博	個人住宅	2004	0	3 (3)	1	0	0	0	0	4
69		上原の家	みかんぐみ	個人住宅	2003	1 (1)	0	1 (1)	1	1	0	0	4
70		トラス下の矩形	五十嵐淳	個人住宅	2004	1 (1)	1 (1)	3 (1)	1	0	0	0	6
71		九段の家	阪根宏彦	個人住宅	2003	0	0	0	0	0	0	0	0
72	展望台の家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	個人住宅	2004	0	0	0	0	0	0	0	0	
73	襲の家	早草睦恵	個人住宅	2004	1 (1)	0	0	0	0	0	0	1	
74	HP	米田明 / 池田昌弘	個人住宅	2004	0	0	0	0	0	0	0	0	
75	The House of F.F	丸山洋志	個人住宅	2004	4 (1)	2 (1)	1	0	0	0	0	7	
76	Vague	北山恒	集合住宅	2004	0	0	0	2	0	0	0	2	
77	MESH	千葉学	集合住宅	2005	0	0	0	0	0	0	0	0	
78	barres	木下道郎	集合住宅	2004	0	0	0	0	3	0	0	3	
79	勝浦の別荘	千葉学	別荘	2003	1	0	1	0	0	0	0	2	
80	黒犬荘	塚本由晴	別荘	2004	1 (1)	1	1	0	0	0	3 (1)	6	
81	森を捕まえる家	手塚貴晴 + 由比 / 池田昌弘	別荘	2004	2 (2)	0	2	0	0	0	0	4	
82	カーザ・リベラ	西森隆雄	別荘	2003	0	2	3	1	0	0	0	6	
83	ブラダブティック青山	Herzog & de Meuron	商業施設	2003	0	0	0	2	0	0	0	2	
84	TOD'S表参道ビル	伊東豊雄	商業施設	2004	1 (1)	0	1 (1)	0	0	0	0	2	
85	Dior	乾久美子	商業施設	2004	0	0	0	0	0	0	0	0	
86	Dior表参道	SANNA	商業施設	2003	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0	0	0	0	3	
87	金沢21世紀美術館	妹島和世 + 西沢立衛 / SANNA	美術館・博物館	2004	0	1 (1)	1 (1)	0	0	0	0	2	
88	スペイン館	アレハンドロ・ザエラ = ポロ	パビリオン	2005	0	0	0	0	0	0	0	0	
89	三井・東芝館	大江匡	パビリオン	2005	0	0	1 (1)	1	0	0	0	2	
90	トヨタグループ館	みかんぐみ	パビリオン	2005	0	2 (2)	2 (1)	0	0	0	0	4	
91	富弘美術館	ヨコソマコト	美術館・博物館	2005	0	0	2	1	0	2 (2)	0	5	
92	豊田市美術館	谷口吉生	美術館・博物館	1995	0	0	0	1	0	0	0	1	
93	竹中工務店東京本店ビル	菅順二	オフィス	2004	0	0	0	0	0	0	0	0	
94	モエレ沼公園	イサム・ノグチ + アーキテクトファ イブ	公園施設	2005	0	1 (1)	1	0	0	0	0	2	
95	札幌ドーム	原広司	競技施設	2001	1	2 (2)	1 (1)	0	0	0	0	4	
96	House YK / ILANDS	赤松佳珠子	個人住宅	2003	1 (1)	0	1 (1)	1	0	0	0	3	
計						41	73	88	55	18	10	6	29

()分析

ここでは「絶対量」「割合」「順序」の3つの観点から両誌における施主・利用者の記述を分析する。

「絶対量」

表2-3は表2-2より両誌における項目別の集計値だけを載せたものである。これより施主・利用者に関する記述は一般誌で428文、専門誌で291文である。文章量を考慮すると一般誌では専門誌の4倍の頻度で施主・利用者に関する記述が扱われていることがわかる。従って施主・利用者に関する記述は一般誌の特徴といえることができる。

		一般誌	専門誌
竣工前	施主のデータ	33	41
	施主の要望	44	73
	建築家の提案	60	88
	建築家の希望	9	55
竣工後	施主の利用状況	65	18
	第三者による利用状況	208	10
その他		9	6
計		428	291

表2-3 施主・利用者に関する記述の項目別集計結果

「割合」

図1-6は表2-3をもとに両誌における施主・利用者の記述内容の割合を示したものである。図より両誌に大きな差異が見られることがわかる。一般誌では「竣工後」の割合が64%と施主・利用者の記述の多くを占めている。その要因として「第三者による利用状況」が49%を占めていることが挙げられる。また「施主の利用状況」の項目も15%と専門誌の6%よりも高い結果を示した。一方、専門誌では「竣工前」の割合が89%と施主・利用者の記述の大半を占めている。その要因として「施主のデータ」「施主の要望」「建築家の提案」の3項目の割合がそれぞれ一般誌の割合を上回っていることが挙げられる。

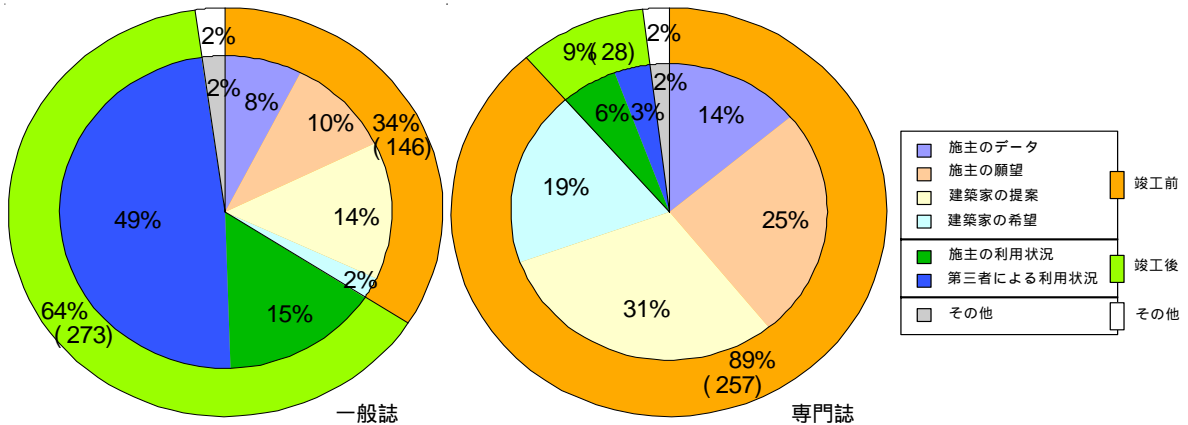


図1-6 両誌における施主・利用者に関する記述の項目別割合

「順序」

表2-4は両誌における表2-2中の5文目以内(以下、文頭)に該当する施主・利用者の記述を項目別に集計したものである。これより文頭に書かれる施主・利用者に関する記述は一般誌から94文、専門誌から92文が抽出された。項目別に見ると一般誌では「第三者の利用状況」が42文と最多であった。一方、専門誌では「施主の要望」が45文で最多であった。さらに施主・利用者に関する記述の全文における文頭に書かれる施主・利用者に関する記述の割合はそれぞれ一般誌22%、専門誌32%であった。

		一般誌	専門誌
竣工前	施主のデータ	15	21
	施主の要望	15	45
	建築家の提案	14	22
	建築家の希望	3	1
竣工後	施主の利用状況	3	0
	第三者の利用状況	42	2
	その他	2	1
計		94	92
割合(該当文量/全文量)		22% (94/428)	32% (92/291)

表2-4 両誌における文頭に書かれた施主・利用者に関する記述の集計結果

() 考察

以上から施主・利用者の記述による両誌の特質として「時間範囲」「想定と現実」「視点」「規則性」の3点が挙げられる。

「時間範囲」

「割合」の分析より一般誌では「竣工後」、専門誌では「竣工前」の割合がそれぞれ高いという大きな差異が見出せた。この要因のひとつとして両誌が扱っている「時間範囲」の差がある。専門誌が計画段階から施工、そして竣工までの期間であるのに対し、一般誌はそれに加え竣工後の期間が加わる。即ち、一般誌のほうが扱う時間範囲が広い。分析から判断できるように一般誌はこの差異を積極的に扱い「竣工後」の利用状況に関する記述を中心に据えている。

「想定と現実」

「割合」の分析より専門誌において「施主の提案」「建築家の希望」に関する記述の割合は多いが、実際の利用状況に関する記述は少ない。即ち、専門誌では竣工までの施主と建築家の関係により施主・利用者の記述のほとんどが構成されている。そのため実際の利用状況に関しては建築家の想定域を超えていない内容となっている。一方、一般誌の場合は専門誌にはほとんど無い利用状況に関する記述が主となっている。これは一般誌における「第三者による利用状況」の第三者が一般誌の記者のことであり、記者が実際に竣工後の建築作品を訪れて得た情報をもとに

施主・利用者の記述が構成されているためである。またこれに伴い一般誌では利用することで発見可能な建築作品の魅力について「ワクワクする」「楽しい」「リュクス(豪華)」「素敵である」などの多彩な表現を用いている傾向がある。その結果、建築家には以下のような影響を与えていると考える。建築家にとって実際の利用状況は非常に重要な情報である。建築家が想定した空間で実際は「どのように使用しているのか」「どのような感想を持っているのか」などの情報は専門誌にはほとんど無い。そのため建築家にとって一般誌から得られる上記の情報は設計を行う上で大きな刺激となりより人間と建築の関係が発展する要素のひとつと十分になると考えられる。

「規則性」

「順序」の分析より一般誌と比較して専門誌の施主・利用者に関する記述は文頭に書かれる割合が高いことがわかった。またその内容も「施主の要望」が最も多く、続いて「施主のデータ」「建築家の提案」であった。これらは建築を設計する上で根源となる項目である。そのため専門誌では建築の製作過程に沿って説明文が構成されるという規則性が存在すると考えられる。

3-5-2. 場面の変遷

記述内容の順序は読者への建築作品の印象に少なからず影響を与える。特に外部に関する記述から内部に関する記述へと移り変わるような場面から場面への変化は雑誌の特徴が如実に表れていると考えられる。ここでは記述単位で変化する場面に着目し、そこから各雑誌の特徴を分析・考察する。

() 調査方法

図17のように説明文中の場面の条件を設定した。

- a. 敷地外 例) 市の人口は20万人である
- b. 敷地 - 敷地外 例) 敷地からは山並を望む
- c. 敷地 例) 敷地内に
- d. 内部 - 敷地 例) 窓から庭が見通せる
- e. 内部 例) インテリアは木を基調とした

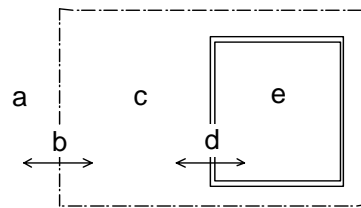


図17 場面設定条件図

図17の条件をもとに記述内容を場面別に分類する。^{注1)}

分類した結果を図18に従い図化する。

またその集計結果を表にする。

縦軸：記述中の場面（上：敷地外（a） 下：内部（e））

横軸：0% 100%（記述序盤 記述終盤）

例) 敷地外の場面から変化しないパターン

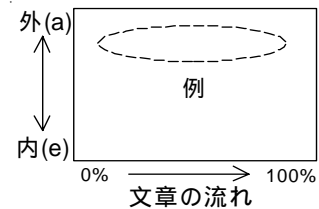
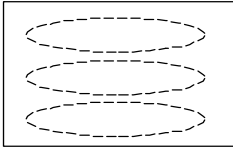
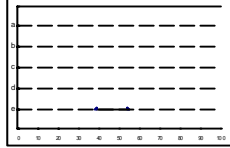
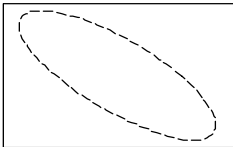
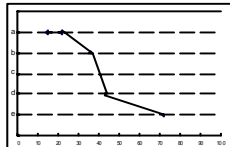
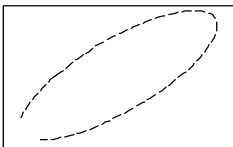
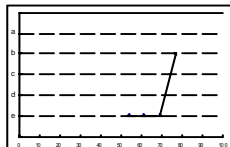
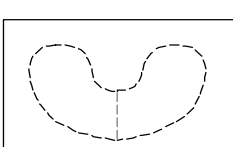
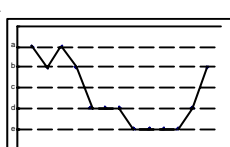
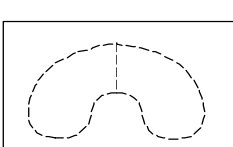
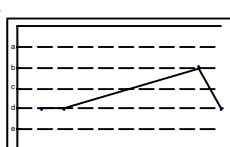
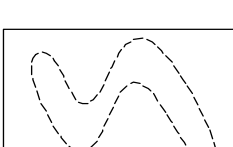
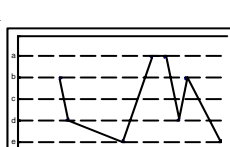
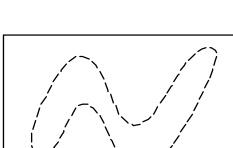
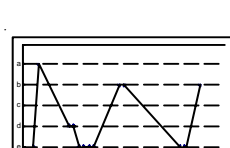


図18 場面の变遷図

作成した図表をもとに、場面の变遷による両誌の特質を分析・考察する。

() 結果

研究対象における場面の変遷は図で示すように から までの 7 パターンに分類することができた。両誌における作品別の場面の变遷パターン図は付録に載せる。また各々のパターンの特徴と例を以下に示す。

	パターン図	例
: ひとつの場面から変化しない。		
: 外部から内部へと場面が変化する。		
: 内部から外部へと場面が変化する。		
: 外部から内部を経由して再び外部へと場面が変化する。		
: 内部から外部を経由して再び内部へと場面が変化する。		
: 外部から始まり内部と外部との場面変化を繰り返す。		
: 内部から始まり外部と内部との場面変化を繰り返す。		

()分析

ここでは「パターン」という観点から両誌における場面の変遷を分析する。

「パターン」

図19は両誌における場面の変遷をパターン別に集計した結果を示したものである。また図20は表の結果をもとに両誌の各パターンの割合を示したものである。これより専門誌の場面の変遷はパターン が42%とパターン が26%との2パターンに集中していることがわかる。両パターンに共通しているのは場面の始まりが外部であることである。一方、一般誌の場面の変遷は専門誌と比較してパターンが分散している。

パターン	一般誌	専門誌	パターン	一般誌	専門誌
	9	8		13	2
	27	39		12	25
	4	2		11	11
	20	9	計	96	96

図19 両誌における場面の変遷パターンの集計結果

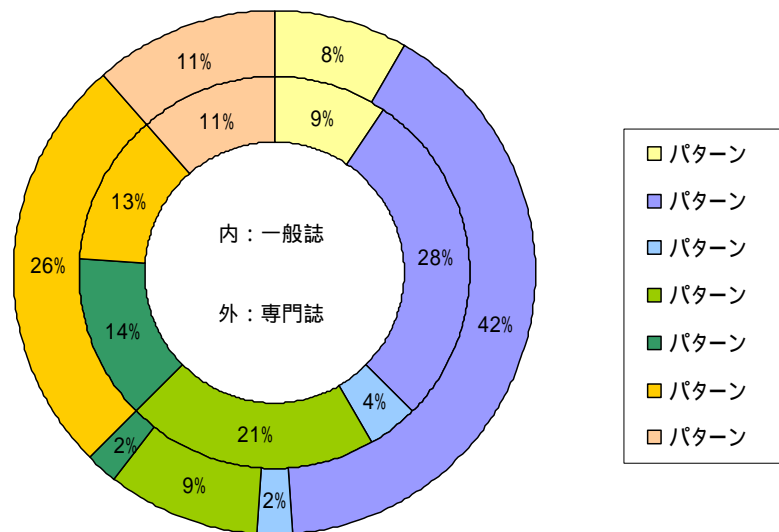


図20 両誌における場面の変遷パターンの割合

() 考察

以上から場面の変遷による両誌の特質として「自由と定式」が挙げられる。

「自由と定式」

『新建築』はニュース性を重視し、それを「記録する」ということが編集方針をもとにいつの時代にその誌面を見ても時代特性や社会背景が見えてこない作品だけの情報が伝わるように誌面を構成する²⁰⁾という特徴がある。この傾向が「パターン」の分析から見ることができた。専門誌は外側から内側へ(あるいはその繰り返し)と場面が変化するパターンで記述が構成されている。そのため専門誌では場面の変遷に関して記述構成が定式化されていると考えられる。一方、一般誌では専門誌と比較してそうした定式にはまらず、パターンが分散している。これから毎号特集が組まれる一般誌は特集に合致する建築作品の特徴的な場面の変遷を思案し臨機応変に記述構成を変化させていると考えられる。

【注釈】

1) ただし場面の判断が不可能な記述など条件に該当しない記述は対象外とした。

第 4 章 結

4-1. 結

ここまで述べてきたように一般誌と専門誌との建築作品の説明文を比較することで次のようなことが判明した。

- (1) 一般誌の表題は「用途」という使用者側の観点から設定されているのに対し、専門誌の「表題」は手法というつくる側の観点から設定されている。
- (2) 専門誌の数値表現では建築の属性として精確な値が提示されるのに対し、一般誌の数値表現では使用者が知覚可能な数値が提示されている。
- (3) 一般誌は建築家名を積極的に登場させることで建築家のブランドイメージ形成を促進させている。
- (4) 一般誌は比喩表現を用いることで抽象的・専門的な言葉を読者にとって理解しやすいものになっている。
- (5) 擬音語・擬態語により一般誌は「人」の感情に則した表現をしている。
- (6) 一般誌は体言止めを使用することで「印象」を重視した表現を強調している。
- (7) 施主・利用者に関する記述は一般誌では多く、かつ竣工後の実際の利用状況を中心に取り上げているのに対し専門誌は竣工前の建築家と施主の関係を中心としている。
- (8) 場面変化から一般誌は定式にはまらない構成が多いのに対し、専門誌の記述構成には定式が見られる。

以上から両誌の特質として次のようなことが言える。

一般誌の説明文は読者の存在を強く意識した使用者側からの視点を中心に建築家のブランドイメージの構築や建築と異分野とを関連させる表現、特集や雑誌の特性に合致した言葉の選択など建築の新しい可能性を追求している。一方、専門誌の説明文は建築家側からの視点を軸とし、さらに長年の歴史から確立された編集方針を尊重し、記録性や規則性に則した記述表現をしている。

上記の結果及び専門誌の衰退と一般誌の隆盛という事実より建築家が日常収集する情報における価値基準の変容の一端を示すものであろうと考える。これまで建築家は専門誌から多くの影響を受けて設計を行ってきた。だが一般誌の登場により「現役の建築」^{文21)}の価値の認識や一般的視点からの評価という利用者の視点に立った建築価値観が新たに発生した。それにより建築家は専門家の評価だけでなく建築知識を得た施主や利用者という新たな評価基準の下で設計を行う状況にある。それに伴い建築の作品性に加え建築と関わる人間(施主や利用者)を中心に据えた建築が要求されるようになってきたと考える。また現在の建築家が専門誌から受けてきた影響と同様に一般誌からの情報は将来の建築家の建築意匠設計に少なからず影響を与えられられる。

【参考文献・参考資料】

- 1) 15) 21)大野秀敏 (1997)「建築評価のフレームワーク建築評価のフレームワーク」『建築の新たな評価軸を求めて---4つの集合住宅を例として-----』日本建築学会(大会研究協議会資料)
- 2)ロラン・バルド著,佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房,1972
- 3)奥山信一,大成優子(1997)「建築誌におけるポストモダニズムに関する言説」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.255-256
- 4)奥山信一,大村卓,谷川大輔(2001)「建築家の設計論にみられるアナロジー」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.559-562
- 5)小林陽一,谷川大輔,奥山信一(2002)「住宅作品の解説文にみられる環境要素」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.557-560
- 6)大西康文,奥山信一,谷川大輔(2003)「近年の建築家の言説にみられる建築家の存在意義」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.271-272
- 7)塩崎太伸,奥山信一(2003)「建築家の言説にみられる対概念の内容と形式」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.261-264
- 8) 14) 20)花田佳明,新宮岳(2004)「雑誌・『都市住宅』研究 編集長植田実の時代を軸に」神戸芸術工科大学大学院
- 9)近藤正一,津田愛子,北山啓介,若山滋(2001)「現代ジャーナリズムにおける住宅記述に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.651-652
- 10) 12) 19)TOTO,(2004)「ギャラリー間100回展『この先の建築』シンポジウム」(http://www.toto.co.jp/gallerma/100times/rpt_b2.htm) 2006年10月22日取得
- 11)建築雑誌オールレビュー,細野透他(<http://pf1.jp/blog/index.php?cID=1>) 2006年8月22日取得
- 13)奥山信一,鷺海達矢,横山天心,塩崎太伸(2006)「ライフスタイル誌に掲載された住宅のメインコピー」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.587-588
- 16)浅野鶴子,金田一春彦著,『擬音語・擬態語辞典』角川書店,1988
- 17)渡辺富美雄,村石昭三,加部佐助編著『日本語解釈活用辞典』ぎょうせい,1993
- 18)竹田 青嗣著『はじめての哲学史』有斐閣,1998,146-147

【その他の参考文献】

- ・エイドリアン・フォーティ著,坂牛卓他監訳『言葉と建築 語彙体系としてのモダニズム』鹿島出版会,2006
- ・石井和紘『建築家の発想』鹿島出版会,1982
- ・ウィリアム・W・コーディル等著,六鹿正治訳『建築鑑賞入門』鹿島出版会,1979
- ・飯島洋一『映画のなかの現代建築』彰国社,1996
- ・佐々木健一『美学辞典』東京大学出版,1995,pp.236-244
- ・ロラン・バルト著,渡辺淳,沢村 昂一訳『エクリチュールの零度』みすず書房,1971
- ・下出源七編『建築大辞典 第6版』彰国社,1981
- ・松岡正剛著『知の編集術』講談社,2000

【参考建築雑誌】

CasaBRUTUS		
発行年	号	ページ
1999	SPRING	28
2000	SUMMER	20
2001	1	13
2001	3	24
2001	3	26
2001	3	135
2001	3	39
2001	8	64
2002	4	48
2002	4	66 - 67
2002	7	39
2002	9	103
2002	9	104
2002	9	105
2002	9	106
2002	9	107
2002	9	108
2002	9	110
2002	9	115
2002	9	120
2002	9	121
2002	9	124 - 125
2002	9	126
2002	9	131
2002	9	132
2002	9	134
2002	10	17
2002	11	27
2002	11	68
2002	12	102 - 103
2003	1	23
2003	3	17
2003	7	73
2003	7	74
2003	7	78
2003	7	80
2003	8	42
2003	8	58
2003	8	59
2003	8	62
2003	8	63
2003	8	64
2003	9	174

発行年	号	ページ
2004	1	15
2004	3	28
2004	3	30
2004	3	32
2004	3	37
2004	3	38
2004	3	41
2004	3	46
2004	3	52
2004	3	53
2004	3	54
2004	3	66
2004	7	25
2004	8	110 - 111
2004	10	35
2004	10	57
2004	10	62
2004	10	64
2004	10	156 - 157
2004	12	55
2004	12	75
2004	12	78
2005	2	22
2005	2	28
2005	2	30
2005	2	34
2005	2	38 - 39
2005	2	42
2005	2	44 - 46
2005	2	58 - 59
2005	2	60
2005	2	72
2005	2	109
2005	2	111
2005	2	117
2005	2	182
2005	2	184
2005	2	186
2005	2	188 - 189
2005	4	104
2005	4	105
2005	4	112
2005	4	113
2005	5	67
2005	5	114
2005	5	116
2005	5	117
2005	5	77 - 78
2005	5	135
2005	10	105
2005	10	172 - 173
2005	10	177
2005	11	230

新建築		
発行年	月	ページ
1989	5	297
1990	1	100
1990	7	276-277
1992	7	261
1993	1	212
1993	7	202
1994	2	144 - 145
1994	7	160
1994	9	153
1995	7	163 - 164
1995	11	184 - 185
1996	1	124
1996	3	149
1996	9	116
1996	11	194
1999	5	145
1999	10	183
2000	4	98-99
2000	7	62 - 63
2000	8	173
2000	9	94-95
2000	9	104 - 105
2000	12	145
2001	1	88 - 89
2001	3	102
2001	5	78 - 79
2001	7	137
2001	7	168
2001	8	84-85
2001	11	123
2001	12	99
2002	3	90 - 91
2002	5	150-151
2002	7	60
2002	7	148
2002	9	100
2002	9	108
2002	9	152
2002	9	181
2002	11	123
2003	1	62
2003	2	171 - 173
2003	3	170
2003	5	80 - 81
2003	5	121
2003	5	135
2003	7	167
2003	8	54
2003	8	100
2003	8	105
2003	9	50, 53
2003	9	164
2003	9	181
2003	10	89

発行年	月	ページ
2004	1	69
2004	1	135
2004	7	53
2004	7	58 - 59
2004	7	89
2004	7	102 - 103
2004	9	80
2004	9	147
2004	9	189
2004	11	31
2004	11	80
2004	11	85
2004	12	80
2004	12	147
2005	1	83
2005	1	97
2005	2	111
2005	4	62 - 63
2005	5	133
2005	5	166
2005	5	163
2005	6	155
2005	8	163

新建築住宅特集		
発行年	月	ページ
1999	6	156
2000	4	43
2001	8	45
2003	10	24
2003	10	82
2003	11	37
2004	3	108 - 109
2004	3	142
2004	4	33
2004	5	68
2004	7	69
2004	7	83
2004	8	126
2004	9	28
2004	10	52
2004	11	42 - 43
2005	1	55
2005	3	33
2006	1	146

建築意匠設計における建築雑誌の役割に関する研究

-建築一般誌と建築専門誌の作品説明文から読み取れる両誌の特質分析-

坂牛研究室 05TA324D 高橋伸幸

1. 序

1-1. 研究の背景

定期的に最新の建築作品を紹介している建築雑誌は建築意匠設計に大きな影響を与えているメディアのひとつといえる。このような建築雑誌は大きく建築一般誌と建築専門誌の2つに分類することができる。建築専門誌は専門家向けの充実した内容が特徴である。また建築一般誌は広く一般の人を対象としたわかりやすい誌面と分野を超えた社会と遊離しない内容が特徴である。近年、両誌の状況が各々大きく変化している。

90年代後半までの意匠に関わる建築雑誌の主流は『新建築』『建築文化』『SD』『都市住宅』などの建築専門誌であった。しかし同時期を境に上記4冊の雑誌は『新建築』を除き休刊となり、建築専門誌は全体として縮小の方向へと進んでいる。そこに建築専門誌と入れ替わるようにして『CasaBRUTUS』をはじめとする8冊¹⁾の建築一般誌が次々と創刊され、建築雑誌の中での地位を確立し始めている。その要因として挙げられるのは一般読者の需要に応えた誌面づくりである。その結果、建築専門誌では少なかった一般読者を取り込むことに成功した。それに伴い一般の人たちの建築に対する意識は建築専門誌主流の時期に比べて高くなりつつある。さらに、そうした一般読者が建築一般誌から得た知識をもとに建築家に仕事を依頼する場合が増加している。そのため建築家は建築意匠設計を行う上で建築一般誌の影響力を無視することはできなくなりつつある。

また東京大学教授である大野秀敏によれば仲間内での評価や建築をその作品性でしか捉えない体制が成立している建築界にとって建築界外からの評価を携えている建築一般誌の登場は悲願であったと指摘している。²⁾

1-2. 研究の目的

上記のような背景から建築一般誌と建築専門誌との比較を通じ、建築一般誌の情報伝達の特徴を理解し、建築意匠設計の構造の一端を明らかにすることを目的とする。

1-3. 既往研究

ロラン・バルトは著書『モードの体系』³⁾においてファッション雑誌に掲載されているファッションの説明文に注目しその分類・分析を行った。また建築雑誌を対象とした研究は行われているがその多くが建築専門誌を研究対象としたものである⁴⁾。また少数ながら建築一般誌の研究はあるがその研究対象は主として住宅である⁵⁾。本研究はこれと異なり建物用途による対象の制限を行っていない。

1-4. 研究対象

建築雑誌では文章と写真の2種類の方法で建築の情報を読者に提供している。文章が不可視の媒体であるのに対して写真は可視の媒体である。その意味で文章の情報伝達力は視覚性において劣るものの写真では伝えきれない建築家の思想や施主の要求、周辺環境の歴史などの情報を伝達可能にする。そこで本研究では建築

一般誌と建築専門誌の作品説明文を研究対象とする。また建築一般誌の代表としてマガジンハウス出版の『CasaBRUTUS』(以下、一般誌と表記)を選択する。その理由は建築一般誌の中でCasaBRUTUSが現在の建築ブームの火付け役となったと言われているためである。⁶⁾調査範囲は創刊(1998年)から69号(2005年12月)までとする⁷⁾。次に建築専門誌の代表として新建築出版の『新建築』、『新建築住宅特集』(以下、専門誌と表記)を選択する。その理由は現在発刊中の建築専門誌の中で最も歴史が古いためである。さらに上記の前提をもとに両雑誌ともに掲載されている、説明文が8文以上で構成されている⁸⁾、という2つの条件を満たす建築作品説明文を分析対象とした。⁹⁾

2. CasaBRUTUSの特徴

2-1. CasaBRUTUSの編集方針

『CasaBRUTUS』は、マガジンハウス出版の建築やデザインなど、衣食住をテーマにした雑誌である。もともとは同社から発刊されている『BRUTUS』の特別増刊号であった。それが1998年12月から季刊誌として創刊された。その後7号発行の後、2000年11月号より月刊誌となり現在に至る。マガジンハウス編集長である吉家千絵子氏は『CasaBRUTUS』の特徴を以下のように述べている。

『カーサブルータス』編集部ではあくまでも一般誌であると位置付けている『CasaBRUTUS』(中略)編集手法は大きく2つある。第一が、徹底的に「かっこいい」ことである。(中略)第二に、「徹底して情報収集を行うこと」。(中略)誌面では、収集した大量の情報を、全く知らない立場から質問するように、鋭く切り込んでいる。(中略)「わかりやすい表現」を信条とする『CasaBRUTUS』では専門誌が専門という枠に縛られ、自らの編集方針をあれこれ模索する一方で、自由な表現を獲得したのである。⁶⁾

2-2. CasaBRUTUSのテーマの推移

CasaBRUTUSの内容の変化を4つの期間に区分し、各特徴を以下に記す。

・特別増刊期

雑誌『BRUTUS』の誌面で取り上げたさまざまな国の人間たちのさまざまなライフスタイルを再編集しまとめたものがCasaBRUTUSの出発点である。その内容の中心は海外の家具や家電などのインテリアの紹介であった(図1)。

・季刊期(1998年冬号~2000年夏号)

建築作品よりもファッション商品紹介やデザイナーによるインテリア、世界の食など生活全般のデザインに関する特集と誌面づくりが主に行われる。建築作品は海外のものが中心であり、日本人建築家が手掛けた建築作品の紹介は稀であった(図2)。

図1¹⁰⁾



図2¹⁰⁾



・月刊期（2000年11月号～2003年12月号）

季刊期の特集に加え建築を美術館やホテルなど用途別に着目する特集が組まれる。これに伴い安藤忠雄をはじめとする日本建築家の建築作品が多く登場するようになる。その結果、建築が誌面上で占める割合が大きくなる（図3）。

図3¹⁰⁾



・月刊期（2004年1月号以降）

2004年より住宅の特集が組まれる。また誌面の構成は建築作品が軸に置かれ、ファッションや食などの他分野と建築とを融合させた特集も増えるようになる。さらに雑誌の舞台として日本国内が中心となり、より日本人建築家に注目するようになる（図4）。

図4¹⁰⁾



2-3 小結

以上から『CasaBRUTUS』の内容は生活を軸に置く誌面構成から年代を重ねるごとに建築を全面に押し出した誌面構成へ推移している。具体的には誌面内容の比重が海外から日本へと移り変わり、それに伴い日本建築家の建築作品が充実し頻出するようになった。また積極的に建築と他分野とを関連させる特集への挑戦は創刊されてから9年と歴史の浅い『CasaBRUTUS』だからこそ可能な試みであると考えられる。次章より『CasaBRUTUS』（一般誌）の作品説明文を専門誌と比較・検討する。

3. 分析・考察

3-1. 分析対象

1-4の対象条件に該当した96の建築作品の説明文を分析対象とする。両誌の文章量は合計で一般誌が1707文（1作品平均17.78文）、専門誌が2743文（1作品平均28.57文）であり、一般誌の文章量が専門誌の約半分である。以下、この点を考慮し両誌の差異を明瞭にすると思われる「表題」「特徴的な単語」「修辞技法」「記述内容の特徴」の4項目について分析・考察を行う。

3-2. 表題

誌面において読者が最初に注目する記述は表題である。また表題には書き手側の文章上での意図が反映されている場合が多い。表1は両誌の表題を構成する要素の集計結果である。これから分かるとおり一般誌は専門誌と比べ表題をつけている記述が多く、またその内容の要素は多岐に渡る。さらに要素別に見ると一般誌の表題は「用途」の該当数が40であり専門誌の該当数7と比べ、また他の要素と比較して特に多い（例 海に浮かんだようなヨット小屋）。一方、専門誌の場合は「手法」に同様のことが言える（例 リノベーション/意味の真空状態）。これらより一般誌は「用途」という使用者側の観点から、専門誌は「手法」というつくる側の観点から表題が設定される傾向があると考えられる。

3-3. 特徴的な単語

文章中には読者に特に強い働きかけをする単語が存在する。この項目では「具体的数値」「固有名詞」の2項目を特徴的な単語として順次検討する。

3-3-1 具体的数値

文章中において具体的数値は情報を正確に読者へ伝達する手段として有効である。特に建築作品においては面積や高さ、年月など数値で表される要素は多い。表2は具体的数値の指示内容別

要素	一般誌	専門誌
1 用途	40	7
2 地名	14	1
3 建築家	13	0
4 素材	11	3
5 環境	15	6
6 条件	8	1
7 形状	2	2

表1 両誌の表題構成要素

要素	一般誌	専門誌
8 手法	10	23
9 建築家	2	5
10 構成	2	3
11 構造	4	4
12 比喩	11	4
13 印象	6	0
14 喚起	3	0
計	141	59

第1概念	第2概念	第3概念	第4概念	第5概念	一般誌	専門誌	例
建築関連	構造	部分	壁	枚数(層)	9	3	三重壁
				幅・厚み	0	11	15cm幅
				高さ	1	5	高さ1.2mの壁
				長さ	0	2	全長64.7mの壁
				間隔	0	1	壁から3m
				デザイン	0	2	100mmグリッド

表2 具体的数値(項目:建築関連-構造-部分-壁)

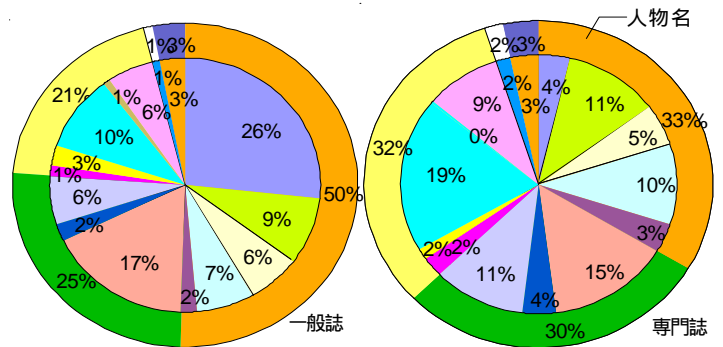


図5 両誌の固有名詞の割合

に分類した内容の特徴的な項目（建築関連-構造-部分-壁）を取り上げたものである。これより「壁の厚み」や「壁の高さ」などの項目における数値の使用は専門誌において多い。しかし「壁の枚数」の項目では一般誌の方が専門誌の該当数を上回っている。このことから一般誌の用いる具体的数値は本数や回数など器具を用いることなく知覚できる数値であり、専門誌の用いる具体的数値の多くは人間一般の知覚では捉えきれない（器具を用いて計測可能な）数値であると考えられる。即ち、これらの傾向は一般誌の「わかりやすさ」の追求と専門誌の「正確性」の追求を示唆しているといえよう。

3-3-2. 固有名詞

固有名詞の持つ情報は普通名詞にはない説得力が存在する。図5は両誌における固有名詞を内容別に分類し、その比率を示したものである。これより人物名の割合が一般誌では50%と専門誌では33%と大きな差が見られる。この人物名の一般誌における最大要素は当該建築家名であり、一般誌で26%、専門誌で4%とその差は6倍以上である（例 安藤忠雄が初めて手掛けた）。ここから一般誌では建築家を建築作品の製作者としてだけでなく建築家個人を積極的に取り上げ、読者に印象付けるといった意図が読み取れる。これに伴い建築家の印象や知名度は大きく変化し、結果として建築家の建築作品や設計論をファッションブランドと同様のブランド化するという効果を発生させると考えられる。

3-4. 修辞技法

3-1で記したように専門誌の1作品における説明文の文量に対して一般誌のそれは約6割である。そこで一般誌は少ない文章量で読者に十分な情報を提供するために修辞技法を用いている。それらは「**比喻表現**」「**擬音語・擬態語**」「**体言止め**」の3項目であり以下順次検討する。

3-4-1. 比喻表現

比喻表現を使用することで書き手は読者に実際の様子を具体的に想像させることが可能となる。特にその表現内容が読者にとって身近であるほど大きな効果を生む。表3より両誌における比喻表現の使用回数は一般誌が91回、専門誌が93回であり、文章量を考慮すると一般誌の方が2倍近い頻度で比喻表現を使用していることがわかる。また同表より両誌共に直喩の該当数が多いことから以下、直喩に着目した分析・考察を進めていく。図6は直喩の表現内容の割合を示したものである。これより特徴的な差異が出現したのは「**ファッション**」と「**自然**」の項目である(例 ドレスのようなアクリルスクリーン、明るい森のような空間)。両項目ともに一般誌が専門誌よりも高い割合である。これらは建築を建築外概念によって説明しようとする一般誌の特徴が反映しているものと考えられる。さらに表4は直喩の対象を項目別に集計したものである。同表より一般誌では「**空間**」と「**構造**」の2項目が専門誌と比べ比喻対象となりやすい傾向にあることがわかる(例 海草のような柱、別世界のような空間)。このことは一般誌においては「**空間**」の抽象性、「**構造**」の専門性をわかりやすくするために比喻表現が用いられていると考えられる。

	一般誌	専門誌
直喩	64	69
隠喩	24	19
擬人法	3	5
合計	91	93

表3 両誌の喩の種類

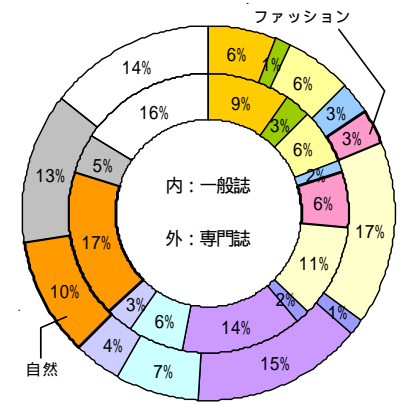
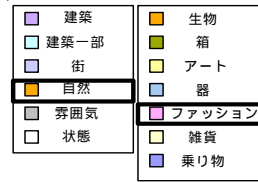


図6 両誌の喩表現内容(直喩)

	建築自体	空間	構造	素材	その他	計
一般誌	17	18	15	6	8	64
専門誌	27	17	9	5	11	69

表4 両誌の喩表現対象(直喩)

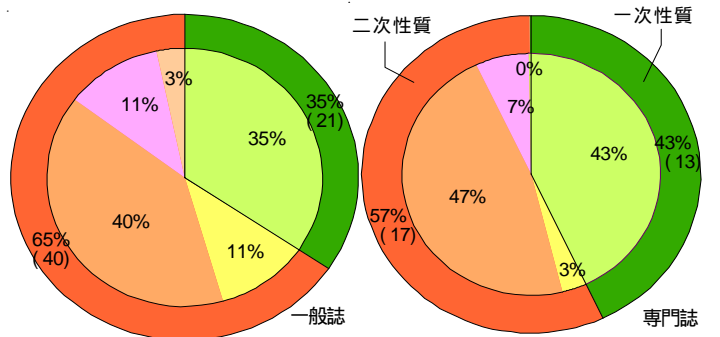
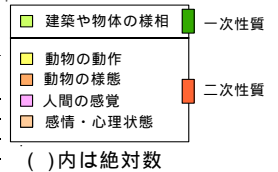


図7 両誌の擬音語・擬態語使用パターンの割合比較



	一般誌	専門誌	
一次性質	建築や物体の様相	21	13
	動物の動作	7	1
二次性質	動物の様態	24	14
	人間の感覚	7	2
	感情・心理状態	2	0
計	61	30	

表5 両誌の擬音語・擬態語使用パターンの集計結果(単位:回)

3-4-2. 擬音語・擬態語

擬音語・擬態語を用いることで物事を生き生きと表現できる効果や物事に対し読者が親近感を抱く効果が生まれる。表5より両雑誌における擬音語・擬態語の使用回数は一般誌61回、専門誌30回であり、文章量を考慮すると4倍の頻度で一般誌の記述に登場していることがわかる。図7は擬音語・擬態語の使用パターン¹⁾を示したものである。考察を行う上で哲学者ジョン・ロックの単純観念は有効である²⁾と考える。これを参考に建築や物体の様相を示す擬音語・擬態語(例 バラバラ、ずっしり)を一次性質、人間の感覚を示す擬音語・擬態語(例 ひんやり、ニッコリ)を二次性質とした。図7から一般誌において二次性質が65%と専門誌の57%よりも比較的多く、頻度で見れば約4倍である。つまり一般誌では人間の感情や感覚を表現する擬音語・擬態語を多く使用している。このことは一般誌では「**人**」の感情に則して情報を読者に強調して伝達していることを示している。

3-4-3. 体言止め

体言止めとは、「設計は有名な伊東豊雄。」のように末尾を名詞(代名詞)で終わらせることで読者に文章の余韻を残すことができる修辞技法である。両誌における体言止めの使用回数は一般誌348回、専門誌74回であり、文章量を考慮すると一般誌において9倍以上の頻度で使用されている。即ち、一般誌は体言止めを活用することで専門誌よりも「**印象**」に残る記述作成を心掛けていると考えられる。

3-5. 記述内容の特徴

以下記述内容の特徴を分析する上で「**施主・利用者**」「**場面の変遷**」の2項目に注目し順次検討を行う。

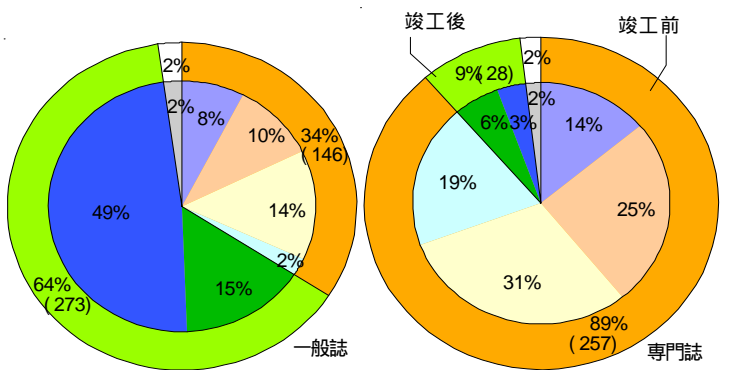


図8 両誌の施主利用者に関する記述の割合比較

	一般誌	専門誌	
竣工前	施主のデータ	33	41
	施主の要望	44	73
	建築家の提案	60	88
	建築家の希望	9	55
竣工後	施主の利用状況	65	18
	第三者による利用状況	208	10
計	428	291	

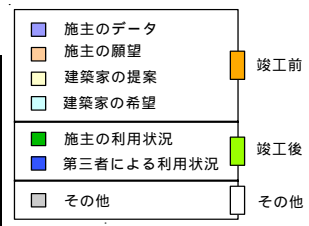


表6 両誌の施主・利用者に関する記述の集計結果(単位:文)

3-5-1. 施主・利用者

作品説明文中に登場する人物の中で読者に最も近い存在は施主・利用者である。表6は竣工前後を基準に施主・利用者に関する記述をその内容に則して分類・集計したものである。表より両誌における施主・利用者に関する記述は一般誌428文、専門誌291文であり、文章量を考慮するとこれらの文章は一般誌に4倍の頻度で登場することがわかる。図8は両誌の施主・利用者に関する文章における項目別の比率を示したものである。これより一般誌では64%と竣工後の割合が多く、専門誌では竣工前の割合89%と非常に高いという対照的な傾向が読み取れる。この結果から一般誌と専門誌の着目する位相が異なることがわかる。一般誌では竣工後の第三者による利用状況が施主・利用者に関する記述の中心となっている（例 めるめのお湯の中で水に漂うクラゲの浮遊感を味わい、身も心も解き放たれた）。一方、専門誌では竣工前の施主と建築家の関係が施主・利用者に関する記述の中心である（例 「屋根の上でご飯を食べたい」との希望を出したのはクライアント側である）。

以上より専門誌と比較し一般誌が施主・利用者を中心とした記述が多いことがその文章量およびその内容（利用状況）の2つの側面から明らかとなった。

3-5-2. 場面の変遷

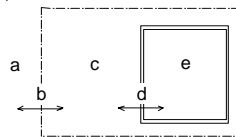
記述中で場面が移り変わる順序は雑誌の特徴が如実に表れている要素のひとつである。図9の条件をもとに説明文中の場面を設定し、図10に則した図を作成した（例 敷地外の場面から変化しないパターン）。その結果、図11のように場面の變遷を7つのパターンに分類することができた。これより専門誌は主としてパターン 及び の説明文が多いことがわかる。一方、一般誌では比較的パターンが分散している。このことから専門誌は外側から内側へ（あるいはその繰り返し）と場面が変化していくという記述構成の定式が多く見られるのに対し一般誌はそうした定式にはまらないものが多い。

4. 結

ここまで述べてきたように一般誌と専門誌との建築作品の説明文を比較することで次のようなことがわかった。(1)一般誌の表題は「用途」という使用者側の観点から設定されているのに対し、専門誌の表題は「手法」というつくる側の観点から設定されている。(2)専門誌の数値表現では建築の属性として精確な値が提示されるのに対し、一般誌の数値表現では使用者が知覚可能な数値が提示されている。(3)一般誌は建築家名を積極的に記述中に登場させることで建築家のブランドイメージ形成を促進させている。(4)一般誌は比喩表現を用いることで抽象的・専門的な言葉を読者にとって理解しやすいものにしていく。(5)擬音語・擬態語により一般誌は「人」の感情に則した表現をしている。(6)一般誌は体言止めを使用することで「印象」を重視した記述表現を心掛けている。(7)施主・利用者に関する記述は一般誌において多く、かつ竣工後の実際の利用状況を中心に据えているのに対し、専門誌は竣工前の建築家と施主の関係を中心に据えている。(8)場面の變遷から一般誌は定式にはまらない構成が多いのに対し、専門誌の記述構成には規則性が存在している。

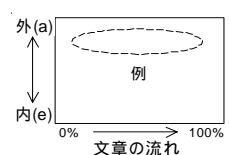
以上より一般誌の説明文は使用者側からの視点を中心に建築の

図9 場面設定条件



- a 敷地外
- b 敷地 - 敷地外
- c 敷地
- d 内部 - 敷地
- e 内部

図10 場面の變遷図



パターン	一般誌	専門誌	パターン	一般誌	専門誌
	9	8		13	2
	27	39		12	25
	4	2		11	11
	20	9	計	96	96

図11 両誌の場面の變遷パターン

新しい可能性を追求している。一方、専門誌の説明文は建築家側からの視点を軸とし、さらに長年の歴史から確立された編集方針を尊重している。

上記の結果及び専門誌の衰退と一般誌の隆盛という事実は建築家が日常収集する情報における価値基準の変容の一端を示すものであろうと考える。

【注・参考文献】

- 1) 95年以降に創刊した『pen』『室内』『CasaBRUTUS』『I'm home』『Memo 男の部屋』『LIVES』『都心に住む』『LIVING EXE』の8冊である。
- 2) 大野秀敏「建築評価のフレームワーク建築評価のフレームワーク」『建築の新たな評価軸を求めて--4つの集合住宅を例として--』日本建築学会(大会研究協議会資料),1997
- 3) ロラン・バルド著、『モードの体系』みすず書房,1972
- 4) 花田佳明,新宮岳「雑誌『都市住宅』研究 編集長植田実の時代を軸に」神戸芸術工科大学大学院,2004 他
- 5) 近藤正一,津田愛子,北山啓介,若山滋「現代ジャーナリズムにおける住宅記述に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集』pp.651 - 652, 2001 は数少ない建築一般誌を対象とした研究である。
- 6) http://www.toto.co.jp/gallery/100times/rpt_b2.htm「ギャラリー間 100 回展『この先の建築』シンポジウム」2006年10月22日取得。
- 7) 研究開始直前(2006年1月)までに発行されたもの。
- 8) 一般誌において作品説明文が7文以下で構成されているものが大半を占め、8文以上となると一般誌の中で建築の注目度が高いと言えるためである。
- 9) 分析対象の条件を満たした作品について1つの雑誌の中で重複した場合は文章量が多いほうを採用した。
- 10) 図1ブルーラス特別増刊号『CasaBRUTUS』1984年春号,図2『CasaBRUTUS』1999年冬号,図3『CasaBRUTUS』2003年9月号,図4『CasaBRUTUS』2005年2月号
- 11) 『日本語解釈活用辞典』にまとめられている擬音語・擬態語がどのような場合に使用されるかということを示す言葉。
- 12) ロックによれば単純観念を生み出す根拠(原因)はもともと物体側にあるとされる。物体自体には固性・延長・形状・運動などが備わっており、それを「一次性質」とし、他方、色・音・味などの単純観念は、あくまでも人間の感覚によって生み出される主観的な性質 = 「二次性質」としている。竹田 青嗣,『はじめての哲学史』有斐閣,1998,146-147